
プリキュアvsプリキュア

刹那・F・セイエイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアvsプリキュア

【Nコード】

N0490R

【作者名】

刹那・F・セイエイ

【あらすじ】

闇の力を倒し、正義の使者だったのもつかの間、何者かの陰謀により世界の敵に仕立てあげられたプリキュア。

突然世界から見捨てられ、友に裏切られ、少しずつ疲弊していくプリキュアたち。

そして最愛の家族さえ何者かの手により奪われ、ついにお互いを敵と見なし戦い出す。

この惨状を作り出した者達の陰謀とは…

そして、プリキュア達の未来は…

戦いへのプレリユード（前書き）

はじめまして、刹那・F・セイエイと申します。

この小説が初投稿のため、読みにくかったり、文法が支離滅裂だったりしますが、最後まで読んでいただければ光栄に存じます。

なお、設定においては本家の設定に準じますが、一部キャラクターの性格や交友関係など、一部改変されている箇所もございます。ご注意ください。

そして、今までのような『プリキュア達が協力して闇の力と戦う』という設定ではなく、『プリキュア達が憎しみ合いお互いを敵と見なし戦いあう』という設定となっているため、残酷な描写が出る場合がございます。

残酷な描写については、極力控えるつもりですが、観覧の際には十分ご注意ください。

戦いへのプレリユード

かつて、闇と光との壮絶な戦いがありました。

世界を破滅に導こうとする闇の力に対して、伝説の戦士『プリキュア』が勇敢に戦い、世界を救ったとされています。

世界を破滅から救ったプリキュアを、世界は救世主として崇め称えました。

その功績を称え、何本もの映画やアニメーション作品が作られたそうです。

タイトルは、もちろん『プリキュア』。

その映画やアニメーション作品では、闇の力は悪の権化として、プリキュア達は正義の使者として、徹頭徹尾分かりやすくまとめられました。

関連商品は文字通り飛ぶように売れ、ひとたび街に出歩けば、どこに行っても注目的、彼女達は闇の力を葬ったことで、一躍世界のスターになったのです。

しかし、そんな彼女達の順風満帆な生活は、そう長くは続きませんでした。

世界中各地での、プリキュア達によると思われる悪行の数々。

初めのうちは店の商品が盗まれる、子供達がいじめられるといった、比較的被害の軽いものから、次第に強盗、略奪、虐殺といった、思わず目を覆いたくなるような残忍な行為へとエスカレートしていき、それをマスコミが面白おかしく書き立てたために、プリキュア達は一夜にして、正義の使者から世界の敵となってしまう。

しかし、彼女達は知りませんでした。この一連の惨状が仕組まれたものであったということ...

戦いへのプレリユード（後書き）

次回から本編がスタートします。

キャラクター紹介（前書き）

『次回から本編』と言いつつ、キャラクター紹介を忘れていたのを
思い出した。

なんたる失態……………orz

キャラクター紹介

キュアブラック（美墨なぎさ）

光の園の戦士にして、すべてのプリキュア伝説の創始者。

ほのかとは、お互いに強い絆で結ばれたかけがえない親友。

ボーイツシユな外見や、やや男勝りな行動が目立つため、異性より同性にモテるのだが、なぎさとしてはあまり好ましいとは言えない。

必殺技は、鉄拳無限連打から右腕を大きく振り回しての右ストレート（ただし、叩き込んだだけのパワーが反作用で右腕一本に返ってくるため、諸刃の剣と言える）。

キュアホワイト（雪城ほのか）

光の園の戦士にして、すべてのプリキュア伝説の創始者。

なぎさとは、お互いに強い絆で結ばれたかけがえない親友。

クラス委員に選出されるほどの優等生で、日々なぎさのツッコミ役に立ち回るのだが、実際はそのツッコミ相手のなぎさにメンタル面で支えてもらっている。

必殺技は、連続旋風脚からしなやかな動きを駆使しての背負い投げ（光の園の戦士がキュアブラックとキュアホワイトの二人だけだからなのか、ブラックが豪腕、ホワイトが柔軟と、見事に二分された）。

シャイニールミナス（九条ひかり）

光の園のクイーンが、生命、心、十二の意志に分裂した際の生命の部分。
ハイティエル

クイーンの生命の部分が九条ひかりを形成しているため、厳密にはプリキュアではない。

必殺技は、ルミナス・ハイティエル・アンクシオン（この技は、敵に当たったときは足止め、味方であるプリキュアに当たったときはエネルギー回復と、随分と都合のいい必殺技である）。

キュアブルーム（日向咲）

七つの泉の守護者にして、『輝く金の花』こと大地のプリキュア。そこにいるだけで周りの雰囲気を明るくするムードメーカーであり、スポーツ全般を得意とするが、絵の才能は全くと言っていいほどない。

必殺技は、精霊の力を宿した連続パンチ（しかし、精霊の力を宿して力を底上げしているため、その恩恵を受けられない場合は、ほとんどダメージを与えることができない）。

キュアイーグレット（美翔舞）

七つの泉の守護者にして、『煌めく銀の翼』こと大空のプリキュア。感性豊かでカンも鋭く、他人の心情を察することができるが、一つの事に集中し出すと呼ばれても気づかないほどに周りが見えなくなる。

必殺技は、精霊の力を宿した高速移動（ただし、精霊の力のほとんどを推進力に回しているため、攻撃力はほぼ皆無に近い）。

キュアウィンディ（霧生薫）

七つの泉の一つの空の泉の元支配者にして、『大地に薫る風』こと風のプリキュア。

元はブルームとイーグレットとは敵対関係にあり、ウィンディの力も舞のパワーアップ形態のため、プリキュアの名と力を冠していないが、厳密にはプリキュアではない。

必殺技は、精霊の力を宿した真空波（しかし、精霊の力意外にも独自の力を有しているため、攻撃力はそれなりにある）。

キュアブライト（霧生満）

七つの泉の一つの空の泉の元支配者にして、『天空に満ちる月』こと月のプリキュア。

ウィンディ同様ブルームとイーグレットとは敵対関係にあり、ブライトの力も咲のパワーアップ形態のため、プリキュアの名と力を冠していないが、厳密にはプリキュアではない。

必殺技は、精霊の力を宿した万能エネルギー弾（しかし、ウィンディ同様精霊の力意外にも独自の力を有しているうえ、攻防一体の能

力のため、実は一番使い勝手が良かったりする)。

キュアドリーム(夢原のぞみ)

パルミエ王国の伝説の五人の戦士のうちの一人で、『大いなる希望の力』こと希望のプリキュア。

新しく入った部活をすぐ辞めたり、何もないとこで転んだり、かなりのドジだが、誰とでも仲良くなれるという特徴を持つ。

必殺技は、プリキュア・クリスタル・シュート(ほかに、プリキュア・シューティング・スターがあるが、こちらは腕をクロスさせ、ミサイルよろしく敵に向かって突っ込んでいくかなり痛そうな必殺技である)。

キュアルージュ(夏木りん)

パルミエ王国の伝説の五人の戦士のうちの一人で、『情熱の赤い炎』こと情熱のプリキュア。

フットサル部のエースとして入部し、アクセサリ作りが目覚めてからは、部活動に励みつつ、店の手伝いをしたり、双子の弟妹の面倒を見たり、アクセサリ制作にも打ち込み、あげくその傍らプリキュアとして戦わなくてはいけないというブラック企業真っ青のハードスケジュールを送っている。

必殺技は、プリキュア・ルージュ・バーニング(ほかに、プリキュア・ファイヤー・ストライクがあるが、こちらはエネルギーを丸めてフットサルのシュートよろしく叩き込むという、フットサルの能力が活かされた必殺技である)。

キュアレモネード(春日野うらら)

パルミエ王国の伝説の五人の戦士のうちの一人で、『はじけるレモンの香り』ことはじけるプリキュア。

のぞみに救いの手を差し伸べられた一件があるためか、彼女のことを慕っており、時に崇拜レベルに及ぶほどの慕いようである。

必殺技は、プリキュア・レモネード・シャイニング(ほかに、プリキュア・プリズム・チェーンがあるが、こちらは相手を光のチェインで拘束し、エネルギーをゼロ距離から叩き込むという、いろん

な意味で恐ろしい必殺技である)。

キュアミント(秋元こまち)

パルミエ王国の伝説の五人の戦士のうちの一人で、『安らぎの緑の大地』こと安らぎのプリキュア。

食べ物にやたら羊羹を入れようとしたり、突然探偵服に着替えて的外れな推理探偵を演じてみたりと、五人の戦士の中では一番先の行動が読めない。

必殺技は、プリキュア・ミント・シールド(ほかにも、プリキュア・エメラルド・ソーサーがあるが、こちらはオーラを薄い円盤状に形成して敵に投げつけるやけに物騒な技なのだが、決して防御用のシールドを敵に投げつけているわけではないので勘違いしないでいただきたい)。

キュアアクア(水無月かれん)

パルミエ王国の伝説の五人の戦士のうちの一人で、『知性の青き泉』こと知性のプリキュア。

五人の戦士の中では一番のいじられキャラで、うららを応援する際の『L・O・V・E』のEを必死に表現しようとしたりと、生徒会長でありながら、結構かわいげがある。

必殺技は、プリキュア・アクア・トルネード(ほかにも、プリキュア・サファイア・アローがあるが、こちらは水のエネルギーを弓矢に変えて敵を射るというもので、アクアリボンをビームサーベルよろしく使ってみたりと、なぜか手持ち武器と縁が深い)。

ミルキイローズ(美々野くるみ)

ある日青いバラの種を手に入れ、愛情こめて育てているうちにいつの間にか人間に変身できるようになった準お世話役のミルク。

元がマスコットキャラクターのミルクであるため、ひかり、満、薫同様、プリキュアとして数えられない。

必殺技は、ミルキイローズ・ブリザード(青いバラの花吹雪を巻き起こして敵を包み込み、一瞬で粉碎する技で、バラはわかるのだが、なぜ青でなければならないのかは不明)。

ちなみに、名前の由来は『みるくのみみ』の逆さ読み。

キュアピーチ（桃園ラブ）

『ピンクのハートは愛ある証』の、もぎたてフレッシュなプリキュア。

自分よりも他人の幸せのために行動する主義で、誰かのために行動することに生き甲斐を感じている。

必殺技は、プリキュア・ラブサンシャイン（ちなみに、彼女専用のアイテムのピーチロッドを触媒とした場合は、プリキュア・ラブサンシャイン・フレッシュとなり、強力な浄化技となる）。

キュアベリー（蒼乃美希）

『ブルーのハートは希望のしるし』の、つみたてフレッシュなプリキュア。

どんな時でも信念を忘れず、仲間たちを引っ張っていくリーダー的存在。

必殺技は、プリキュア・エスポワールシャワー（ちなみに、彼女専用のアイテムのベリーソードを触媒とした場合は、プリキュア・エスポワールシャワー・フレッシュとなり、強力な浄化技となるが、肝心のベリーソードが頻繁に壊れて困としてキュアベリーの手を離れるため、ラブサンシャイン・フレッシュより使用回数が少ない）。

通称、美希たん。

キュアパイン（山吹祈里）

『イエローハートは祈りのしるし』の、とれたてフレッシュなプリキュア。

親に似ておっとりした性格ののんびり屋だが、自分に自信が持てずやや引つ込み思案。

必殺技は、プリキュア・ヒーリングプレーア（ちなみに、彼女専用のアイテムのパインフルートを触媒とした場合は、プリキュア・ヒーリングプレーア・フレッシュとなり、強力な浄化技となるが、なぜ楽器に路線変更したのかは不明）。

通称、ブッキー。

キュアパッション（東せつな）

『真つ赤なハートは幸せのしるし』の、熟れたてフレッシュなプリキュア。

生真面目で優しく、健気で聡明な性格だが、やや天然ボケ。

必殺技は、プリキュア・ハピネス・ハリケーン（ちなみに、彼女専用のアイテムのパッションハープは先述の必殺技で使用しているため、これ以上の強化は望めないが、彼女のプリキュアとしての覚醒がもう少し早ければ『プリキュア・ハピネス・ハリケーン・フレッシュ』となっていた可能性もある）。

通称、せつちゃん。

キュアブロッサム（花咲つぼみ）

ハートキャッチプリキュアと呼ばれる四人のプリキュアの一人で、

コンセプトは『大地に咲く一輪の花』。

基本的なおとなしく内向的な性格なのだが、当人はそんな性格を変えようとファッション部に入部する。

必殺技はプリキュア・ピンクフォルテウェイブ（ちなみに、通常技はおしりパンチ、スクリューパンチ、ぜんぶパンチと、なぜかパンチに定評がある）。

キュアマリン（来海えりか）

ハートキャッチプリキュアと呼ばれる四人のプリキュアの一人で、

コンセプトは『海風に揺れる一輪の花』。

言いたいことをはっきり言うまっすぐな性格をしているが、そのまっすぐな性格のせいで相手を傷つけることもしばしば。

必殺技はプリキュア・ブルーフォルテウェイブ（ちなみに、通常技はマリン・ダイナマイト、マリン・ダイブ、おでこパンチと、なぜか衝撃系の技に定評がある）。

キュアサンシャイン（明堂院いつき）

ハートキャッチプリキュアと呼ばれる四人のプリキュアの一人で、コンセプトは『陽の光浴びる一輪の花』。

女子でありながら、病弱な兄に代わって明堂院流の後継ぎとなるた

め、男装をして一人称も『僕』としている。

必殺技はプリキュア・ゴールドフォルテバースト（ちなみに、通常技はサンフラワー・イージス、サンフラワー・プロテクションと、5の頃のミントに近い）。

キュアマーンライト（月影ゆり）

ハートキャッチプリキュアと呼ばれる四人のプリキュアの一人で、コンセプトは『月光に冴える一輪の花』。

四人のプリキュアの中では最年長で、ブロッサム、マリン、サンシヤインの三人が活動する前からプリキュアとして単身砂漠の使徒と戦っていた。

必殺技はプリキュア・シルバーフォルテウェイブ（ちなみに、通常技は他の三人に比べて非常に少ないものの、ムーンライトリフレクションが相手のエネルギーを反射するタイプなので、サンフラワー・イージスより攻撃的な技となっている）。

キャラクター紹介（後書き）

今度こそ次回から本編が始まります。

#00 終わる戦い、はじまる平和（前書き）

前回の予告通り、本編がスタートします。

#00 終わる戦い、はじまる平和

パラレルワールドというものをご存知だろうか。医療技術が著しく進歩した世界、機械技術が進歩した世界、宇宙開発の進んだ世界と、実にさまざまである。そして、本作のプリキュアもそのパラレルワールドのひとつであり、とある世界ではプリキュア とある特撮ヒーロー たちが一堂に会し、すべてのプリキュア世界を破壊しようとする悪の組織から世界の破壊を防ごうとしようとする世界もある。

そして、この世界ではガンダムと呼ばれる人型の機動兵器モビルスーツが一般に知れ渡っており、そしてすべてのプリキュアの世界が統合されたガンダムの世界。この世界で戦うプリキュアたちの生活を、少し覗いてみよう。

それは、スイートプリキュアと呼ばれる二人のプリキュアが、自身の力に覚醒するちょうど一年前の出来事。

とある小高い丘の上に、紫のツインテールの少女が腕を組んで立っていた。そして、その組んだ腕には少々変わったデザインの腕時計をつけている。

その少女が、文書を読み上げるかのように抑揚のない声でつぶやく。「闇の力を滅ぼし、いまや世界の救世主となったプリキュア」

少女のいた世界 機動戦士ガンダム00と呼ばれる世界 にもプリキュアは存在し、闇の力に対して勇敢に戦い、それに打ち勝った。しかし、プリキュアの存在自体があまり周囲に知られていなかったのと、その頃世間がソレスタルビーイングやアロウズの話で持ちきりだったため、話題に上ることさえなかったが。

「しかしそれもまた、はじまりに過ぎない」

そう、四年前の西暦2308年に私設武装組織ソレスタルビーイングを壊滅させた国連軍 のちの地球連邦軍 を擁する地球連邦

政府もまた、地球圏国家統一のための問題が山積しており、ソレスタルビーイングの台頭によって埋もれていた民族紛争や内乱が世界各地で勃発、連邦政権は次々に降りかかる問題に対処をしなくてはならなかった。

そこで、紛争鎮圧のために連邦軍内部に連邦政府直轄の特殊部隊を発足することとなった。その名は独立治安維持部隊『アロウズ』と呼ばれ、世界各地の民族紛争や内乱、反政府勢力の掃討を主な任務とした。しかし、アロウズは地球圏統一を急ぎすぎたあまり、そして自分たちの行動が徹底した情報統制によって世間に知れ渡ることがないという傲慢さにより、アロウズの行動はますますエスカレートしていく。

無人兵器による虐殺行為にはじまり、保安局を動員しての反政府思想を抱く者を容赦なく拘束、そして衛星軌道上に配置された巨大自由電子レーザー掃射装置『メメントモリ』による無関係な連邦市民を反政府勢力ごと掃滅と、その行為は卑劣を極めた。

しかし、そんな残虐非道さを極めたアロウズも、四年前に壊滅し、その存在をくぐらましたはずのソレスタルビーイングと、反政府勢力『カタロン』、地球連邦軍の一部のクーデター派によって『駆逐』され、アロウズが傀儡とした連邦政権共々解体された。そしてプリキュアたちの戦いも終わりを告げたが、そこで気をゆるめたのが惨劇のはじまりだった。

「平和になった以上、戦うためだけに存在するプリキュアの存在はもはや不要」と唱える撤廃派と、「いまだどんな脅威に襲われるかわからない以上、抑止力としてもプリキュアが存在はまだ必要」と唱える存続派に意見が分かれ、すれ違い、いがみ合い、憎み合い、そしてついにお互いを敵とみなし殺し合いにまで発展してしまい、その争いに巻き込まれてしまう。

少女の名は水澤睦月^{みずさわむつき}、どこにでもいるごく普通の女子中学生。プリキュアたちが同士討ちをはじめめる前は、彼女もまた伝説の戦士プリキュアに憧れるだけの女子中学生であったが、プリキュアたちが同

士討ちをはじめ、その争いに巻き込まれた際に、目の前で仲間だったはずのプリキュアをお互いに憎み合いながら殺しあうという惨劇を目の当たりにし、無力感に打ちひしがれているところへ偶然この世界に立ち寄っていたプリキュア『キュアアンジェ』によって救われ、自身もプリキュアとしての力を手に入れた。

「平和な世界は手に入れることではなく、保ち続けることに意味がある」

自分の世界のプリキュアたちと同じ轍を踏ませたくない、それが今の彼女の戦う理由である。

「もうあんな悲劇、二度と繰り返させない」

瞳に決意の炎をたぎらせ、睦月は丘を下りていく。組んでいた腕を解いて上着のポケットに両手を突っ込んだため、彼女は気づけなかった。腕につけた腕時計が、わずかに輝きを放っていたことに。

次回予告

闇の力を倒し、世界の救世主となったプリキュアたち。しかし、そんな彼女たちの栄光も長くは続かなかった。

次回、『見えざる歪み』

栄光とは、一時だけ輝く儚い夢

#00 終わる戦い、はじまる平和（後書き）

次回予告のBGMは機動戦士ガンダム00オリジナルサウンドトラックのRestart、次回予告のCVは、古谷徹という設定になっています。

#01 見えざる歪み（前書き）

文中のどこかにネタが混ざっています。

#01 見えざる歪み

とある場所に、プリキュアと呼ばれる戦士たちが一堂に会して勝ち取った勝利を分かちあっていた。

「祝勝会？」

「うん、せっかくみんなで平和を勝ち取ったんだから、祝勝会でもしようかなって思って」

すっとんきょうな声をあげてそう言ったのは、『情熱の赤い炎』こと、夏木りんである。

ちなみに、祝勝会をしようと言い出したのは、『大いなる希望の力』こと、夢原のぞみであった。

「面白そうね、やりましょう」

言い出しっぺののぞみよりワクワクしているのは、『安らぎの緑の大地』こと秋元こまちその人だ。

「けど、祝勝会をするにしたって、場所や予算はどうする気？」

「場所は私が用意するから問題ないわ。予算は……みんなで出し合いましよう」

『月光に冴える一輪の花』が場所や予算の問題について聞いてきたが、『知性の青き泉』が解決策を提示する。

「よーし、祝勝会するぞ、けつてえーい!!!」

そして、のぞみの鶴の一声により、祝勝パーティーが開かれることが『決定』した。

その後開かれた祝勝パーティーは、誰かさんたちの暴走もあって、終始お祭り騒ぎ状態であった。要するに『最初からクライマックス』ということである。

そんなこんなで祝勝会は日付が変わるまで、日付が変わってもしばらくは終わる気配を見せなかった。

そして、祝勝会の次の日から、彼女たちの順風満帆な生活がはじま

った。

まずは、自分たちを模したキャラクターグッズの販売、続いて自分たちの活躍を描いた映像作品の制作、そしてあちこちで自分たちにサインを求める長蛇の列、舞い上がるなという方が無理な話だ。

ちなみに、うらはらはアイドルとしての人気も急上昇したため、自身とびっきのCDがオリコンチャート1位に輝くことになった。もつとも、友達が増えることはなかったが。

そして、自分たちの人気も落ち着き、少しずつ日常を取り戻そうとしていた矢先に、ある事件が起きた。

世界各地でのプリキュアたちによると思われる悪行の数々が度々報道されるも、人々は皆口々に「イタズラだ」、「捏造だ」と言っで一連の報道を信用しようとしなかった。

それもそうだろう、世界の救世主たるプリキュアたちが、窃盗をしたり、子供たちをいじめたりなどするはずがない。きっと誰かのイタズラに決まっている、そう世界中の人々は思っていた。

しかし、プリキュアたちによると思われる悪行は次第にエスカレーターしていき、とうとう最悪なニュースが報道されてしまう。しかし、この報道もまた、いつものように「悪い冗談だ」と言ってくれることを期待していた。

だが、世界はそうも単純ではなく、「イタズラにしては手が込み過ぎていいる」、「今度こそ本当のニュースじゃないのか」と言うようになってきた。

そして、その一連の事件をマスコミが針小棒大に報道したため、プリキュアたちは世界の救世主から一転、世界の敵に仕立て上げられてしまったのである。

しかし、彼女たちは知らない。この一連の事件がすべて仕組まれたシナリオだったことに。

次回予告

何者かによって、世界から見捨てられたプリキュアたち。

世界と共に、彼女たちの友情もまた、歪んでいく
次回、『壊れだす友情』
友情とは、細くて弱い蜘蛛の糸

#01 見えざる歪み（後書き）

ちなみに、祝勝会を開いた場所は、プリキュア5のメンバーが合宿をしたかれんの別荘という設定になっています。

#02 壊れだす友情（前書き）

プリキュアたちもまた、一枚岩ではないのです。

#02 壊れだす友情

それはプリキュアたちが世界の敵に仕立て上げられてから数日たったある日のこと。水無月邸に集まったプリキュアたちは皆一様に暗く、祝勝会を企画していた頃の活気はどこへやらと言った雰囲気である。

「なんで、こんなことに……」

それはこの場にいる全員が思っていることであつた。

「きつと、何かの間違ひだつて、私、信じてる」

『とれたてフレッシュ』こと山吹祈里が、弱々しくも意思の強い発言をする。

「いや、違う。世界は僕たちを見捨てたんだ」

拳を握りしめながら、『陽の光浴びる一輪の花』こと明堂院いつきが低く呟く。

「世界は僕たちを見捨てたんだ、だったら……こんな世界なんか！」

「ダメよ！！世界を破壊しようだなんて！！」

感情的になるいつきを祈里が諭そうとするも、逆効果にしかならなかつた。

「だったらどうしろつていうんだ！！このまま耳と目をふさぎ、口をつぐんで孤独に暮らせていうのか！？」

「誰もそんなこと言つてない！！」

二人のプリキュアが感情をぶつけ合うなか、ふと隣がやけに静かなことに気付き、『光の使者』こと雪城ほのかが隣にいるパートナーの『光の使者』こと美墨なぎさを見やる。

先程からやけに静かだと思つたら、そういうことか。とてもラクロス部のキャプテンを努めていたとは思えない細くきれいな指を顎に添えてややうつむき加減で黙考していたのだから。

「なぎさ、どう思つ？」

「どつて？」

なぎさがようやく顔を上げてこちらを向く。

「この一連の事件、どう考えたって都合よくできすぎてる」

「確かに、けどもつと別の目的があるように思えて仕方ないの」

「別の目的？」

なぎさの真意をいまいち理解しかねるほのかが、なぎさに聞き返す。

「そう、たとえば……プリキュアの同士討ち」

「同士討ち!？」

驚愕に目を見開くほのかに短くうなずき、なぎさは続きを話す。

「世界にはさまざまな思想を持った人たちがいる。ここから先は私の立てた仮説なんだけど、今回の一連の事件も、私たちプリキュアを快く思っていない人たちのやったことかもしれない」

「確かに、その可能性もあるわね」

なぎさの立てた仮説に、ほのかは短く首肯する。

「まあ、あくまで仮説に過ぎないんだけど……」

親友の落胆とも嘆息とも取れる呟きに、ほのかがある提案をする。

「なぎさ、ここは一旦バラバラになって情報収集をした方がいいと思うの」

固まって行動するより、各々おのおのに情報を収集した方がいいと判断したほのかは、この場に集まったプリキュアたちにその旨を伝える。

「みんな聞いて、このまま全員が固まって行動するより、各自それぞれのグループごとに分かれて行動した方がいいと思うの」

この発言に異論を唱えるものは一人としておらず、それぞれのグループに分かれて水無月邸をあとにする。この発言が、新たな争いの種となるうとは誰も気づかずに……

「プリキュアたちの友情が、少しずつ壊れていく」

とある小高い丘に、睦月が洗面を作りながら水無月邸を見下ろしていた。彼女らもまた、同士討ちという最悪のシナリオを描き出そうとしている。

「けど、こんな展開、彼女達はきつと望んでなどいない」
そう、世界のどこかでは、こんなシナリオを描き出してプリキュアたちの友情を引き裂くことをもくろみ、いままさにプリキュアたちが同士討ちしようとする現状を見て笑っているやもしれないのだ。
「私はもう、何もできずただ震えていただけのあの頃の私じゃない」
こんな醜い争いの連鎖を断ち切り、世界を歪ませる元凶を『駆逐』する。そのためにプリキュアの力を手に入れたのだから。
「悲しみを終わらす大地と海の守り手、キュアアルガティアとして」
腕時計型の変身アイテム、リジエネブレスと、二挺拳銃、スプリームマグナムに決意と覚悟をのせて。

次回予告

壊れだす友情、加速する歪み

やがて少女たちは、仲間たちを憎みだす

次回、『曇天のココロ』

悲しみの雨模様の中、憎しみの炎が燃え盛る

#02 壊れだす友情（後書き）

次回の展開は未定です。

#03 ■曇天のココロ（前書き）

今回は、各プリキュア組にスポットを当ててみます。

#03 曇天のココロ

水無月邸をあとにしてから数時間がたった頃、世界から『マックスハート組』と呼ばれるプリキュアたちが、タコカフェで情報を整理していた。

「なぎさ、なぎさの立てた仮説を整理すると、私たちプリキュアを快く思っていない何者かが私たちの同士討ちをはかっているということになるわね」

「けど、闇の勢力の残党がやったにしては、手口が巧妙すぎるっていうのも気になるんだけど……」

なぎさの呟きに対し、ほのかは短く首肯する。

「心配なのは、のぞみとラブね。あの二人、特にのぞみは精神的に弱いから……」

「のぞみさん、ふさぎこんでないといいんだけど……」

「なぎささん、ほのかさん、伝説の創始者の二人が落ち込んでどうするんですか。もっと気合い入れてください」

ふと、叱咤する声が聞こえたため、そちらに顔を向けると、ややあきれ顔をした『シャイニールミナス輝く生命』こと九条ひかりがたこ焼きを両手に持って立っていた。

「まったく……二人ともものぞみさんのこと言えませんよ」

その言葉に、二人は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「そうね、伝説の創始者として情けないわね」

「ほのか、ひかり、気合い入れていくわよ」

「OK」

「任せてください」

ほぼ即答に近い間隔で応えが返り、なぎさたち三人の戦士たちは、決意を新たに戦うことを決意する。

世界を守るために……

時を同じくして、世界から『スプラッシュスター組』と呼ばれるプリキュアたちは、咲の家に集まり、情報を整理していた。

「これからどうする?」

「どうするって……」

『輝く金の花』こと日向咲が、『煌めく銀の翼』こと美翔舞に対して聞いてみるも、望んだ答えは返ってこなかった。

「うちの店、客足は遠のいているけど、客足が途絶えた日はないから、世界にもまだプリキュアを信用している人達がいるって思えたんだ」

事実、PANPAPANの客足は遠のいているものの、客足が途絶えた日は一度もなかった。

「けど、その人達が今後も来るとは限らないのよ」

「今のところは来てくれていても、いつ他の店に流れていくかわからないのよ」

『天空に満ちる月』こと霧生満と、『大地に薫る風』こと霧生薫の二人が、やや厳しいコメントを投げ掛ける。

「そりゃ、そうだけど……」

「今のところは様子を見て、それから判断しても遅くはないんじゃないかしら」

舞の提案により、しばらくは様子を見ることにしたスプラッシュスター組。

彼女達は、答えを決めあぐねていた。

そして、そのころ世界から『GOGO!組』と呼ばれるプリキュアたちは、ナッツハウスに集まり、情報を整理していた。

「お客さん、来ないね……」

「そりゃそうじゃん、世間の反プリキュア感情は凄まじいんだから、のぞみがなかなか客が来ず、ため息をつくつと、りんがその原因を小さくつぶやく。

「私達、なにも悪いことなんてしてないのに……」

『はじけるレモンの香り』こと春日野うららが泣きそうな声でつぶやくと、こまちとかれんがすかさずフォローに入る。

「待って、まだ世界から完全に見捨てられたとは限らないじゃない」「そうよ、それに誰かが私達の仲を引き裂こうと画策していたとしても、私達の友情はそう簡単には引き裂けないことを思い知らせてやればいいのよ」

「そうですね」

「けど、このままじゃ圧倒的に情報が少なすぎるわ、ここは一旦バラバラになって各個に情報を集めてまたここへ再集合するっていうのはどうかしら?」

『青いバラは秘密の印』こと美々野くるみの提案により、各個に情報を集めることにしたGOGO!!組。

しかし、この判断が後に災いを引き起こそうとは誰も思ってなどいなかった。

そのころ、世界から『フレッシュ組』と呼ばれるプリキュアたちは、行きつけのドーナツ屋に集まり、情報を整理していた。

「美希たん」

「何?ラブ」

『もぎたてフレッシュ』こと桃園ラブが、『つみたてフレッシュ』こと蒼乃美希に声をかける。

「この前せつなが、何か悪い予感がする」って言ってたから占ってもらったんだ」

「それで?」

「そしたら、水晶玉の中に私達プリキュア同士が戦っているところが映っていたの」

ラブの言葉に驚いた美希は、斜向かいに座っている『うれたてフレッシュ』こと東せつなを詰問する。

「せつな、それは本当なの!??」

「ええ、本当よ」

美希に詰め寄られるも、せつなはそれを意にも介さず淡白に返答する。

「けど、これはあくまで占いの結果に過ぎないから、行動しないで未来を変えることもできる」

「美希たん、ブッキー、せつな、一緒に悪と戦おう」

「OK」

「任せて」

「精一杯がんばるわ」

ラブの提案により、世界の破壊を防ぐために戦うことを決意したフレッシュ組。

愛の力で世界を救える、そう信じて……

一方、世界から『ハートキャッチ組』と呼ばれるプリキュアたちは、植物園に集まり、情報を整理していた。

「つぼみ、こんな世界なんか、僕と一緒に壊してしまおう」

「えっ、でも……」

もうすでに世界を破壊する気満々でいるいつきに詰め寄られ、『大地に咲く一輪の花』キュアブロッサムこと花咲つぼみがやや困惑した表情でいつきを見返す。

「楽しそうだね、あたしも混ぜてよ」

そう言って会話に割り込んだのは、『海風キュアマリンに揺れる一輪の花』こと来海えりかである。

そこへ追い討ちをかけるかのようにしてゆりがたたみかけるように言う。

「もう迷っているのはあなた一人だけなの、とっとと決めなさい」
つぼみがなおも返答に迷っていると、いつきがいいアイデアを思いついたような口調　と言うより小さな子供に言い聞かせるような口調　でつぼみに話す。

「いいかいつぼみ、この世界はもう誰かが導かないといけない」
その言葉に、いつきの後ろに立っていたゆりが静かにうなずく。

「それと同時に、古い秩序を、そしてその古い秩序で成り立っている今の世界を破壊しなければいけない」

つぼみは頭に疑問符を浮かべる。確かに秩序は常に新しくなっていくものだ、しかしなぜそれが世界の破壊とつながるのだろうか。

いつきの言いたいことをいまいち理解できずにいると、いつきが突然例え話をはじめた。

「じゃあ例え話をしよう、今つぼみの目の前に大きな花壇があるとする。もし、その花壇を好きなようにしていいと言われたら、つぼみならどうする？」

「それなら、当然自分の好きな花で花壇をいっぱい埋め尽くすに決まっています」

「そう、そしてこの『花壇』のところを『畑』に、『花』のところを『野菜』に変えても答えは変わらない」

「えっと、いつき……それどういう意味？」

すると今度はえりかが話についていけなくなり、頭に疑問符を浮かべる。

「つまり、この世界は巨大な花壇なんだ。どんなにきれいな花を咲かせようとしても、汚れた土の上ではきれいな花は咲かない」

「そして、よしんば花が咲いたとしても、誰にも見られることなく枯れていく」

いつきの解説に、つぼみが続けて捕捉をする。

そして、一連の話をようやく理解したえりかが、今までの話をまとめ。

「つまり、プリキュアという美しい花を咲かせるために、今の世界を破壊しなければいけないのね？けど、畑と野菜の話がいまいちよくわかんないんだけど」

「ああ、つまりこういうことさ。汚れた土で育った野菜、つまり今の世界秩序を破壊して新たな世界秩序を構築する。僕たちプリキュアの手で」

つぼみはここへきてようやく一連の話を理解し、いつきの計画を実

行することを決意する。

もうこんな世界なんかには用などない、プリキュアの力でこの腐った世界を破壊する。

そして、その上からプリキュアという美しい花を咲かせるために……

次回予告

ついにお互いを敵と見なし、戦い合うプリキュアたち

しかし、その戦いに楔を打ち込む者が現れる

次回、『孤高の天上人』

戦いを終わらせるために戦う、それは大いなる矛盾

#03 ■曇天のココロ（後書き）

今さらながらカミングアウト。
フレッシュは一話も見たことはありません。

#04 孤高の天上人（前書き）

アルガティア登場、ですが……

#04 孤高の天上人

プリキュアたちが水無月邸に集まり、今後の方針を決めた次の日、一人の少女が町外れのコンビニで弁当を買っていた。

「新作弁当か……」

今彼女の目の前にはふたつの弁当が並んでいる。ひとつはおにぎりといくつかのおかずの詰まった弁当、もうひとつは大きなハンバーグが目を引く少し大盛りの弁当。

彼女 睦月はひとしきり悩んだあと、大きなハンバーグが目を引く少し大盛りの弁当を手に取った。

弁当と共に唐揚げを購入して、コンビニからさほど遠くない公園のベンチに座って食べはじめた。

天気がいいにもかかわらず、公園には自分を除けばハトくらいしかいなく、少し寂しく感じる。だが、世間の反プリキュア感情を考えてみると、それも仕方ないと言えた。

弁当を食べ進めながら今後の方針について考えていると、ふいに空気が変わったのを感じ取った。光と光のぶつかり合い、プリキュア同士の戦い……

「いけない!!」

最悪の展開を予想した瞬間、睦月はベンチから立ち上がって走り出した。途中弁当をゴミ箱へ投げ捨て、さらに走る。プリキュア同士の戦いを止めるために。

戦いを止めるために戦う、誰かが聞けば『矛盾している』と言われかねないだろう。だがそれでも、矛盾を抱えてでも睦月は戦う必要があった。わかりあわせるために、誰も死なせない、殺させないために……

そして睦月が、走りながら変身コードを唱える。

「プリキュア・リジエネレイト・ユニゾン!!」

そのころ、なぎさたちマックスハート組は、世界を守ることに協力してくれるプリキュアを探すため、町外れのほうまで来ていた。

「なぎさ、本当にこんなところに私達に協力してくれるプリキュアがいるっていうの？」

「ええ、この辺りから光の波動を四つ感じたから」

なぎさの感じた『直感』にしたがって、町外れの方まで来たのだが、どこにもそれらしい人影は見当たらない。

「でも、その光の波動の持ち主が味方になるという保証はどこにもないんですよ」

ひかりの疑念に対して、なぎさは低く唸る。確かにそうだ、出会ったところで仲間になってくれる保証などなく、敵になる可能性もあるのだ。

できれば、そこにいてくれるプリキュアがフレッシュ組であればいいが……と希望的観測を胸に抱きつつ、さらに歩を進めるとそこにいたのはハートキャッチ組だった。

「アンタたち……」

「皆さん、いつきの計画実行のために協力してください」

つぼみに、出会うなりいきなり『計画』とやらの人員に勧誘された。

「計画？」

「いったいなんのことですか？」

ほのかとひかりがつぼみに矢継ぎ早に質問する。

「この世界は、もう誰かがより良く導いていけないといけないんです」

「つまり、私達にこの世界の破壊を手伝えっていうこと？」

『より良く導く』と言われ、何を言いたいかを瞬時に理解したなぎさは、ほぼ即答に近い時間で返答する。

「お断りよ」

つぼみはその返答が意外だったのか、不服だったのかは不明だが、やや驚いたように返答する。

「な、何故ですか？こんな世界なんかを守る価値なんかないじゃない

いのですか!？」

声を荒げて感情的になって答えるつばみに対して、なぎさが諭すように返答する。

「確かに、アンタたちにとっては守る価値のないどうでもいい世界かもしれない。けど、この世界だって悪いことばかりで満ち満ちているわけじゃない、私達はこの不条理で理不尽に満ち溢れた世界がどうしようもなく好きで好きでしょうがないの。だから守りたいの、この世界を、みんなの未来を!!」

しかし、なぎさの決意に満ちた声を、いつきが感情的になって切り裂く。

「黙れ!!お前たちに何が分かる!!挫折も苦痛も味わったことのないお前たちなんかには、僕たちの苦痛が理解できるわけがない!!」
「甘ったれたことを言うな!!」

感情的になって切り裂くいつきの言葉を、なぎさの怒りが叩き潰した。

「甘ったれたことを言うな!!私達だって、何度も挫折し、何度も苦痛を味わってきた。けど、その度にお互いに絆と信頼を深めあい、幾多の苦難を乗り越えてきた。他人の苦痛も理解しようともせず、甘ったれたことばかりぬかしやがって……いい加減にしなさいよ……」

…この大馬鹿野郎共!!」

『大馬鹿野郎』と言われ、怒りが頂点に達したいつきはこの瞬間、マックスハート組 特になぎさを完全に『敵』と見なした。

「お前たちは僕たちの敵だ。特に美墨なぎさ、お前は这个世界ごと消えてなくなれ!!」

「とうとう本性を現したわね、ほのか!!」

これ以上の討論は時間の無駄遣いだと見なしたなぎさは、盟友の名を呼び、変身コードを唱える。

「デュアル・オーロラ・ウェーブ!!」

そして、あまりにも短いステップで変身を終わらせ、名乗り口上を口にする。

「光の使者、キュアブラック」

「光の使者、キュアホワイト」

「ふたりはプリキュア!!!」

そして、名乗り口上のラストに入るのだが、ここでふたりはわざと口上の一部を変えて読み上げる。

「闇に惑いし光の戦士たちよ!!!」

「とつととその目を、覚まさない!!!」

ふと気がつくのと、いつの間にかハートキャッチ組とひかりが変身を終わらせていた。

戦闘が始まるなりいきなりキュアサンシャインがキュアブラックに向かつて突撃してきた。サンシャインは猛然とブラックに対して拳を繰り出すも、ブラックはそのすべてを片手でいなし、逆に反撃の一撃をサンシャインの下腹部に叩き込む。

吹っ飛ばされたサンシャインは、叩き込まれた拳の傷みに震えながらも、こちらを睨み付けてくる。

「プリキュア・ゴールドフォルテバースト!!!」

すると、サンシャインが突然自身の必殺技を発動させた。こんな序盤で大振りの必殺技を発動させるということは、それだけブラックの存在を危険視しているということだろう。

しかし、ブラックはそのすべてを左右に揺さぶりをかけてかわそうとも、後方へ下がって距離を開けようともせず、思いきって前方に突っ込んでサンシャインに肉薄し、ムーンライトへ向けて殴り飛ばす。

おそらく、自身も必殺技を発動させようとしていたのか、突然割り込んできたサンシャインに怒鳴り散らす。距離があるため、詳細は不明だが、サンシャインの不甲斐なさに対して苛立っているであろうことは間違いないだろう。

そして、ホワイトと戦っているプロッサムとマリンの足並みが揃っていないことを見て、ブラックは確信した。

ハートキャッチ組は各々の戦闘力　つまり個性が強いぶん、連携

して戦ったことが一度もない。遊撃以外の攻撃手段をもたないハートキャッチ組は、連携に対してめっぼう弱い。

つまり、『本物の連携』を駆使する相手、すなわちチーム戦に弱い！！

「ホワイト！！」

キュアブラックは振り向かずホワイトの名を叫ぶ、それだけで意思は伝わった。

「4対2…ね…勝てるかしら？」

「別にひとり増えるも、ふたり増えるも、変わらないでしょ？」

ホワイトのひとりごとにも似た呟きに対して、ブラックは当然のことを言うかのような口調で返答する。その返答に対して、ホワイトは不敵な笑みを浮かべ、「そうね」とだけ返す。

「ほんじゃ、ちゃっっちゃとあのバカ共に自分たちの未熟さを理解させてやりますか」

「そして、連携の重要性もね」

ブラックは気合いを入れるかのように拳を鳴らし、ホワイトは肩を大きく回して気合いを入れる。

そして、お互いに顔を見合わせ短くうなずくと、目の前に立ちふさがるハートキャッチ組に向かって突撃していった。

何故だ、何故勝てない。こちらは四人、むこうはふたり、数の上ではこちらが圧倒的有利なはず。なのに何故勝てない、何が足りない！？

キュアサンシャインが苛立ちを隠そうともせず、目の前に立ちふさがるマックスハート組のふたりに対して拳を繰り出すも、ブラックに集中すればホワイトが、逆にホワイトに集中すればブラックが隙を突いて攻撃してくる。

そしてそれは、プロッサムやマリィン、ムーンライトにも同じことが言えた。つまり、四人がかりでたったふたりのプリキュアに圧倒されているのだ。これを屈辱と呼ばずして何と呼ぼう。

ふと気がつくのと、いつの間にかブロッサムとマリンの変身が強制解除されていた。そして続けざまにムーンライトの変身も強制解除される。

ここへきて、サンシャインは初めて恐怖した。まずい、このまま戦ったら絶対に殺される!!

そしてサンシャインは、本能の赴くままに逃げることを決断した。

そしてその撤退を援護するかのように、援護射撃が入る。

そしてサンシャインは、逃げながらある決断をする。

キュアブラック……次に出会った時が、お前の最期だ!!

戦闘地域に赴いてみると、すでに四人のプリキュアが撤退を開始した頃だった。

遅かったか……

しかし、逃げるというなら援護くらいはしてもいいだろう。少女は、拳銃を両手に構え、前方に向けて乱射する。

すると、追撃しようとしていたふたりのプリキュアが標的を変えたのか、こちらへ突撃してきた。二挺拳銃を黒いプリキュアに向けて乱射するが、目の前のプリキュアは短いステップで左右に揺さぶりをかけつつ突撃してこちらに肉薄すると、右足を大きく振り上げて右手に握った拳銃を蹴り飛ばした。

拳銃を蹴り飛ばされ、左手の拳銃を右手に持ちかえ黒いプリキュアに狙いを定めようとするが、背後から強襲してきた白いプリキュアに背中を蹴り飛ばされた。

「動くな!!」

「動かないで!!」

うつ伏せのため、詳細は不明だが、おそらく奪った拳銃をこちらに向けているのだろう。これ以上の抵抗は無意味と判断し、両手を静かに上げた。

「アンタ、なんであの四人の撤退を援護したの？」

「逃げるというなら、追う必用はない」

投げかけられた質問に対して、少女はあくまで淡白に答える。

「それと、アンタ……名前は？」

名前を聞かれたため、少女は立ち上がりながら答えた。

「悲しみを終わらす、大地と海の守り手……」

「キュアアルガティア！！」

次回予告

新たな介入者、キュアアルガティア

彼女はいつたい、何故戦うのか

次回、『アルガティア』

彼女の戦う理由、それは……

#04 孤高の天上人（後書き）

次回はアルガティアの過去がメインとなります。

#05 アルガティア(前書き)

今回はアルガティアの過去がメインになっています。

#05 アルガティア

ハートキャッチ組との戦闘を終えたマックスハート組は、途中戦闘に介入してきたプリキュア キュアアルガティア とともに、近くの公園へ移動してアルガティアに武力介入した理由について問いただしていた。

ちなみに、全員変身は解除してある。

「アンタ、ハートキャッチ組の味方なの？」

なぎさが開口一番に問いかけるも、目の前の少女はこれ以上ないほどこにそっけなく答えた。

「違うわ、私は誰の味方でもない」

「このあたりでは見かけない顔だけど……あなた、どこから来たの？」

続いてほのかが質問すると、意外な答えが返ってきた。

「…西暦2312年」

「…西暦2312年？」

驚く三人を見ながら、目の前の少女は静かにうなづく。

「今から300年後の世界じゃないですか」

「ええ、そしてその世界でも、プリキュア同士の戦いがあった」

「アンタの世界って、どんな世界なの？」

自分の世界でも、プリキュア同士の戦いがあったと言われ、なぎさは気になって問いかけた。

「私の世界？まあ、簡単に言うと三本の軌道エレベーターがあって、再生医療と宇宙開発の進んだ世界ってところ。それと、私はアンタじゃなくて、水澤睦月ね」

「軌道エレベーターって、もしかしてあれのこと？」

ほのかの指した先には、天に向かって高くそびえ立つ塔があった。

「ええ、そうよ。そしてその三本の軌道エレベーターは、ふたつのオービタルリングで繋がっている」

睦月の世界の軌道エレベーターもまた、単独では強度が足らず、軌道エレベーターの中間地点と最上部の二ヶ所に配備されたふたつのオービタルリングによって保持されている。

「しかし、オービタルリング破壊禁止条約を逆手に取ったアロウズは、そのオービタルリング上に衛星兵器を配備、反政府勢力を連邦市民もろとも掃討するという暴挙に出た」

そしてこのオービタルリングもまた、軌道エレベーター同様脆弱であり、国際条約によって破壊、およびそれに準ずる行為が全面的に禁止されているのだが、独立治安維持部隊アロウズはその条約を逆手に取り、そのオービタルリング上に衛星兵器を配備、反政府勢力を連邦市民もろとも掃討するという暴挙に出た。

「連邦市民もろとも反政府勢力を抹殺……」

「そのアロウズって、テロリスト？」

ほのかが驚愕し、なぎさがアロウズをテロリストかと聞くと、睦月はその答えを苛立ちと共に吐き捨てる。

「正規軍よ、それも真正銘のね。そして地球連邦政府直轄の独立治安維持部隊」

「地球連邦政府直轄の独立治安維持部隊……」

「それって単に、地球連邦政府の権威を振りかざして反政府勢力の掃討とか言って、少数派を弾圧したいだけじゃない」

「大体あつてるわね。けど、少し間違つてる」

なぎさの苛立ちをこめたつぶやきに、睦月は単調に返答する。

「……どういうこと？」

「アロウズは、連邦政府の権威を笠に着て少数派を弾圧したのではなく、連邦政府の実権を『掌握』して傀儡にせしめ、自分たちの行為を『承認』させていたの」

ほのかの疑念に、睦月は一部の単語を強調しつつ答える。

「それはそうと、プリキュア同士の戦いって？」

話がどんどん脱線していつて、この場にいる全員が本題を忘れかけたころ、なぎさが急にその『本題』を睦月に振った。

「ん？ああ、確かもともとその話をしてたのよね」

この反応を見る限り、どうやら話を振った本人さえも本題を忘れかけていたらしい。

「けど、あれは『戦い』じゃないわ……あんなもの『殺し合い』よ！！」

「……殺し合い！？」「」

睦月が苛立ちと怒りと共に吐き捨てた台詞に、三人は驚愕する。同じプリキュア同士で殺し合いなど、普通考えもしないだろう。

「私の世界のプリキュアチームもまた、『ガイアセイバーズ』と呼ばれる防衛チームと同盟を結び、『ガイアセイバーズ・ガンダム0支部』として活動していた」

「けど、プリキュア同士の殺し合いによって、一人残らず全滅した……」

「えっ、なんで……」

思わずほのかが疑念を口にすると、睦月がその答えを口にする。

「はじめは、単なる意見の食い違いだった。けど、そこからお互いにすれ違い、いがみ合い、憎み合い、そしてとうとうお互いを敵と見なして殺し合いをはじめた」

「こ、殺し合いを……」

ひかりが驚愕に満ちた声でつぶやくと、睦月が苛立ちを隠そうとせず、吐き捨てるようにして答えた。

「ええ、そうよ。目の前で、仲間だったプリキュア同士がお互いを憎み合い殺し合う光景……思い出したくもない」

「私は、何も守れなかった……私に守るだけの力がなかったばかりに……私がみんなを殺した！！私が弱かったばかりに！！私のせいでみんなは……！！」

「いい加減にしろ……！！」

睦月が吐き捨てる苛立ちを、なぎさの怒りが叩き潰した。そしてその怒りのまま、睦月の胸ぐらを掴み上げる。

「アンタいつまで過去にしがみついていりゃ気がすむの！？アンタ

の仲間が、そんなこと望んでいるとでも思ってたんの!？」

ここでなぎさは胸ぐらを掴んでいた手を離れた。

「アンタは、目の前で大切な仲間を失って仲間の大切さを嫌というほど痛感している。だから私達の戦いを止めたい、その気持ちは分かる。戦いを止めたい、けどどうやって伝えたらいいかわからない、だから武力に訴えるしかなかった。その気持ちもよく分かる」

「けどね、今のアンタは過去に生き、過去のために戦っている。過去に縛られたまま戦うアンタなんか、守れるものなんてひとつもないのよ!！」

言い終わるより早く、なぎさは腕を大きく振りかぶって睦月を殴り飛ばす。そして、殴り飛ばされた睦月が、茫然とした口調でつぶやく。

「私に……守れるものなんて……ひとつも……ない……?」

「ええ、そうよ。今のアンタに、守れるものなんてひとつもない。

たとえ今、過去に戻ってかつての仲間を救ったとしても、変えられるのは今のアンタの気持ちだけ、他は何も変わらない。他人の気持ちや、ましてや命は……」

「人は誰しも、過去に戻ってやり直したいことを持っている。それに私なんて、過去に戻ってやり直したいことなんて山ほどある。けどね、人はその『やり直したいこと』の一つずつを時間をかけて整理していく。だから、うつつとうしいかもしれないけど、それでも聞いて。戦いなさい、過去じゃなく、未来のために」

そこまで一気に言い終えると、なぎさはゆっくと睦月に近づき、睦月をやさしく抱き締めた。そして、睦月の頭を撫でながら、なぎさはやさしく言い聞かせる。

「辛いなら、無理をしなくていい。泣きたいなら、思いつ切り泣けばいい。思いつ切り泣いて、わめいて、また次を考えよ。ね?」

その一言が決め手になったのか、睦月が大きく声を張り上げて泣き叫んだ。今まで溜めに溜め込んできた悲しみを、一気に吐き出すかのよう……

なぎさたちはそれからしばらく、泣き叫ぶ睦月のそばにつき、泣きやむまでそばに居続けた。

次回予告

バラバラになり、少しずつ離れていくココロ

そして、結ばれた絆の糸が少しずつほどけていく

次回、『五つの光と青い薔薇』

戦うために、少女たちは絆を捨てる

#05 アルガティア(後書き)

次回、ようやくGOGO!!組登場。

#06 五つの光と青い薔薇（前書き）

久々にG O G O ! ! 組登場。

#06 五つの光と青い薔薇

マックスハート組がハートキャッチ組との戦闘を終え、突然介入してきた新たなプリキュアと和解したところ、のぞみは自宅のベッドに寝転がり、ひとり物思いにふけていた。

「これからどうしよう……」

自身の変身アイテム『キュアモ』を、先程から開いては閉じ、開いては閉じを繰り返すも、なかなか妙案は思い浮かばない。

思案にくとっていると、隣にいた青年が声をかけてきた。

「気分転換に、外に出てきたらどうだ？」

「ココ……」

彼の名はココ。パルミエ王国の王であり、のぞみのよき理解者でもある。

「うん、ちよっと出かけてくる」

「気をつけるよ」

ココの忠告を受け取ったのぞみは、近くの公園まで行こうと思いつつくりと歩を進めた。途中、自販機で缶コーヒーを購入し、飲みながら公園へ入ると、そこにはつぼみがベンチに小さく縮まって座っていた。

「つぼみ？」

「のぞみさん……」

のぞみに呼び掛けられ、つぼみがベンチから立ち上がる。すると、つぼみが何かを思い付いたのか、突然突拍子もないことを言い出した。

「のぞみさん、この世界をよりよく導くために、私達に協力してください」

「嫌よ……」

しかし、のぞみはその提案をたった一言で拒絶する。歴代プリキュアたちの中でも、最も洞察力に優れたのぞみにとって、つぼみが何

を言いたいかを看破するなど、造作もないことであった。

「っ！あの人といい、あなたといい、どうしてわかってくれないんですか!？」

感情に任せて怒鳴り散らすつぼみに、のぞみは毅然とした態度で答える。

「つぼみ、あなたは間違ってる。こんなことをしたって、世界は何も変わらない。私は、あなたの暴走を止めて見せる!!」

「あなたがこんなにもわからず屋だとは知りませんでした。そんなわからず屋のあなたに私、堪忍袋の緒が切れました!!」

つぼみが苛立ちのままに吐き捨てた言葉に対し、のぞみはため息をひとつつくと、キュアモを取りだし、構える。

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

のぞみが気分転換に外へ出た頃、りんは自宅でベッドに寝転がりひとり物思いにふけていた。

「のぞみ、大丈夫かな……」

幼なじみとして少し気になるものの、うかつに動いて幼なじみに危害を加える訳にはいかない。

「まあ、大丈夫かな。ココがいることだし……」

のぞみにはココが、うららにはシロップが、こまちさんにはナッツが、かれんさんにはミルク　つまり美々野くるみ　がいる。

心の支えがいる以上、発狂して精神崩壊……などということはないだろう。もつとも、それが正しく発揮されるかの保障まではできないが……

特に何もしなくても大丈夫だろう。その結論にたどり着いたりんは、襲い来る睡魔に身を預けた。

のぞみがつぼみと対峙し、りんが睡魔に身を任せて眠りについた頃、うららはなぜかカレーをヤケ食いしていた。

「うらら、いくらなんでも食いすぎじゃないか？」

「いいの。だって、おなかすいてるんだもん」

エプロン姿でキッチンに立つシロップが心配するも、うららはそれをはねのけ、おかわりを要求する。

「シロップ、おかわり」

その光景に、シロップが啞然としてつぶやく。

「お前……何杯食う気だ？」

ちなみに、うららはもうすでに山盛りのカレーを五杯も平らげたり、次のカレーで六杯目を数える。シロップが心配するのも無理はないだろう。

しかし、うららはそんなシロップの心境を知ってか知らずか、次のおかわりを要求する。

「おかわり!!」

うららがカレーをヤケ食いしている頃、こまちは自宅のベッドで膝を抱え、ひとり落ち込んでいた。

「うららさんにはああ言ったけど、私、どうすればいいの……」

「こまちの好きにしる、俺はこまちの意思に従う」

彼の名はナッツ。パルミエ王国の王であり、こまちのよき理解者でもある。

「ナッツさん、気分転換に外へ出て来るね」

「ああ、気をつけるよ」

ナッツの忠告を受け取ったこまちは、あてもなく散策をはじめた。散策をはじめればらくすると、見知った人物に出会った。

「いつきさん……」

「こまちさん、ちょうどよかった。僕の計画に協力してください」

こまちは、出会うなりいきなり『計画』とやらの人員に勧誘された。

「計画？」

こまちが迷っていると、いつきが勧誘した理由を話した。

「この世界はもう、誰かがよりよく導いていかないといけないんです。そこで、安らぎの緑の大地のあなたに力を貸していただきたい」

「でも、世界を破壊しようなんて……」

こまちがなおも迷っている、いつきはたたみかけるように追い討ちをかける。

「もうこの世界は今のままではだめになってしまおう。だからこそ、あなたの力を貸してほしい。あなたの『大地を揺るがす乙女の怒り』を世界にぶつける時がきたのです。これは、あなたでなければできないことなんです。だからお願いします、僕に協力してください！」

こまちは聞いていて、いつきに協力しようと決意した。誰も私を認めてくれない世界なんて、いつそのこと壊してしまえばいい。私怨だと笑いたくば笑え、私のことを認めようとしないう世界の方が悪いのだ。

「ええ、協力するわ」

そして、ふたりの少女が冷たく笑う。ひとりは破壊した世界に悠然と立つ自分を夢想して、そしてもうひとりは新たな手駒を手に入れた喜びに。

こまちがいつきに協力することを決意した頃、かれんは、自宅のベッドに寝転がり、ひとり物思いにふけていた。

「のぞみたち、大丈夫かしら……」

「かれん、大丈夫よ。この程度で心が折れるようなら、プリキュアなんて勤まらないわ」

すると、隣にいたくろみが見がやさしく声をかける。

「そうね、みんな大丈夫でしょ」

かれんはそう結論付け、ひとり静かに眠りにつく。その姿を、くろみがやさしく見守っていた。

次回予告

相反する感情を抱える、ふたりのプリキュア
そしてふたりは、お互いに拳をぶつけ合う

次回、『孤独な戦い』
お互いに相反する感情、その道が交わることはない

#06 五つの光と青い薔薇（後書き）

今回は、ドリームとブロッサムとの戦いがメインです。

#07 孤独な戦い（前書き）

ドリームとブロッサムとの戦いがメインです。

#07 孤独な戦い

「はああああっ!!」「」

ふたりのプリキュアがお互いに拳をぶつけ合う。そして、その衝撃波によって、強力な風が吹き荒れるが、それは彼女達の知るところではなかった。

「キュアドリーム、なんで私達の理想が理解できないんですか!? こんな世界、守る価値なんてひとつもないじゃないですか!!」

「いい加減にしないよ!! あなたのそれは理想なんかじゃない、妄想よ!!」

自身の掲げる『理想』を、『妄想』と切り捨てられ、ブロッサムは激しく怒り狂う。

「うるさい!! 何もわかっていないくせに、いい加減なことを言うな!!」

そう言つて、ブロッサムはドリームに向かって拳を繰り出すも、ドリームはその一撃をかわして逆にブロッサムの下腹部に手をあてる。ダークドリーム、あなたの技、ちよつとだけ借りるよ。

「プリキュア・ダークネス・ショット!!」

ドリームの手の内側から光が溢れ、そしてそれが一気に膨れあがつて爆発の光芒をあげる。その爆発をまともに食らって、ブロッサムは大きく後方へ吹っ飛ばされる。

するとブロッサムが、赤い色をした丸い種 確かこの種の種と言った を取り出し、パフュームに入れて自分にふりかけるのかと思いきや、なんとこの種の種を飲み込んでしまった。

ドリームがその行動に啞然としてみると、突然こちらに向かって急迫する。ドリームはその動きに対応しきれずに不意打ちを食らってしまう。

そして、ブロッサムが右へ左へと高速で移動し、ドリームの隙をうかがう。こんなとき、あの人ならキュアフラックなんでもないかのように攻撃をい

なし、華麗に反撃のひとつも決めて見せるのだろう。

もつとも、あの人の身体能力は異常すぎるほどに異常だ。あれほどの格闘センス、普通に鍛えて手に入る代物ではない。

いくらラクロス部のキャプテンを勤めていたとは言え、あの格闘センスはあり得ない。幼なじみの夏木りんでさえ、得意とするのは中距離戦で、近距離戦はあまり得意としない。

「ブロッサム・マシンガンパンチ!!!」

あれこれ考えていると、いつの間にかブロッサムが急迫しており、あわててガード体制に入る。しかし、ブロッサムはそのガードもろともドリームの身体を思い切り吹っ飛ばす。

「っ!!!っ、強い!!!」

「さあ、降参してください。今ここで降参すれば、命だけは助けてあげます」

『助けてあげる』と聞き、ドリームはおもわず顔をしかめた。おそらく、自分が現在優位に立っていることで、有頂天になっているのだろう。ドリームは世界の破壊者に頭を垂れる気など最初^{ハナ}からなく、ブロッサムを睨みつけながら決然と言い放つ。

「嫌よ、誰が……あなたなんかに!!!」

「わかってませんね、あなたに選択権なんかありませんよ。『はい』か『yes』のどちらか以外、口にする資格なんかありません」
そう言つて、ブロッサムはドリームの首を片手で締め上げる。

「仕方がないですね、今回はあなたのために特別に選択権を与えます。今ここで降参して私に忠誠を誓うか、もしくは、今ここで私に殺されて死ぬか。選択権はふたつにひとつ、さあ、どちらかを選んでください」

「嫌よ、あなたなんかに忠誠を誓うつもりなんてないし、あなたに殺されて死ぬつもりもない。あなたは提示する選択肢を間違えた。本当に交渉する気があるなら、もつとまともな選択肢を提示しなさい」

その言葉にブロッサムは怒り狂い、ドリームを思い切り投げ捨てる。

そしてゆっくりとドリームに近づき、右足でドリームの左肩を踏みつける。

「ドリーム、これが最後のチャンスです。降参しますか？しませんか？答えてください」

「何度言えば理解するの？あなたなんか降参する気はない、これが答えよー!!」

ドリームのその返答に、ブロッサムは気がつくどドリームの顔を蹴り飛ばしていた。そしてその怒りのままにドリームの下腹部を蹴り飛ばす。

「こつちが、下手に、出てやって、いると、思ったら、調子に、乗りやがって!!」

そう言いながら、ブロッサムはなおドリームの下腹部を蹴り続ける。蹴られ続けた衝撃のせいで、ドリームが血を吐くも、ブロッサムは蹴り続ける事をやめようとはしない。

「キュアドリーム、ここで死ねええっ!!」

ブロッサムがドリームにとどめの一撃を叩き込もうとするも、振り上げようとした足をつかまれ、不発に終わる。

「ここへきていまさら抵抗？何を無駄なことを……」

「本当に無駄だと思ってるの？」

言いながら立ち上がるキュアドリームの右手には、いつの間にかキュアモが握られていた。そしてキュアモを開き、ドリームの親指がキータッチを奏でる。

「プリキュア・トランス・メタモルフォーゼ!!」

見る間にドリームが光に包まれ、現れたのは一振りの剣を握り、背中に大きな天使の翼を生やした天使をイメージしたようなプリキュアが現れた。

「想いを咲かせる奇跡の光、シャイニングドリーム!!」

「シャイニング……ドリーム……」

これにはブロッサムも驚愕した。本来ミラクルライトがないと変身できないはずのシャイニングドリームに、キュアモ単独で変身して

いるのだから。

「さあ、いくよ。邪悪なる花、キュアブロッサム!!」

ドリームはそういうと、右手に携えた剣　スターライトフルールを振りかぶり、ブロッサムに急迫する。ブロッサムはドリームの斬劇をかるうじてかわすも、右手に握ったタクト　ブロッサムタクト　を真つ二つに叩き切られる。

「っ!!速い!!」

「たあああっ!!」

ドリームは反転した勢いのまま、すれ違いざまにブロッサムの腰元を手にした剣で薙いだ。ブロッサムは腰元を叩き斬られ、変身を強制解除させられる。

「シャイニングドリーム、いつか必ず、あなたを倒します!!」

ブロッサムは捨て台詞を吐き捨て、そのまま立ち去っていった。公園内に誰もいないことを確認して、変身を解除する。

強引にシャイニングドリームへと変身した反動が一気にのぞみに襲いかかる。そして、襲い来る苦痛に耐えきれず、のぞみは血を吐いてしまう。

重い足取りのまま自宅へと戻ると、ココが心配した面持ちで玄関にいた。

「のぞみ、大丈夫か!？」

「うん、すこし疲れただけ」

心配するココの横を通りすぎ、のぞみはベッドに倒れ込む。そして、のぞみは本能のままに意識を手放した。

次回予告

マックスハート組に敗れ、苦悩するハートキャッチ組

そんなハートキャッチ組に、ひとりのプリキュアが手をさしのべる

次回、『星のプリキュア』

星の名を冠するプリキュア、彼女はいったい何を望むのか

#07 孤独な戦い（後書き）

プシエミスルさん、次回ズヴェズダが登場します。

#08 星のプリキュア(前書き)

キュアズヴェズダ登場。

#08 星のプリキュア

ハートキャッチ組が今後の方針を考えていると、突然植物園のドアが開き、ひとりの少女が飛び込んでくる。

「……つぼみ!?」「」

つぼみがぼろぼろの体でハートキャッチ組のアジトである植物園に帰ってきたのを見て、三人は驚愕する。

「つぼみ、いったい誰に!?!」

「シャイニング……ドリーム……」

つぼみはたった一言だけつぶやくと、膝をついてその場に倒れ込んだ。

「シャイニングドリーム……夢原のぞみか!?!」

『シャイニングドリーム』と聞き、三人 特にいつき は危機感を募らせる。

シャイニングドリーム、奴は危険な存在だ。早急に排除しなければ、僕たちの悲願が達成できなくなる恐れもある。

つぼみが倒れたせいで、いつきは新たな協力者の勧誘に成功したことを切り出せずにいた。

「のぞみ……」

帰ってくるなり倒れるようにして眠りについたのぞみをココが心配そうに見つめている。

ふと、のぞみが何故ここまで疲れたのか気になり、のぞみの懐からキュアモを取り出し、履歴を確認する。

「!?!のぞみの奴、シャイニングドリームに変身したのか!?!」

それならばのぞみが異常に疲れていたのも、口元にこびりついた血も、すべて納得がいく。おそらく、強引にシャイニングドリームに変身したことによって、身体に過負荷をかけたのだろう。

「しかし、いったい誰と戦ったんだ?」

ココはさらに気になり、キュアモから戦闘記録を引き出す。

「キュアブロッサム!? 何故、キュアブロッサムと……」

答えを聞こうにも、その本人がいまだに眠りにについているために、聞くことができないでいた。

つぼみを簡易ベッドに寝かせ、三人は対シャイニングドリーム会議を開いた。

「シャイニングドリーム……」

「レッドの種を使用したブロッサムを圧倒するなんて……」

「詳しい事情は、つぼみに直接聞いてみないことにはわからないわ」
三人がそれぞれにシャイニングドリームへの危機感をあらわにする
と、植物園のドアをノックする音が聞こえたため、そちらに顔を向
けると、ひとりの少女が立っていた。

「誰だ!!」

「落ち着いて、私はあなたたちと戦いにきたわけじゃないの」

『戦いにきたわけじゃない』と聞き、三人は少しだけ警戒のレベル
を下げる。

「あなたたちに協力しようと思って」

「あなた、誰？」

なおも警戒を続けるゆりに、少女は決然と自身の名を名乗る。

「我こそは救星主、キュアズヴェズダ!!」

「なぎさ、のぞみさんが心配ね。少し様子を見に行かない？」

「賛成」

ほのかの提案に賛成したなぎさは、のぞみの家に行くことにした。
のぞみの家に行く道中、ほのかは少し気になって目の前の親友に問
いかける。

「ねえ、なぎさ。本当にこっちで合ってるの？」

「ほのか、余計なこと考えてないで私について来て」

親友に一喝されたほのかは、なぎさに言われたとおり、『余計なこ

と』は『考えず』に、『ついていく』ことだけを優先させた。

なぎさについていってしばらくすると、なぎさが突然足を止める。

「なぎさ?」

「着いたわ、ここよ」

なぎさが目の前のドアをためらいもなくノックする。ノックして少しすると、ココがふたりを出迎えた。

「上がってくれ」

ココに案内され、ふたりはのぞみの部屋へと入る。するとそこには、ベッドの上で泥睡しているのぞみの姿があった。

「のぞみさん……」

「ただ疲れて眠ったにしては妙ね……ココ、のぞみに何があったの?」

ココはなぎさに促され、キュアモから戦闘記録を引き出しふたりに見せる。

「シャイニングドリームに変身した!」?

「やっぱり……」

「なぎさ、今なんて……」

なぎさがこのことをすでに知っているかのような口調で低くつぶやく。ほのかはそのことに驚き、隣にいる親友に思わず質問する。

「ほのか、よく見て。のぞみの口元、血がべつとりとこびりついている」

確かに、なぎさの言うとおり、のぞみの口元には血がべつとりとこびりついている。おそろく、何らかの理由で血を吐いたのだろう。

すると、いままで眠っていたのぞみが目を覚ます。

「ココ、お腹空いた」

「のぞみ、起きて開口一番に言うことがそれか? まあいいが」

ココはそう言って、キッチンの方へ向かっていった。そして、のぞみはなぎさとほのかの姿を認めると、不思議そうな顔をした。

「お二人とも、どうしてこちらに……」

「アンタが心配でね、様子を見にきたの」

「のぞみさん、どうしてシャイニングドリームに？」

ほのかがこの場に居る全員が聞きたいことを質問すると、のぞみはやや暗い表情をして答えた。

「これしか方法がなかった……とは思いたくはありません。けど、あのときはああするしかなかったんです」

「そう……アンタらしくない選択ね……」

のぞみの返答に、なぎさはやや嘆息げみにつぶやく。

「のぞみ、こんなものでもいいか？」

すると、キツチンに向かったココがおにぎりを持って帰ってくる。

「ココ、ありがとう」

そして、おいしそうにおにぎりを頬張るのぞみを見て、なぎさとはのかのふたりは安心するのだった。

次回予告

今後の方針が決まらず、困惑するスプラッシュスター組

そんな四人に、海の戦士がある頼み事を持ち掛ける

次回、『花鳥風月と海の戦士』

邪悪なる花と太陽の暴走を止めるために、海の戦士はひとり戦う

#08 星のプリキュア（後書き）

次回、スプラッシュスター組の登場。

#09 花鳥風月と海の戦士(前書き)

久々のスプラッシュスター組登場。

#09 花鳥風月と海の戦士

ハートキャッチ組が新たなる協力者を手に入れて喜んでいるころ、スプラッシュスター組は今後の方針について話し合っていた。

「ヒマね……」

「咲、それ言っちゃだめ……」

「ちわーっす、ここにスプラッシュスター組がいると聞いてやってきましたあ〜」

すると、突然軽いノリの声が聞こえてきたためそちらに顔を向けると、ハートキャッチ組の一人である来海えりかがコーラの缶を片手に立っていた。

「あなた、いったい何の用？」

「世界を破壊しようと言論むハートキャッチ組の一人のくせに」

満と薫がえりかに対して警戒心むき出しで対応すると、えりかはややあわてた様子で返答する。

「い、いや……ちょっと待って。『ハートキャッチ組』だから『世界の破壊者』っていうのは、考えが単調すぎるって。みんなにちょっと頼みたいことがあって来ただけなのに……」

「満、薫、まだ敵って決まったわけじゃないじゃん」

「ところで……頼みたいことって何？」

舞がえりかの発言で気になるところがあったため聞き返してみると、えりかはその問いにあっさりと答える。

「実はみんなに、お願いがあるの」

「悪いな、のぞみを心配して来てくれたうえに、夕飯まで作ってもらって」

「いいっていいって、困ったときはお互い様でしょ？」

そう言いながらも、なぎさは手を休めず夕飯の支度を進める。ちなみに現在の時刻は15:30、夕飯にはかなり早い時刻である。

「ねえ、なぎさ。いったい何を作るの？」

「んー、ハンバーグ」

「単純ね……」

ほのかのその物言いに、なぎさはやや顔をしかめて答える。

「悪い、単純で……」

「ふたりとも、ケンカしないで!!」

いつ殴り合いに発展してもおかしくない一触即発の事態に、のぞみがテーブルを叩いて強引に中断させる。

「のぞみ……」

「ふたりとも、ケンカしないでください。もう、仲間割れなんてこりごりです……」

のぞみが肩を震わせて自身の感情を吐露すると、なぎさはあっけらかんとした表情でのぞみを見ていた。

そして、なぎさはひとつため息をつくと、のぞみに向かって問いかける。

「のぞみ、どんなハンバーグがいい？」

質問を振られたのぞみは、しばらく「んー」と考えてから明るく返答する。

「ビーフ100%!!」

「つぼみといつきの監視!？」

「どうしてそれを私達に……」

咲と舞がえりかのお願いに驚いていると、満と薫が納得した表情でうなずく。

「それで私達のところへ来たのね」

「つまり、『協力』するフリをして『監視』すればいいのね」

「そういうこと」

えりかが軽快に指を鳴らして答える。

「あたしひとりじゃあのふたりの監視はつらい。けど、ゆりさんにはこれ以上負担を掛けさせたくない」

「だから、あたしに協力して。お願い!!」

えりかはそう言って、両手を顔前で合わせる。この行動ひとつからしても、彼女がいかに真剣かがわかる。

「わかった、手伝うよ」

「えっ……」

あっさり了承されたため、やや呆然としてみると、スプラッシュスター組は立ち上がってえりかに案内を求める。

「案内してくれる？」

えりかはそのことに喜び勇んで引き受けた。

「案内するっしゅ!!」

次回予告

新たな協力者を手に入れ、有頂天になるハートキャッチ組

そんな彼女たちに、五人の戦士が立ちはだかる

次回、『五枚の鏡』

その姿は、まるで……

#09 花鳥風月と海の戦士（後書き）

次回、ハートキャッチ組と『あの五人の戦士』が対決します。

#10 五枚の鏡（前書き）

ダークプリキュア5登場。

#10 五枚の鏡

「いつき、新しい仲間を紹介するよ」

そう言つて、えりかはスプラッシュスター組を紹介する。

「でかしたぞ、えりか!!」

「えりか、さすがです!!」

その戦果を、ふたりの破壊者は手放して称賛する。

「いやあ、それほどでも……ありますよ!!」

えりかがやや古いネタを引っ張り出して威張り気味に答える。すると突然植物園のドアが開き、ひとりの少女が現れた。

その少女、キュアドリームは不敵な笑みを浮かべて軽く手招きすると、反転してそのまま立ち去っていった。

「キュアドリーム!!」

いつの間にか目を覚ましていたつぼみが、仇敵を見るかのような目でキュアドリームを睨む。そしてつぼみは、キュアドリームを追つて植物園を飛び出していった。

「……つぼみ!!」

そして残る三人もまた、キュアドリームを追つて植物園を飛び出していく。その光景を見ていたズヴェズダは、少し悩んだあと、ハートキャッチ組を追いかけた。

スプラッシュスター組を置き去りにして。

「キュアドリーム!! 待て!!」

少女の後方から、自分のことを『キュアドリーム』と呼ぶ少女が追いかけてくる。

勘違いするなと言いたいところだが、無理もなかつた。キュアドリームに瓜二つな容姿を持った自分が、突然目の前に現れたとなれば、少女はしばらく逃避行を続け、開けた場所にたどり着いたところで反転して追跡者に向き直る。向き直つて少しすると、残る三人とさ

らにもうひとりのプリキュアが現れる。

「この間の雪辱、晴らさせていただきます!!!」

「たったひとりで、僕たち五人に敵うとも思っているのか!?!」
つぼみと呼ばれた少女と、茶髪をした短髪の少女が口々に非難するが、少女はそれを鼻で笑う。

「ひとり?何を勘違いしてるの、アンタたちは。私達は五人よ!!!」
少女はそう言つて指を鳴らす。すると、少女の後方に四色のクリスタルが現れ、割れ砕け、中から四人の少女たちが現れた。

「まったく……とつとと復活させなさいよ。おかげで肩がこつたじゃない……」

緑色の髪をした少女が、肩と首を回しながらぶつぶつ文句を言う。

「思いつ切り暴れてもいいよね?答えは聞いてないけど」
金色の髪をしたツインテールの少女が、大きく伸びをして聞いてくる。

「どいつもこいつも弱そうね。さて、寝起きの運動くらいにはなるかしら?」

紅い髪をした短髪の少女が、大きくあくびをしながらつぶやく。

「ダークドリーム、私はどいつを相手にすればいい?」

青い髪をしたポニーテールの少女が、ダークドリームと呼んだ少女に質問する。

「ダークアリア、あなたはあの既に変身しているプリキュアを相手にして」

「了解した」

ダークアリアの質問に対して、ダークドリームは短く返答する。

「私は?」

「ダークレモネードは、あの茶髪の」

ダークドリームの返答に対して、ダークレモネードは「OK」と返す。

「ダークルージュは、あの背の低い」

『背の低い』と言われ、不愉快げな顔をした少女を無視し、ダーク

ルージュはやや不満げに「……了解」と返す。

「私は？」

「ダークミントは、あの眼鏡をかけたいかにも賢そうなコ」

ダークドリームの返答に対して、ダークミントは、「わかったわ」と返す。

気がつくのと、いつの間にかハートキャッチ組が変身を済ませている。

「じゃ、いくよー!!」

「……yes!!」

ダークドリームの決意に対して、残る四人の声が唱和する。そして、鏡の戦士たちはそれぞれの『敵』へ突っ込んでいった。

ダークドリームは目の前のプリキュア 確かキュアブロッサムと言った に向かって突撃し、優勢に戦いを進める。

「っ!! キュアドリームのコピー、ニセモノの癖に!!」

「ニセモノ? 何を言ってるの。『私』は『私』よ!!」

ダークドリームはそう言いながら、ブロッサムの拳をかわして逆にブロッサムの下腹部に手をあてる。

「何から何までキュアドリームの真似事しかできない、そんな技ではこのキュアブロッサムは倒せません!!」

「何を勘違いしてるのかは知らないけど、この技のオリジナルは私よ!!」

「ダークネス・ドリーム・バースト!!」

ダークドリームの手の内側から光が溢れ、キュアドリームの時の数倍もの光球が脹れ上がって爆発の光芒をあげる。その爆発をまともには食らったブロッサムは、大きく後方に吹っ飛ばされ建物の壁に叩きつけられた。

すると、ブロッサムが突然赤い色をした種を飲み込み、さらにもうひとつの赤い色をした種を飲み込んでダークドリームに急迫する。

ダークドリームは何とかその一撃をかわすも、ブロッサムは残像が見えるほどの超高速でダークドリームの周囲を移動してダークドリームの間をうかがう。

こんなとき、彼女ならどんな風に戦うのだろう、考えても答えは出ない。もつとも、考えて答えが出ないのなら、自分の思うとおりに戦えばいい。

そう思ったダークドリームは、腕を大きく振り上げて地面に手刀を叩き込む。手刀を叩き込んだときに発生した衝撃波が地面を切り裂きながら進み、今まさに特攻をかけようとしていたブロッサムを吹っ飛ばした。

「ダークドリーム、援護するよ!!」

すると、ダークレモネードが両足を振るいながら真空刃を飛ばして言葉通り『援護』する。キュアサンシャインはどうしたのかと頭をめぐらせてみると、いつの間にか変身を強制解除させられていた。

「OK、2対1でたたみかけるよ!!」

ダークドリームはそう言っつて、盟友のダークレモネードとともにキュアブロッサムに向かって突っ込んでいった。

次回予告

キュアズヴェズダの猛攻により、窮地に立たされるダークプリキュア5

しかしそこへ、6人目の闇の戦士が現れる

次回、『月を飲み込む影』

倒したはずの戦士が、再び蘇る

#10 五枚の鏡（後書き）

次回、ダークプリキュア復活。

#11 月を飲み込む影（前書き）

ダークプリキユア復活

11 月を飲み込む影

そこは、闇だった。見渡す限り広がる、永遠の闇。その闇の中で、ひとりの少女が目を覚ます。

「ん……ここは……」

その少女は、かつてダークプリキュアと呼ばれた闇のプリキュアで、キュアムーンライトをコピーして造られた。

しかし、自分はムーンライトに倒され消滅したはず……そう考えていると、一条の光が見えた。

その光の先を覗くと、ハートキャッチ組と自分の知らないプリキュアの五人と、プリキュア5のコピー戦士たちが激しい戦闘を繰り広げていた。しばらくその戦闘を眺めていると、キュアサンシャインが突然キュアレモネードを模した黒いプリキュアによって変身を強制解除させられる。

ブロッサムやマリリン、ムーンライトもまた、プリキュア5のコピー戦士たちによって苦戦を強いられていた。その姿を見て、ダークプリキュアが苛立ちを込めてつぶやく。

「何をしている……私を倒した實力はその程度か？」

そして、さらにその戦闘を眺めていると、サンシャインがふと何かを取り出した。サンシャインが手に握っていたのは、細長くて白い円筒状の……

「！！なぜ……なぜアレが、あんなところに……」

サンシャインが握っていたそれは、かつて自分が出撃する際に打ち込んでいた強化剤だ。しかし、サバーク博士に見つかって以来、使用を一切禁じられた極めて危険なシロモノでもある。

そんなものがなぜあんなところに……そう考えていると、サンシャインはその強化剤をしばらくじっと眺めてから、ためらいもなく首筋に打ち込んだ。打ち込んだ瞬間、苦痛にやや顔をゆがめるも、再び変身を遂げ、黒いレモネードに向かって急迫する。

見えるのが映像だけのため、詳しくはわからないが、サンシャインのあの表情を見る限り、狂気に満ちた笑い声を上げて拳を繰り出しているのだろう。

しかし、あの反応は妙だ。自分と同じ強化剤を打ち込んだにもかかわらず、である。そう、まるで原液の強化剤をそのまま投薬したかのような……

そこまで思考が至ったとき、彼女の背筋が凍りついた。自分でさえ、十倍に薄めて打ち込んでいたというのに……

このままあの強化剤を使い続けたら、サンシャインは間違いなくプリキュアの力を失う。それだけは絶対に避けねばならない、それだけは……

ダークプリキュアは覚悟を決めると、目の前の光に向かってためらいもなく飛び込んだ。キュアサンシャインの暴走を止めるために……

そのころ、黒いレモネードによって変身を強制解除させられたサンシャインこと明堂院いつきは、このうえない屈辱を味わっていた。

あの黒いキュアレモネード、キュアレモネードのコピーにいいようにあしらわれ、変身を強制解除させられたのだ。こんなもの、屈辱以外の何物でもない。

ふと、いつきはあることを思い出し、上着のポケットをまさぐる。そうだ、自分にはまだ、これがあった。今の自分を劇的に強化してくれる、魔法のような薬が……

いつきはそれをしばし眺めたあと、首筋にためらいもなく打ち込んだ。打ち込んだ瞬間、襲い来る激痛に顔をしかめつつも、体の内側から力がみなぎってくるのを感じた。

これでアイツを倒せる、あのキュアレモネードの紛い物を。この僕に蔑むような視線を投げかけ、あしらうようにして戦ったあの女をもっとも、ダークレモネードの得意とする戦術が、両足を振るって発生させる真空刃を利用しての中距離戦というだけなのだが、当のいつきにしてみれば、あしらわれたようにしか感じなかった。

そしていつきは、シャイニーパフォームにこころの種を入れて、再び変身する。

「プリキュア・オープン・マイハート!!!」

そのころ、ダークレモネードは、目の前の生意気なプリキュアに向かって両足を繰り出していた。このプリキュア、たぶんさっきのプリキュアよりずっと弱い。2対1という、こちら側が優勢である状況を差し引いてなお、である。

ダークレモネードがとどめの一撃を叩き込もうとすると、別方向から突然鉄拳が飛んできたせいで不発に終わる。すると、そこにいたのは、先程倒したはずのキュアサンシャインだった。

サンシャインが狂気に満ちた笑みを浮かべ、狂気に満ちた笑い声を上げて殴りかかる。しかし、ダークレモネードはそのすべてをバックステップを踏んでかわしていく。

そんな応酬をしばらく続けていると、ふいにサンシャインの動きが変わった。今までの振り回すような動きから蹴りを交えた格闘戦のラッシュへと。

ダークレモネードはその中からなんとかスキを見つけ、自慢の右足を叩き込もうとする。

ダークネス・レモネード・ブレイク

普段両足から離して運用するダークネス・レモネード・スラッシュを右足に乗せて叩き込む必殺技。しかし、その渾身の一撃は、サンシャインの腕によって防がれ、さらにその足を掴まれ叩き折られる。その瞬間、ダークレモネードの喉が持ち主の意思に反して絶叫する。この感覚からしておそらく、いや、間違いなく右足の骨を叩き折られたのだろう。

今、彼女の近くにチェーンソーがあつたなら、彼女はためらいもなく右足を切り捨てていただろう。だが、幸か不幸か、彼女の近くにそのようなものの類はなかった。

ダークレモネードが痛みに耐えてなんとか戦闘区域から少し離れた

場所にあつたベンチにたどり着く。そして、ベンチに腰掛け、戦闘を傍観していると、どこかムーンライトに似た黒いプリキュアがサンシャインを殴り飛ばした。

ダークドリームがブロッサムとサンシャインのふたりの猛攻に苦戦していると、突然現れた黒いプリキュアによってサンシャインが殴り飛ばされた。

「キュアドリーム、大丈夫か!？」

「ダークドリームよ、私は。それより、あなた誰？」

「ダークプリキュアだ」

目の前の黒いプリキュアが簡潔に名を名乗り、構える。そして、それに呼応するようにして、ダークドリームもまた、戦闘体制に入った。

「まったく……とつとと帰らせてよね、私は早くのぞみに会いたいていうのに……」

「ふっ、お前の戦う理由はそれか」

すると、いつの間にか隣に立っていたダークアキラが口元をほころばせてつぶやく。

「私も、ひさしぶりにキュアアキラの顔でも見に行ってみるか」

「だったら、こんな戦いとつとと終わらせて、オリジナルの顔でも見に行きますか」

「あのバカ共を叩きのめした後でな」

そうダークアキラが言つて、青い刀身をした剣を構える。それにつられて、二人の闇の戦士が戦闘体制に入り、戦いの第二幕が開かれた。

戦いの第二幕が開かれたとたん、ダークプリキュアは迷うことなくキュアムーンライトに向かって突撃していった。

「ムーンライト、貴様あ!!私を倒した実力はどこへいった!!」

すると、ムーンライトが突然肩をつかみ、耳元に口を寄せて小さく

つぶやいた。

「落ち着きなさい、これは戦ってる『フリ』よ」

「戦ってる『フリ』？」

「ダークプリキュアはわけがわからず困惑する。」

「一応ね、ブロッサムとサンシャインに『仲間ですよ』っていう姿勢を見せなきゃいけないわけ。たぶん、マリンも私と同じでしょうね」

「キュアマリンも、戦ってる『フリ』を？」

「ダークプリキュアの問いに、ムーンライトは迷うことなくうなずく。そして、ダークプリキュアの背後に回ると、ムーンライトが突然へッドロックをかけてきた。」

「ムーンライト、いったい何を……」

「この方が話しやすいでしょ？」

「あ、ああ……そうだな」

それからふたりはしばらく、ブロッサムとサンシャインが撤退を開始するまで、戦っている『フリ』をしながら情報を交換し合っていた。

「ダークレモネードが骨折した足を応急処置しようと、手ごろな長さの棒を探していると、目の前に突然純白の天使の翼を生やした白いプリキュアが現れ、折れた右足を治してそのまま去っていった。」

「名前を聞こうとしたのだが、その時には白いプリキュアの姿はどこにもなく、ダークレモネードは頭に疑問符を浮かべる。彼女はいつたい誰なのだろう、そんなことを考えつつ、ベンチから立ち上がる。ダークレモネードが急いで仲間の援護に向かおうとすると、いつの間にか五人のプリキュアたちはいなくなっていた。首をかしげながらダークドリームたちのもとへ向かうと、ダークドリームが心配げな顔でこちらを見ていた。」

「ダークレモネード、大丈夫？」

「白いプリキュアのおかげだね。ところで、あなた誰？」

「ダークプリキュア、お前たちの味方だ」

味方と聞き、ダークレモネードは少し安堵する。ふと、ダークレモネードはこれからのことが気になり、この場にいる仲間たちに問いかける。

「ところでみんな、これからどうするの？」

その問いにいち早く答えたのは、ダークドリームとダークアクアだった。

「のぞみに会いに行くの」

「キュアアクアの顔でも見に行つてやろうとな」

しかし、残る三人　自分含め　は、これからのことをまだ決めていなかったため、全員で頭を悩ませていた。すると、その状況を見るに見かねたのか、ダークプリキュアがある提案をする。

「行く当てがないというのなら、私のところへ来い。歓迎するぞ」

この提案に、ダークプリキュア5は一も二もなく飛びついた。そして、ダークドリームとダークアクアに見送られながら、ダークドリームの作り出した鏡のゲートを潜り抜け、三人はダークプリキュアについていくことにした。

次回予告

『のぞみに会いに行く』と言い、ひとりのぞみの家に向かうダークドリーム

そこで彼女は、驚愕の事実を目の当たりにする

次回、『希望の戦士の求める希望』

疲弊した希望の戦士は、自身の影に希望を求める

#11 月を飲み込む影（後書き）

次回、のぞみとダークドリームの再会

#12 希望の戦士の求める希望(前書き)

のぞみとダークドリームの再会

#12 希望の戦士の求める希望

六人の闇の戦士が復活を果たし、そしてそれぞれが今後の方針を決めた頃、マックスハート組のふたりと希望の戦士、そしてパルミエ王国の王の四人が、仲良くテーブルを囲んでいた。

「ねえ、なぎさ。一人分多くない？」

ほのかの指摘どおり、テーブルの上にはのぞみの要望したハンバーグが、五人分置いてあった。

「いいの、もうすぐ五人目がくるから」

「五人目って、いったい誰ですか？」

なぎさの発言に対して、のぞみが思わず聞き返す。すると、なぎさは意味深な発言をして返答した。

「アンタの今一番会いたい人よ。っと、来たみたいね」

なぎさはそう言って、玄関の方へ向かう。そして、数分も経たないうちに、なぎさが帰ってくる。

「連れてきたわよ、アンタの今一番会いたい人。ホラ、早くこっちに来なさい」

なぎさに促され、その『一番会いたい人』が入ってくる。そして、その顔を見た瞬間、のぞみが大きく息をのんだ。

見間違おうはずがない、彼女は私の友達で、私がずっと再会を渴望し続けてきた少女なのだ。そして、のぞみの唇が震えながら、その少女の名をつぶやく。

「ダーク…ドリーム……」

『キュアアクアに会いに行く』と言って、キュアアクアのいる家に向かったダークアクアを見送ったダークドリームは、なるべく人目につかないルート選択をしながら、のぞみの家に向かった。

回り道になったために、予定より数分遅れての到着となってしまう。しかし、ダークドリームはそのことを気にすることなく、ドア

をノックする。

ノックしてから少しすると、のぞみみたいな少女がダークドリームを出迎えた。

「遅かったわね」

「私が出るのを、待っていたの？」

ダークドリームの問いに、目の前の少女がうなずく。そして、促されるままにダークドリームはその少女についていく。

「連れてきたわよ、アンタの今一番会いたい人。ホラ、早くこっちに来なさい」

目の前の少女に促され、引き違い戸の敷居をくぐる。その瞬間、のぞみが大きく息をのんだ。

おそらく、自分の顔を見て動揺しているのだろう。そして、のぞみの唇が震えながら自分の名をつぶやく。

「ダーク……ドリーム……」

「ひさしぶりね、のぞみ」

そう言った瞬間、のぞみが自分の胸に飛び込んできた。そして、肩を震わせ、やや声押し殺して泣きじゃくる。

「ひっく、ひっく、ふえええん」

泣きじゃくるのぞみを抱き締め、ダークドリームはのぞみの頭をやさしく撫でる。

そうか、のぞみはずっと、さみしかったんだ。強がってはいたけど、きつと、私に会いたくて会いたくて仕方がなかったんだ。

「のぞみ、ハンバーグ冷めるよ」

「ダークドリーム、ハンバーグ食べていかない？」

すると、のぞみが、自分に夕飯を食べていかないかと聞いてくる。自分は、鏡の国のクリスタルの力によって無限の力にすることができると、食事の必要は全くない。

しかし、今ここで帰ったら、彼女は間違いなくココロを閉ざすだろう。ただでさえココロが傷ついているというのに、ここでココロを閉ざしてしまったら、彼女はもう二度と、そして誰にもココロを開

かなくなってしまう。

食事くらい、およばれしてもいいかな、と思ったダークドリームは、のぞみの提案をあっさり受け入れる。

「うん、いいよ」

次回予告

太陽の戦士の暴走により、八つ当たりの対象となるフレッシュ組しかし、そこへ新たな力を手にしたアルガティアが現れる

次回、『四つの力』

新たなる力、それは断罪の力

#12 希望の戦士の求める希望（後書き）

次回、久々にフレッシュ組登場

13 四つの力（前書き）

久し振りにフレッシュ組登場

13 四つの力

ハートキャッチ組が突然飛び出していつてから数十分後、ハートキャッチ組のひとりの明堂院いつきが、帰ってくるなり手近にあった椅子を蹴飛ばした。

「くそっ！！ダークプリキュア、またしても僕らの敵となるのか！！」

「いつき、物に八つ当たりするのはやめなさい！！」

ゆりがたしなめるも、いつきの怒りを静めるにはいたらなかった。

「黙れ！！あのキュアレモネードの紛い物なんかにはいいようにあしらわれたんだ。八つ当たりでもしなきゃやってられないんだよ！！」
いつきはそう言いながら、蹴飛ばした椅子に当り散らしている。そして、八つ当たりしていた椅子を思いつ切り蹴飛ばすと、いつきは苛立ちを隠そうともせずに植物園を飛び出していった。

その光景を見て、海の戦士来海えりかがため息をつきながらつぶやく。

「……なにがしたいんだか……」

そのころ、いつきが植物園を飛び出し、ダークドリームがのぞみの家に到着したころ、ダークアクアはキュアアクアの家の前にいた。ダークアクアは数瞬悩んだあと、意を決してインターホンを押す。インターホンを押して少しすると、青紫色のウェーブがかつた髪の少女が現れた。

その少女がダークアクアの顔を見たとき、何を思ったのか突然玄関のドアを閉めようとする。しかし、ダークアクアがブーツをドアの間に挟みこんだため、失敗に終わる。

「あなた、いったい何が目的なの！？」

「そう警戒するな、私はキュアアクアの顔を見に來ただけだ」

「嘘言わないで！！もう一度だけ聞いわ、あなたいったい何が目的なの！？」

「だから言っているだろう、キュアアクアの顔を見に来ただけだと」
「そんな見えすいた嘘が通用すると……」
「まったく、騒がしいわね……何の騒ぎ？」
ダークアクアと紫のウェーブがかった髪の少女が言い争っていると、青い髪の少女が現れた。ダークアクアはその顔を見て、懐かしげに青い髪の少女の名を呼ぶ。
「ひさしぶりだな、キュアアクア」

激しい口論の末、ようやく家の中に入れてもらえたダークアクアは、くるみに向かって文句を言っていた。

「まったく、人の話も聞かずに言いたいことばかり……」

「悪いわね……くるみ、ダークアクアに謝りなさい」

かれんが不服げなダークアクアに謝り、くるみに謝るように言うものの、当のくるみは、それを拒絶する。

「嫌よ、なんでこんな奴に……」

「くるみ……」

かれんに一喝され、くるみは渋々と言った感じで謝る。

「……悪かったわね……」

「くるみ！あなた、それで謝ったつもりなの！？」

「落ち着け、キュアアクア」

ダークアクアに諭され、かれんはなんとか怒りの炎を静めた。

「ふっ、どうやら私は邪魔者のようだな」

そうダークアクアがつぶやいて玄関に向かおうとすると、誰かに腕を掴まれた。

「待って、帰らないで……」

見ると、かれんが泣きそうな顔をして自分の腕を掴んでいるではないか。このままここを出たところで、行くあてなど ダイクドリーム リーダーのところ以外 どこにもない。

仕方ない、しばらくいてやるか……そう思ったダークアクアは、腕を掴まれたまま踵を返して椅子に座った。

植物園を飛び出したいつきを追って、つぼみとズヴェズダ、そして途中から合流したこまちがクローバータウンに向かっているころ、フレッシュ組は、今後の方針を話し合っていた。

「ねえ、せつな。これからどうするの?」

「まずは、マックスハート組と合流するのが先決ね」

ラブの問いに、せつなは簡潔に答える。

「マックスハート組が、私達の味方とは限らないのよ」

「えっ、でも……」

美希の容赦ない反論によつて、ラブは押し黙るも、祈里がすかさずフォローに入る。

「とにかく、会ってみないことにはまだわからないけど、ラブちゃんの想いを素直に伝えてみたらどうかかな?」

「うん、そうだね。それじゃ……」

『なぎささん達のところへ行こう』と言いきる前に、突然せつなによつて押し倒された。

「せつな!?!」

「敵よ!?!」

爆煙の晴れた先にいたのは、右手にメロンパン……ではなく、ひまわり型のタンバリンを持ったキュアサンシャインがいた。

「サンシャイン!?!いきなり何をするの!?!」

サンシャインはその問いに答えようとはせず、首筋に何かを打ち込み、こちらに向かつて急迫する。

話し合いは無駄だと判断した四人は、各自それぞれが所有する携帯電話にピククルンを差し込み、変身コードを唱える。

「キュア・チェインジ・プリキュア・ビートアップ!」「」「」

その頃、とある場所では、ひとりの少女が目を覚ました。

「ここはいつたい……どこなの?」

彼女の名は、女神瞳。とある場所で起きた内戦に巻き込まれ、死ん

だはずが、とある女神の力によって新たな人生と新たなプリキュアの力を与えられ、いつの間にかこんなところにいた。

わ、私は今、ありのまま起こったことを……とでも言いたくなる状況の中、現状を整理しようとする、突然遠くの方から何か破壊される音が瞳の耳の鼓膜を叩いた。

何事かとそちらに目を向けると、八人のプリキュアが四人のチームに分かれて戦っていた。模擬戦か、と思ったが、すぐに否定する。

これが本当に模擬戦なら、もう少し手加減しているはずだ。

特にあの金髪のプリキュアの戦い方、あれではまるで、弱者を蹂躪しているような戦い方ではないか。ゼロ距離からエネルギー砲を放ったり、青いプリキュアを盾にして赤いプリキュアの攻撃を防いだりと、どうも『戦う』ことより、『殺す』ことに執着した戦い方をしている。

あんな戦い方をしていたら、彼女は間違いなくプリキュアの力を失う。しかし、それに気づかないほど彼女とてバカではないだろう。仕方ない、彼女の腐った根性叩き直してやるとするか。瞳はひとつ息をつく、オカリナを吹いて変身コードを唱える。

「プリキュア・ホーリーソング！」

ピーチたちフレッシュ組が、サンシャインに苦戦を強いられている頃、アルガティアは少し離れたビルの非常階段に寝転がるような体勢で銃身の長いライフルを構えていた。覗いたスコープの先には、狙い撃つ目標である邪悪なる大陽ターゲットがいる。

睦月自身、00支部に席を置いていた頃に多岐に渡って射撃の訓練を受けたことがある。無論、スナイパーライフルもそのうちのひとつだ。

しかし、訓練で何度も撃つているとはいっても、生身の人間を撃つのはこれがはじめてだ。照準がぶれないよう、ジアゼバムを飲んではあるものの、それでも不安感は拭いきれない。

しかし、迷っていても仕方ない。睦月はひとつ息をつく、スコ

プの先の目標に向けてゆつくりと指を引き絞った。

「アルガティア、目標を狙い撃つー!!」

フレッシュ組との戦闘は、終始サンシャインが優勢であるにもかかわらず、サンシャインはある種の不安感を抱いていた。

まるで、どこか遠くから誰かに見られているような、それでいて、その誰かに狙われているような、そんな不安感を。

そして、その不安感は的中する。突然、サンシャインの右肩を何か貫いた。そして続けざまに左腿とシャイニータンバリンごと右手を撃ち抜かれる。

サンシャインはぎり、と奥歯を噛みしめた。伏兵を配備するなど、卑怯にも程がある。

しかし、奇襲を掛けておいて、さらに不意討ちの一撃を放ったサンシャインに、人のことは言えないのだが……

どこから来るかわからない狙撃を回避することに専念していると、新たに五人目のプリキュアが現れる。

これ以上戦うのは不利と判断したのか、ズヴェズダが撤退を進言する。

「サンシャイン、ひとまず撤退よー!!」

「っー!あともう少しだって言うのに……」

サンシャインはズヴェズダの進言を受け入れ、撤退を開始する。シャイニータンバリンを破壊されたことにより、サンシャインの苛立ちさはさらに募る。

撤退を続けながら、サンシャインは今度は何に八つ当たりしようかと考えていた。

次回予告

ダークドリームとの再開を果たし、喜んでいたのも束の間

ダークドリームがのぞみの願いに反して帰ってしまう

次回、『黒き光と消えゆく希望』

求めた希望が、消え失せていく

13 四つの力（後書き）

今回は、なぎさとのぞみ中心に展開していきます

ここで、読者の皆様に質問。

キュアアルガティア、水澤睦月のスピノフ作品を書こうと思っ
ますが、いかがでしょうか。

感想欄にてご意見お待ちしております。

#14 黒き光と消えゆく希望（前書き）

なぎさとのぞみ中心の展開

#14 黒き光と消えゆく希望

フレッシュ組がハートキャッチ組 + との戦闘を終えた後、キュアヴィーナスは途中から戦闘に参加したプリキュアたちに対して、挨拶をしていた。

「はじめまして、フレッシュ組の皆さん。キュアヴィーナス、女神瞳です」

「はじめまして、キュアヴィーナス。キュアピーチ、桃園ラブです」

「キュアベリー、蒼乃美希よ」

「キュアパイン、山吹祈里です」

「キュアパッション、東せつなよ」

それぞれが自己紹介を終え、お互いに打ち解けるために他愛もない話をしていると、ピーチがふとパッションがある一点を凝視していることに気づいた。

「パッション、なに見てるの？」

「おかしいわね……さっきまで向こうに人がいたと思ったのに……」
パッションの疑念に対して、ピーチが「気のせいだよ、きっと」と言うと、パッションは「そうね」とだけ答え、会話の輪に混ざった。

フレッシュ組がキュアヴィーナスとの邂逅を果たしたところ、なぎさとのぞみのふたりは、ダークドリームに対して、なぜ復活したのかを聞いていた。

ちなみに、ほのかは既に家路についている。

「ねえ、ダークドリーム。何で復活したの？」

「わからない、けど、気がついたら復活してた」

のぞみの「もしかして、シャドウ？」の問いに、ダークドリームはかぶりを振って答える。

「ううん、今回の一件、シャドウ様は関係ないの」

「ふたりとも、シャドウって、誰？」

するとここで、話についていけなくなつたなぎさが遠慮がちに質問する。その問いに、ダークドリームが短く答える。

「私達ダークプリキュア5を産み出したお方よ」

「ふーん……」

すると突然、ダークドリームが何かを思い出したように立ち上がり、玄関の方へ向かう。

「ごめん、のぞみ。もう帰らないと……」

「えっ……どうして……」

「みんなが、待ってるから……」

おそらく、ダークドリームの言う『みんな』とは、ダークプリキュア5のことだろう。彼女にも、帰る場所がある。待っている人がいる。しかし、今ののぞみにはそれが忌まわしいモノのように思えて仕方がない。

「嫌……帰らないで……」

ふと気がつくとき、いつの間にかダークドリームの腕を掴んでいた。何故彼女の腕を掴んだのかは、自分でもよくわからない。明確な理由こそないが、なぜかそうしなければいけないと感じていた。

「お願い……帰らないで……」

「のぞみ、ワガママ言って困らせちゃダメ」

なぎさの制止に対して、のぞみは伏せ目がちに「でも……」とつぶやく。

「そんな悲しそうな顔をしないの。『大いなる希望の力』が、そんなことでどうするの」

「うん……でも……」

なおも助詞を連発するのぞみに対し、ダークドリームがのぞみの頬を張った。頬を張られたのぞみが、啞然とした表情でダークドリームの顔を見やる。

「いい加減にしなさいよ……」

「だっ……て……」

今にも泣きそうなのぞみの顔を見て、ダークドリームは続く言葉を

失う。

「はあ、わかったわよ。今度来るときは、みんなで来るから」

ダークドリームのつぶやきに対して、のぞみが小さくうなずく。

「うん……わかった……」

そのつぶやきと共に、のぞみが手を離す。両手が自由になったダークドリームは、思いつ切りのぞみを抱きすくめた。

「また、遊びに来るから」

のぞみはうなずき、名残惜しそうに手をふる。ダークドリームはそれに応えるかのようにして片手を挙げた。

「ダークドリーム……」

「心配しなくても大丈夫よ」

なぎさは現在、のぞみのベッドの上で寝転がっていた。そして、隣にはのぞみが同様に寝転がっている。

なぜ、なぎさとこのぞみが同じベッドの上で寝ているかというところ、布団を敷こうとしたところ、のぞみが頑としてこれを拒んだため、現在に至る。

「ところで、のぞみ」

「何ですか？なぎささん」

「……何で抱きついてるの？」

しかし、のぞみはなぎさの問いに答えず、頬を擦りつける。

「はいはい、さみしいのね……」

「うん……」

なぎさはしょうがないな、と思い、のぞみのワガママに付き合おうとした。

次回予告

再び大陽の戦士の強襲を受け、窮地に追い込まれるフレッシュ組
その戦いの最中、せつなのもうひとりの人格が目覚める

次回、『ふたりのせつな』

消えたはずの彼女が目覚める

#14 黒き光と消えゆく希望（後書き）

次回、『彼女』が目覚めます

#15 ふたりのせつな(前書き)

R15の限界に挑戦 part 1

前半なぎのぞ、後半せつな

#15 ふたりのせつな

「まったく……のぞみったら、甘えん坊なんだから……」

なぎさの隣には、不安そうな表情をしたのぞみが自分に抱きついて眠っている。少し頭を撫でてやると、のぞみは安心したのか、腕の力を少し抜いた。

なぜ、こんなにも孤独ひとごぼうちになることに恐怖するのか、その理由は、数時間前にまでさかのぼることになる。

それは日も暮れてしばらくしたときのこと。ほのかが帰り、ダークドリームが帰り、そして自分も帰ろうとしたところ、のぞみが頑としてこれを拒んだため、自分だけが残ることになった。

「のぞみ、何でそんなにもひとりぼっちになるのを嫌がるの？」

「怖いんです、またプリキュアのみんながバラバラになるのが……」
『また』という単語に違和感を感じたものの、なぎさはその違和感を意図的に振り払い、一言だけ「そう……」とつぶやく。ここで余計なことを聞いて、事態を悪化させる気など毛頭ない。

「このままだったら、みんなおかしくなる……みんなバラバラになる……」

「ええ、でも私達はプリキュアである以前に、ひとりの人間なの。意見の食い違いのひとつやふたつ、あってもおかしくはないでしょ、なぎさのその意見に対して、のぞみは短くうなずく。

「けど、のぞみはそれでも分かりあいたい、そう思っている」

「うん……」

暗く沈んだのぞみを見て、なぎさはひとつ息をついて立ち上がる。やはりこういう湿っぽい空気はどうも苦手だ。

「のぞみ、もう寝る？」

「ううん、もう少しだけ起きてる」

「それじゃ、一緒にお風呂入る？」

「うん!」

なぎさのその提案に対して、のぞみは満面の笑みを浮かべて答えた。

「のぞみ、左、もうちょつと下……そう、そこ」

のぞみの耳に、水滴の弾ける音が聞こえる。のぞみの最も尊敬する先輩である美墨なぎさに髪を洗ってくれと頼まれたため、のぞみはそれを嬉々として受け入れた。

なぎさの髪を洗い流しながら、のぞみはふと思う。どうして、こんなに胸がドキドキするのだろう。同じ状況でも、ココの時は何も感じなかったのに……

彼女の魅力はなんだろう……と、のぞみはふと思う。一見しただけでは判断できないしなやかな筋肉、一言では言い表せない不思議なまでのカリスマ性、そして、皆の期待を一身に背負って戦う強い精神、これらの要素が複雑に絡み合い、美墨なぎさを形成しているのだろう。

そのなぎさが、おもむろに髪を掻き上げ、軽く頭を振る。

「のぞみ、次はアンタの番」

「えっ、あつ、はい……」

のぞみがうるたえている間に、いつの間にか前後が入れ替わる。そして、先程のお返しと言わんばかりに、なぎさがのぞみの髪を洗いだした。

「ねえ、のぞみ。アンタってさ……」

「えっ?」

「意外と……打たれ弱いよね……」

なぎさに核心を突かれ、のぞみは返す言葉を失う。おそらく、彼女が指摘するからして、相当打たれ弱いのだろう。

自分では強いつもりだったのだが、なぎさからしてみれば、単に虚勢を張っているに過ぎなかったのだろう。

知らず知らずのうちに、自身の内面を覗かれていたと知り、のぞみは少し顔を赤くする。しかし、それを言うなら、なぎさもまた、虚

勢を張っているのではなからうか。

本当の自分を見られないようにと、必死に演じてきた偽りの自分。友を偽り、仲間を偽り、そして、自分自身さえもずっと偽ってきた。微笑んだ瞳の奥にかげりが見えたのはそういうことか。彼女の暗いココロの奥に、ひとり膝を抱えている姿が見えた。誰にも本当の自分を見せることができず、余計なプライドが邪魔をして余計に自分を押し殺す。

彼女はガラスのように、いや、ガラス以上に繊細で脆いココロの持ち主だな……とのぞみは感じた。彼女は不器用で、臆病で、そしてそのくせ寂しがりで、のぞみには今の彼女の姿そのものが世界を表しているように思えた。

そんなことをずっと考えていたため、のぞみはなぎさに呼ばれていることに気づけなかった。

「のぞみ……のぞみ……!!」

「ふえっ？」

「のぞみ、『ふえっ?』じゃないわよ……まったく、いくら呼んでも返事しないんだから……」

「すみません……」

「ホラ、流すわよ。目、瞑って」

なぎさに促されるままに、のぞみは目を閉じる。目を閉じてしばらくすると、のぞみの髪を覆っていた泡が流れ落ちる。

「ハイ、終了」

そして、のぞみもまた、なぎさに倣って髪を掻き上げ、軽く頭を振る。

「のぞみ、次、背中」

「……流せと?」

「逆よ、私が流すの」

そして、なぎさに促されるままに背中を流してもらった。

「ねえ、のぞみ」

「なんですか?」

「アンタってさ……意外と体小さいのね……」

「……ケンカ売ってるんですか？」

「アンタの背中、ずいぶん大きく見えたから……」

そんなこんなでお互いの背中を流し合い、たっぷりの湯を満載した湯船に仲良く浸かる。

「ふう、生き返る……」

「そんな年寄りみたいなこと……」

なぎさの年寄りじみた発言に、のぞみは思わず突っ込んでしまう。のぞみはふと、あることが気になり、なぎさに質問する。

「引き留めた私が言うのもなんですが、こんなに遅くまでいて大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ、友達の家に泊まるって連絡は入れたから」

それなら安心だな……と思ったのぞみは、嬉しくなっついでいなぎさに抱きついてしまう。

「ちよつ、のぞみ、どうしたの!？」

「だって……嬉しくて……」

ふと、なぎさを見ると、しょうがないな……とでも言いたげな表情を浮かべている。そして、ふたりは自身のココロの赴くままに、お互いに唇を重ねた。

そういえば、そこから大変だったんだっけ、となぎさはひとり苦笑する。離れたくない一心でずつとしがみついて、なだめすかすのに軽く30分の時間を要した。

しかし、今は安心して眠っているから大丈夫だろうと思ったなぎさは、ゆっくりと眠りの底へと落ちていった。

とある一軒家の一室のベランダに、ひとりの少女 明堂院いつき

がタオルと金槌を手に立っていた。何をするかと言つと、無論、決まっている。この家に忍び込むのだ。

余談だが、ポプリはうるさいので連れてきていない。

既にここへ来る前に、蒼乃美希のブルンと、山吹祈里のキルンは、キュアベリー彼女達の手元から奪取している。あとは、桃園ラブのピルンと、キュアピーチ東せつなアバツシヨウのアカルンだけだ。

変身アイテムの要であるピククルンさえ奪ってしまえば、あとは彼女達の持つ携帯電話を破壊するだけ、楽なものだ。

いつきは、目の前のガラスを静かに割って鍵を開ける。音を立てずに目的のピククルンを探していると、ベッドの上で何か動いたため、いつきは身構えた。

気づかれたか、と警戒するが、単に寝返りを打っただけと気づき、いつきは少し安堵する。目的のピククルンを手に入れて少し喜んでいると、喉が渴いたことに気づく。

しかし、ここでいつきは三つの愚を犯した。ひとつは、いつもの感覚で冷蔵庫のドアを開けたこと、もうひとつは、律儀にコップをおうとしたこと、そして三つ目は、冷蔵庫の物色に時間をかけてしまったこと。

散々悩んだ末に、牛乳を手にとったいつきは、ご丁寧にコップへと注いでいく。そして、その牛乳を飲もうとコップに口をつけると、後ろから誰かに肩を掴まれる。

振り向かずともわかる、東せつなだ。

「あなた、私達のピククルンを奪って、何が目的!？」

「決まっている、君達からプリキュアの力を奪うためさ」

「力を奪って、どうしようって言うの!？」

せつなの詰問に、いつきはやや嘲笑気味に答える。

「僕の理想郷を実現させるための障害となる、君達フレッシュ組とマックスハート組を排除。そのうえで僕に賛同するものと共に、すべてのプリキュアワールドをこの僕が統治するのさ」

「つまり、本命は私のアカルンってわけね」

「ああ、ほかの三本、特にピルンとキルンは必要ないからね。今後どこかの世界で処分させてもらうよ」

「私のアカルン、返して!！」

「そうは……させるか!!」
そういつきが叫び、振り向きざまにせつなに向けて牛乳を満載したコップを投げつける。せつなが腕を畳んで防御している間隙をついで、その脇をすり抜ける。
そして、比較的近くにあった窓ガラスを突き破って宙に身を躍らせる。こころの種をパフュームに入れて変身してから少しすると、桃園ラブと東せつなのふたりが現れた。

せつかく夢の中で幸せゲットしていたところをせつなに叩き起こされて不機嫌になっていると、『ピククルンを奪われた』と聞かされ、桃園ラブは着替える間もなくせつなの後を追いかけて、ピククルンを奪った犯人のもとへたどり着いた。

「サンシャイン、私達のピククルン返して!!」

「キュアピーチ、『返せ』と言われて『ハイそうですか』とバカ正直に返す奴がこの世界にいると?」

「だったら、力づくで取り返すまでよ!!」

そうラブが言つて、偶然近くにあった木の棒を掴んでサンシャインに急迫する。ラブの振り下ろした木の棒は、しかしアカルンのレポート能力のせいで空振りに終わる。

その後も何度となく木の棒を振り回すも、すべてアカルンのレポートによってかわされ、さらに寝起きの状態で戦ったこともあり、息が上がってきた。

「サンシャイン・ダイナマイト!!」

突如サンシャインを中心に金色の爆発が起こり、それによって生じた爆風によって大きく吹っ飛ばされ、植え込みに叩きつけられる。しかし、せつなは植え込みではなく、建物の壁に叩きつけられたため、気を失っていた。

「せつな!!」

どこか遠くで、自分を心配するラブの声が聞こえる。もっとも、当キ

アパッション

の本人は現実逃避でもするかのごとく、気絶しているのだが……
サンシャインはピックルンを奪ったことによつて戦う力を奪つたと勘違いしているようだが、彼女は相当な思い違いをしている。サンシャインはキュアパッションとしての東せつなしが知らないため、

イスとしてのせつなにまったく気づいていない。
久しぶりに戦つて、ラブを驚かせてみるかと思つたイスは、胸の前で手を擦り合わせ、両腕を大きく開き、解除コードを唱える。

「スイッチ・オーバー」

次回予告

気絶したせつなにかわり、入れ替わつたもうひとりのせつな苦戦するふたりのもとに、あるひとりのプリキュアが現れる

次回、『五つの銃口』

静かなる戦いが、今始まる

#15 ふたりのせつな（後書き）

次回、イースが大活躍……？

#16 五つの銃口(前書き)

キュアエクス登場

16 五つの銃口

桃園ラブは驚きを隠せずにいる。無理もない、クラインによって処刑されたはずのイースが目の前にいるのだから……

「なんで……なんであなたが……」

『ここにいるのか』と聞こうとしたが、イースはそれを一言で封殺する。

「その質問にはあとで答える……来るぞ」

イースに言われ、ラブは身構える。そして、イースが飛びすさみ、戦いの第二幕の鐘を打ち鳴らした。

共同駐車場の敷地内に、風を切る音が響きわたる。

目の前のプリキュアに向けてイースが拳を繰り出すも、サンシャインは先程からずっとアカルンのテレポート能力を使ってかわし続けているため、イースはふところ思った。

もしかして、こいつ自分よりも弱い相手にしか勝てないんじゃないか……と。

そうなっただら話は早い。圧倒的な実力差を叩きつけて、ピックルンを奪還するだけだ。それに、だんだん敵の行動パターンが読めてきた。

彼女はテレポートすると必ず背後をとろうとする。つまり、テレポートした瞬間に後ろ回し蹴りを放てば、攻撃があたるということ。

イースは試しに軽く右ストレートを打ちこむと、こちらの予想通りアカルンでテレポートした。そして、イースはそのスキを狙って後ろ回し蹴りを叩き込む。

自分の攻撃パターンが読まれて驚きを隠せずにいるのか、サンシャインはイースに向かって叫ぶ。

「お前はいつたい、誰なんだー!!」

『誰だ』と聞かれたら、答えないわけにはいかない。

「我が名はイース、もうひとりの東せつな」

「イース……」

ラブは歓喜と驚愕をない交ぜにした表情でイースを見つめていた。イースが復活してくれた、それは嬉しい。しかし、メビウスのいない今、イースは何のために、誰のために戦うというのだろうか。

気になって仕方がないが、今聞くわけにはいかない。ことに、キュアサンシャインと戦っている今のイースには……

しばらくふたりの戦闘を眺めていると、ふいにサンシャインの動きが変わった。なんとシャイニータンバリンをもうひとつ召喚したのだ。

そして、そのふたつのシャイニータンバリンから、ゴールドフォールテバーストを放つ。イースはそれをかわそうとするも、その半分をまともに食らってしまった、近くに駐車してあった車に叩きつけられた。

幸い、車のほうはフロントガラスに大きくヒビを入れるだけにとどまったが、イースのほうは両腕に無数の切り傷を作り、さらには腰を強打してサンシャインにつけ入るスキを与えてしまう。

「っー!!」

「無様なものだね、とてもプリキュアとは思えないよ」

「貴様、プリキュアとしての誇りも矜持もなくしてしまったか!？」

「ふっ、そんなもの……ない!!」

そうサンシャインは言うやいなや、シャイニータンバリンを構える。そして、イースが一方的に蹂躪されている光景を見て、ラブは悔しさに歯噛みする。

元はといえば、自分がちゃんとピククルンを管理しておかなかったのが悪いのだ。しかし、今はそんなことを言っつて、自分を責めている場合ではない。

とは言うものの、今の自分に戦う力がないのも事実であった。戦う力……それさえあれば……

そんなことを考えていると、ふいに別方向から小さな何かが飛んできた。

イスが一方的に蹂躪され、ラブが自身のふがいなさに齒噛みしているころ、アルガティアは戦闘地域からほど近い小さな一軒家の一室からスナイパーライフルを構えていた。

「キュアサンシャイン……お前はいつたどこまで卑怯なんだ!!」
スナイパーライフルのスコープから覗く光景を見て、アルガティアはひとりつぶやく。スコープの先には、一方的に蹂躪されている黒い服を着た銀髪の少女が見える。

サブレッツサーは装備してあるし、装填した7.62mmNATO弾ナトは亜音速になるよう若干手を加えてある。相当耳のいい者でなければ音が聞こえることはないだろう。

そう確信したアルガティアは、ためらうことなくトリガーを引き絞る。

「狙い撃つ!!」

キュアサンシャインの猛攻に苦戦していると、突然サンシャインの足元が火花を散らす。おそらく、いや、間違いなく何者かが狙撃したのだろう。

そして、その狙撃から数分後にひとりの少女が現れた。現れた少女は、腰背部にステアーを二挺、そして腰元のホルスターにデザートイーグルを二挺装備し、さらにはM4カービンを両手に抱え、地球連合政府と共に解体されたはずの地球連合軍の制服に身を包んだ、おおよそプリキュアとは思えないプリキュアであった。

「貴様、キュアサンシャインの味方か!？」

「安心しなさい、あなたたちの味方よ」

そう目の前のプリキュアが言い、腰元のステアー二挺をこちらに差し出す。

「使い方、わかるわね？」

「ああ、だいたいは」
そして、ラブにも同じ要領で腰元のデザートイーグル二挺を渡す。
当然ラブは困惑したものの、すぐにその迷いを振り払い、デザートイーグルを手に取る。
そして、軍服をベースとした紫色のコスチュームに身を包んだプリキュアがM4を構える。構えられたM4の反動が、戦いの第三幕の鐘を打ち鳴らした。

そして、その銃撃戦の様子を、上空から眺めるひとりの少女がいた。背中の大きなX字状に生えた天使の翼がトレードマークの彼女の名は、キュアエクス、この世界の歪みを断ち切る天上のプリキュア。エクスがしばらくその銃撃戦を眺めていると、少しずつ三人組の方が押されぎみになってきた。

これは救援が必要かな、と感じたエクスは、腰背部に装備したキュアダガーをツインテールのプリキュアに投げつけ、両肩のキュアサーベルを両手に握らせ、リミッター解除コードをつぶやく。
「キュアエクス、トランスモード」

次回予告

苦戦する三人の前に現れた、能天使の名を冠するプリキュア
彼女の存在は、世界にどんな変革をもたらすのか

次回、『能天使エクス』

彼女は、プリキュアという名の……ガンダム

16 五つの銃口（後書き）

次回、ようやく長い一日が終わります

#17 能天使エクス（前書き）

第一章完結

#17 能天使エクス

「っ、しぶとい!!」

アルガティアが先程からM4カービンをサンシャインに向けて連射するも、サンシャインはひまわり型の光る盾で防御する。

「なんだ、君の実力はこんなものか」

「あなたって、人を見下すのが好きみたいね」

「銃^{てんなもの}火器に頼らないといけない君に言われたくはないね」

「奇襲しかできないあなたの言うセリフではないわね」

「ふっ、何を綺麗事を。すべての戦いは勝つてこそ意味がある、勝利こそがすべて。徒手空拳で戦うことのできない君に何を言われようが、それは負け犬の遠吠えでしかない。奇襲をかけようが、敵の寝首を搔こうが、勝てばいいんだよ、勝てば!!」

そうサンシャインは言っつて、両手のタンバリンからエネルギー砲を放つ。しかし、アルガティアはそのすべてをかわし、逆に反撃の一撃を叩き込もうとするも、両手のタンバリンを押し付けられ、エネルギー砲をゼロ距離から叩き込まれる。

「まさかとは思っつけど、この程度の実力で私に勝とうなどと本気で思っつていたわけじゃないよね？」

アルガティアは悔しさに歯噛みする。サンシャインの指摘どおり、これが自分の実力なのだ。格闘戦の適正が低い以上、こうして距離をとって戦わねばならない。

アルガティアが次なる手に窮していると、突然上空から光る刃がサンシャインのタンバリンに突き刺さり、爆散した。

三人目のプリキュアが現れた当初、サンシャインは若干警戒の色を見せたが、たいした実力もないとわかると、とたんに優勢になる。

この程度の実力なら、全員まとめて叩き潰せる。

三対一という状況の中、圧倒的優勢な優越感に浸っつてっていると、その

優越感に水を差すかのようにシャイニータンバリンに光る刃が突き刺さる。

幸いにも、破壊されたのは左手のタンバリンだけだったため、特にこれといって被害はなかったものの、爆煙によって視界をふさがれる。

「っ、どこから!？」

サンシャインが辺りを見回すと、残像が見えるほどのスピードで高速移動する赤く光る『何か』が見える。サンシャインはその『何か』に向けてサンシャイン・フラッシュを放つも、そのすべてを左右に揺さぶりをかけてかわされる。

「当たらない!？」

次の瞬間、背後から衝撃を食らう。サンシャイン・フラッシュをかわした赤く光る『何か』に背後を取られたのだ。

「私の背後を!？」

そして、サンシャインの見上げた先にいたのは、両手に光る剣を握り、こちらを見下ろす赤く発光したプリキュアだった。

トランスモード、思ったとおり、いや、思った以上に自分の期待に込えてくれる。金色のプリキュアに攻撃を加えながら、エクスはそう感じた。

見ると、金色のプリキュアがこちらを苛立ちのこもった目で睨みつけてくる。無理もなからう、今まで一方的に蹂躪していたのが、逆に蹂躪される立場になったのだから。

「どんな手品か知らないが!!」

すると突然、金色のプリキュアが特攻をする。だが、エクスはそれをかわし、金色のプリキュアを右から、左から、前から、後ろから、上から、下から、一方的に蹂躪する。

そして、とどめのプリキュア・エクスサーベル・ハリケーンスラッシュを叩き込むも、叩き斬ったのは右手に握っていたタンバリンだけで、金色のプリキュアは斬り損ねた。エクスの後方で、金色のプ

リキュアの苛立つ声が聞こえる。

「っ、何なの、何なのよアレはああっつ！？」

事情はどうあれ、ここにいた三人に対する脅威は去った。キュアサーベルの刀身を消失させ、両肩のマウントタッチに固定する。

「あなた、いつたい何者！？」

見ると、紫色のコスチュームに身を包んだプリキュアが、ライフルをこちらに向けて構えている。無理もない、突然現れて、圧倒的な力を見せ付けられたら、誰だって警戒する。

「安心して、あなたたちと敵対するつもりはない」

「あなた、名前は？」

「天上刹那、キュアエクス」

名前を聞かれたため、エクスは簡潔に名乗り、再びトランスモードを起動させてその場を去った。

次回予告

激闘の一日から一ヶ月、世界は大きな変革を見せていた

そして、のぞみは意外な人物と再開する

次回、『雨の中の再開』

なぜ、こつもすれ違つ

#17 能天使エクス（後書き）

次回、第二部開幕

ここで読者の皆様にお知らせ。

この小説でも、人気投票をすることになりました。
詳細は次回にて。

人気投票のお知らせ

作者「読者のみなさん、はじめまして。プリキュアvsプリキュア作者の刹那・F・セイエイです」

なぎさ「作者さん、いったいなんの用ですか？」

作者「ああ、ほかの小説にならって、うちでも人気投票をやってみようかな……って」

のぞみ「作者さん、それって仮面ライダー夢原信太郎の人がやってるからって理由じゃないですよね？」

作者「のぞみ……まさしくそのとおりなんだ……」

ラブ「あはは……」

作者「投票できるキャラクターは以下のとおりだ」

- ・ 美墨なぎさ
- ・ 雪城ほのか
- ・ 九条ひかり
- ・ 日向咲
- ・ 美翔舞
- ・ 霧生満
- ・ 霧生薫
- ・ 夢原のぞみ

- ・夏木りん
- ・春日野うらら
- ・秋元こまち
- ・水無月かれん
- ・美々野くるみ
- ・桃園ラブ
- ・蒼乃美希
- ・山吹祈里
- ・東せつな
- ・花咲つぼみ
- ・来海えりか
- ・明堂院いつき
- ・月影ゆり
- ・水澤睦月
- ・キュアズヴェズダ

・女神瞳

・天上刹那

・ダークドリーム

・ダークルージュ

・ダークレモネード

・ダークミント

・ダークアクア

・ダークプリキユア

作者「……以上だ」

咲「投票の条件とかはあるんですか？」

作者「ああ、投票の条件については以下のとおりだ」

・ひとり三票まで

・変身後の名前でも、変身前の名前で投票したとみなす（ただし、名前が同じ場合は一票とみなす）

・同一キャラクターへの同時投票はひとり二回までとする

・一度投票したら、12時間は再投票禁止

・初見さん、常連さん問わず、作品の感想を一言以上書いて投票す

ること（投票のみの場合、投票は無効とする）

作者「こんな感じ」

せつな「投票条件の二番と三番についてくわしく解説してもらえますか？」

作者「ああ、つまりこういふこと」

・投票例

夢原のぞみ

キュアドリーム

シャイニングドリーム

この場合、夢原のぞみに三票入れたことになる

・投票例

夢原のぞみ

夢原のぞみ

夢原のぞみ

この場合、夢原のぞみに一票入れたことになる

作者「三番はこういふこと」

・投票例

夢原のぞみ

キュアドリーム

シャイニングドリーム

作者「これでのぞみに三票入れたことになる」

・投票例

キュアドリーム
キュアルージュ
キュアエクス

作者「これでのぞみに合計二回投票したことになります、以降夢原のぞみへの投票は無効とする」

つぼみ「くわしく解説していただいておりますありがとうございます」

作者「投票期間は今日から二週間だ」

全員『みなさんの投票、お待ちしております！！』

キャラクター紹介（前書き）

第二部開始に先駆け、改めてキャラクター紹介

キャラクター紹介

美墨なぎさ

本作主人公のひとりにして、すべてのプリキュア伝説の創始者。

明鏡止水の精神と、圧倒的格闘センスの持ち主で、彼女を慕う女性
は数知れず、水澤睦月や夢原のぞみにまで慕われている。

どんなに相手が間違っていようと、『対話による解決』を望む平和
的思想の持ち主。故に、相手が武力を振るわない限りは、自分も攻
撃しようとはしない。

カンの鋭さは美翔舞をも凌駕し、のぞみがシャイニングドリームに
変身したことや、睦月が過去に縛られたまま戦っていたことを一瞬
に見抜いた。

しかし、最近はそのカンの鋭さに自分自身でも違和感を感じている。

CV・本名陽子

雪城ほのか

すべてのプリキュア伝説の創始者にして、美墨なぎさのパートナー。
どんな状況下においても凜とした態度をとる落ち着いた性格や、物
腰の柔らかい口調などといった要素から、男女問わず多数の人から
支持を集めている。

なぎさとは今でも時折反目するものの、それでも以前のように喧嘩
に発展するということはなく、お互いに良好な交友関係を築いてい
る。

CV・ゆかな

九条ひかり

光の園のクイーンが、生命、心、十二の意志ハーティエルに分裂した際の生命の
部分。

おっとりとした外見に似合わずかなりの毒舌の持ち主で、突然きつ

いことを言つては、周囲を困惑させる。

しかし、それは相手を思いやつてのことなのだが、なぜかうまく伝わらず、トラブルに発展しがち。

CV・田中理恵

日向咲

スプラッシュスター組のリーダーであり、夕凧中ソフトボール部のトップエース。

客足が遠のいていき、ヒマをもて余していたところに、来海えりかからつぼみといつきの監視を頼まれ、咲はそれを引き受けた。

最近は、暴走しがちなつぼみといつきを落ち着かせるために、自らパンを焼いて提供している。

CV・樹元オリエ

美翔舞

日向咲のパートナーにして、夕凧中美術部の期待の新星。

特に何もすることがなく、ヒマをもて余していたところに、来海えりかからつぼみといつきの監視を頼まれ、舞はそれを咲と共に引き受けた。

最近は、つぼみといつきの暴走のせいで絵を描く気力を失つたため、咲の焼いてくれるパンでティータイムを過ごすのが唯一の楽しみになつている。

CV・榎本温子

霧生満

元ダークフォールの戦士であり、舞の数少ない親友のひとり。

咲の店の手伝いに来たはいいが、客がなかなか来ずにヒマをもて余していたところに、来海えりかからつぼみといつきの監視を頼まれ、それを引き受けた。

最近の楽しみと言えば、咲の焼いてくれるパン（特にメロンパン）。

CV・瀧崎ゆり子

霧生薫

元ダークフォールの戦士であり、舞の数少ない親友のひとり。舞同様、特に何もすることがなく、ヒマをもて余していたところに、来海えりかからつぼみといつきの監視を頼まれ、それを引き受けた。最近の楽しみは、咲の焼いてくれるパン。

CV・岡村明美

夢原のぞみ

本作主人公のひとりであり、G O G O ! ! 組のリーダー。

一度決めたことは何があっても曲げない、悪く言ってしまうと頑固者の性格だが、そのくせメンタル面でラブ以上に弱く、ダークドリムと再会した際には、感動のあまりに泣き出してしまった。

自分を支えてくれるという理由からなぎさのことを慕っており、彼女に対してはとびきりの態度で甘えている。

しかし、かつての仲間たちが次々に裏切っていく現実にショックを受け、少しずつココロを閉ざしはじめている。

CV・三瓶由布子

夏木りん

のぞみの幼馴染みであり、G O G O ! ! 組1の苦勞人。

のぞみのために何かできることはないかと試案した結果、いつき達に与するフリをして内情を探るといふ危険極まりない行動を採択した。

寝ても覚めてものぞみのことを心配しており、のぞみのことを傷つける者は、たとえ味方であろうと容赦無く叩き潰す。

CV・竹内順子

春日野うらら

GoGoGo!!組の癒し系要員であり、現在人気急上昇中の売れっ子アイドル。
のぞみLOVEな性格は相変わらずであり、のぞみに対する想いを熱弁しては、周囲をドン引きさせている。

しかし、最近はのぞみの置かれている境遇を羨ましく思っている。

CV・伊瀬茉莉也

秋元こまち

GoGoGo!!組のポケ担当であり、最強最悪のトラブルメーカー。
自分を認めてくれない世界に失望し、「認めてくれないなら、いっそのこと壊してしまえ」という思想のもと、いつき達の側につくことにした。

いつき達の側についてはいるが、いつきの理想には微塵の興味も示していない。

CV・永野愛

水無月かれん

GoGoGo!!組の作戦参謀であり、大富豪水無月財閥の一人娘。
行くあてのないくるみを拾い、なし崩し的に同居をしてはいるが、やたらおとなしいくるみにやや違和感を感じている。

成り行きでのぞみの味方をしてはいるが、どちらかといえば親友こまちの動静が気になる。

CV・前田愛

美々野くるみ

青いバラの戦士であり、パルミエ王国準お世話役のミルク。
バラバラに行動したはいいが、行くあてのないところをかれんに拾われ、なし崩し的に同居がはじまった。

日に日に明るさを失っていくのぞみを本気で心配しており、なんとか明るさを取り戻してもらおうとひとり頑張っている。

CV・仙台エリ

桃園ラブ

フレッシュ組のリーダーであり、せつなの同居人。

かつての仲間たちがバラバラになっていく現実にショックを受け、表面的には明るく振る舞ってはいるものの、本当は自分がいちばん泣き出してしまいたい。

現在はピククルンを失ってしまい、戦うことができずにいる。

CV・沖佳苗

蒼乃美希

フレッシュ組の作戦参謀であり、現在人気急上昇中の人気モデル。

無理に明るく振る舞うラブを心配しており、なんとか出来ないものかと考えている。

現在はピククルンを失い、戦うことができずにいる。

CV・喜多村英梨

山吹祈里

フレッシュ組の癒し系要員であり、ラブのよき相談相手。

引っ込み思案だった性格はどこへやらというくらいに芯が強く、ラブの相談に乗ったりしている。

現在はピククルンを失い、戦うことができずにいる。

CV・中川亜紀子

東せつな

フレッシュ組のポケ担当であり、ラブの同居人。

キュアサンシャイン戦の最中、かつての自分だったイースが別人格として覚醒し、二重人格となった。

ちなみに、現在覚醒している人格はイース。

CV・小松由佳

花咲つぼみ

ハートキャッチ組のリーダーであり、世界の破壊者の尖兵。

『世界にプリキュアという美しい花を咲かせる』という理想を掲げ、その道を阻む夢原のぞみを排除殺すすることに執着している。

現在はいつきの理想を叶えることより、のぞみをどうやって殺そうかで頭がいつぱいになっている。

CV・水樹奈々

来海えりか

ハートキャッチ組のボケ担当であり、ハートキャッチ組1の苦労人つぼみといつき頭痛を悪化させる原因のせいで常に偏頭痛が絶えず、いつか頭痛が原因で死んでしまわないかと本気で心配している。

現在のえりかの立ち位置ボシヨンはふたりの監視であるため、りん同様にいつ処刑されてもおかしくない。

CV・水沢史絵

明堂院いつき

ハートキャッチ組の斬り込み隊長であり、世界の破壊者の尖兵。

世界の破壊を言い出したのは彼女であるが、現在は美墨キュアブラックなぎさの排除害に躍起になっている。

現在はつぼみ同様にひとりの少女を殺せさえすればいいため、手段は一切選ばない。

CV・桑島法子

月影ゆり

ハートキャッチ組の作戦参謀であり、現在最年長のプリキュア。

つぼみといつきの監視が年長者たる自分の義務と割り切っており、えりかと違って頭痛は起こしてない。

しかし、最近のつぼみといつきの行動には心底あきれており、いつ

頭痛持ちになってもおかしくない。
C V ・久川綾

キャラクター紹介（後書き）

次はオリジナル戦士組

キャラクター紹介 オリジナル戦士組（前書き）

オリジナル戦士組の紹介

キャラクター紹介 オリジナル戦士組

水澤睦月（キュアアルガティア）

機動戦士ガンダム00の世界出身のプリキュアであり、GASHさん発案のオリジナルプリキュア。

かつての睦月は過去の贖罪のために戦っていたが、それをなげさに『過去のために戦うアンタには何も守れない』と言われ、未来のために戦うことを決意した。

しかし、過去のすべてを捨て置いてきたわけではなく、時折感傷にひたっている姿を見かけることがたまにある。

キュアアルガティア

水澤睦月が自身の変身アイテムであるリジエネレイトブレスを使用して変身するプリキュア。

銃撃戦を得意とし、超長距離からの一点狙撃から、乱戦における乱れ撃ちまで、幅広い射撃センスを持つ。

しかし、格闘戦はてんでダメで、プリキュアとするにはやや疑問が残る。

イメージCV・斉藤千和

キャラクターイメージ・暁美ほむら

女神瞳（キュアヴィーナス）

内戦において死んだ少女が、女神の力を受けてこの世界に転生した、ターザンさん発案のオリジナルプリキュア。

内戦で死んだ、までは覚えていたが、何の内戦で死んだかまでは覚えておらず、日々頭を悩ませている。

そのせいかは不明だが、最近頭痛に悩まされている。

キュアヴィーナス

女神瞳が自身の変身アイテムであるホーリーカーナを使用して変身するプリキュア。
どのような戦闘スタイルを得意とするのかは全くの未知数であり、今後明らかになっていくものと思われる。

唯一わかっている情報は、変身アイテムが自身の武器であることくらいである。

イメージＣＶ・

キャラクターイメージ・

天宮唯（キュアセラフ）

この世界の天宮グループの令嬢にして、GASHさん発案のオリジナルプリキュア。

常人離れた身体能力と自身の豊富な軍事知識、医療知識をもとに、独自に救助部隊を編成して各地で救助活動を展開していた。

しかし、かれん同様に金銭感覚がかなり 民間軍事会社 というより相当 ズ しているため、自身で結成した救助部隊にP.M.C並の活動資金を注ぎ込んでいる。

キュアセラフ

天宮唯が自身の変身アイテムであるセラフエンブレムを使用して変身するプリキュア。

遠距離から近距離まで、幅広い必殺技を有しており、たまに必殺技を忘れかける。

そのせいかは不明だが、突然自分でも理解不能な意味不明な技が発動する。

イメージＣＶ・かかずゆみ

キャラクターイメージ・

天上刹那（キュアエクス）

出身世界や生い立ちが一切不明瞭な作者発案のオリジナルプリキュ

刹那・F・セイエイ

ア。

感情を表に出さないクールな性格で、口調もかなりきつい。しかし、本当は誰よりも仲間思いで、不器用ながらも悩みを聞いたリ、アドバイスしたりしている。

キュアエクス

天上刹那が自身の変身アイテムであるリバイバルモバイルを使用して変身するプリキュア。

アルガティアとは真逆の接近戦に特化したプリキュアで、合計七本の剣を有する。

その戦いかたは、ソレスタルビーイングのガンダム、『ガンダムエクスシア』を彷彿とさせる。

イメージCV・白石涼子

キャラクターイメージ・アニユー・リターナー

両牙真夜（キュアリベリオン／キュアセイバー）

ふたつのプリキュアの力を有する、桔梗さん発案のオリジナルプリキュア。

人格をふたつ有しているため、真夜自身もたまにどっちが本当の自分かわからなくなる。

そのため、意識してかは不明だが、リベリオンるときとセイバーのときとで口調を大きく変えている。

キュアリベリオン

両牙真夜が自身の変身アイテムであるグラッジ・ルージュを使用して変身するプリキュア。

セラフ同様に遠距離から近距離まで、幅広い攻撃方法を有している。しかし、武装は選択式で、あまり汎用的とはいえない。

キュアセイバー

雨牙真夜が自身の変身アイテムである名称不明のペンダントを使用して変身するプリキュア。

衝撃系の必殺技を得意とし、音の衝撃波ショックウェーブによって相手を翻弄する。たまに何を勘違いしたのかは不明だが、手元のリライフシンバルをフリスビーよろしく相手に投げて攻撃する。

イメージＣＶ・

キャラクターイメージ・

キュアズヴェズダ

生まれながらにしてプリキュアの力を有する、プシエミスルさん発案のオリジナルプリキュア。

争いや自然の破壊を一向にやめようとしなない人類に絶望し、世界を破壊することを決意した。

えりかやゆり同様、つぼみといつきの行動についていけないマトモな思考の持ち主。

イメージＣＶ・

キャラクターイメージ・

キャラクター紹介 オリジナル戦士組（後書き）

次回、第二部始動

18 雨の中の再開（前書き）

第二部、始動

18 雨の中の再開

あの激闘の一日から一ヶ月が過ぎ、世間は雨の降りしきる梅雨の季節となった。この一ヶ月、お互いの勢力による小規模な戦闘が何度かあったが、特にこれといって被害はなく、世界は依然として平和であった。

そして、あれからのぞみはなぎさにべったりなもの、それによって関係が悪化するなどということはなく、お互いに良好な交友関係を築いていた。

そして、自身のパーソナルカラーと同じ色の傘をさした情熱の赤い炎、キュアルージュこと夏木りんは、雨の降りしきる公園の中、キユアサンシャインと対峙していた。

「サンシャイン……」

「夏木りん、私と共に来てほしい」

何のために、とは聞かない。彼女のことだ、世界の破壊を手伝えとでもいうのだろう。

りん自身、世界の破壊は微塵の興味もないし、のぞみが幸せであってくれれば、それでいい。

しかし、のぞみが幸せでいられるには、のぞみに対するすべての障害を誰かが排除しなければならぬ。そう、誰かが……

のぞみには悪いが、いつきの行動を探るため、いつき達の側につきことにする。敵の内情をのぞみに横流しリークするためにも、諜報員インジレントとして潜入せねばならない。

サンシャインに対する答えはすでに決まっていたが、りんはあえて思案するフリをして時間を稼ぎ、解答を遅らせる。りんは数瞬ほど思案するフリをした後に、サンシャインに当初の決定を告げた。

「わかった、私はアンタについていく」

「!?!?……ありがとう、夏木りん」

「ただし、ひとつだけ条件がある」

『条件がある』と聞いて、サンシャインはいぶかしむような視線でりんを睨む。

「条件？」

「今後一切、奇襲をかけないで」

サンシャインはひとしきり考えたあと、一言「わかった」とだけ答えた。

これでのぞみに対する脅威がひとつなくなった。だからと言って、油断は出来ない。諜報員^{エージェント}である以上、素性がバレたら最悪処刑されかねない。

夏木りんの、キュアルージュの戦いは、まだ始まったばかりなのだから……

夏木りんがいつき達の側に潜り込んだころ、うらははやはりカレーをヤケ食いしていた。

「……うらはら？」

その様子を、やはりエプロン姿でキッチンに立つシロップが心配するも、うらははその心配をはねのけ、おかわりを要求する。

「おかわり!!」

今のうららを、のぞみが見たらなんと言うだろう。しかし、シロップはその思考を意図的に振り払い、次のカレーをうららに渡す。

そのため、シロップは気がつけなかった。うららの仄暗い心境に……

うらががカレーをヤケ食いしているころ、のぞみとココは人気の少ない商店街の路地をあてもなくさまよっていた。

「りんちゃん、今頃どうしてるんだろ……」

「心配するな、あいつならきつと大丈夫だ」

ココの返答に、のぞみは短くうなづく。

ふと、のぞみが顔を上げると、二色の傘が並んで足早にこちらへと向かってくるのが見えた。青と紫、まるで紫陽花だな、と若干どう

でもいいことを考えていると、紫色の傘を差した人物が、突然自分の名前を呼ぶ。

「のぞみ!!」

「くるみ……」

それは雨の中の、予期せぬ再開だった。

次回予告

すべてを破壊せんと、暴走する安らぎの大地

キョアアルガディア
大地と海の守り手の手によって、新たな力が目覚める

次回、『断罪の熾天使』

すべてを破壊するなど、万死に値する

18 雨の中の再開（後書き）

次回、セラフ登場

人気投票 中間発表

作者「みなさん、こんばんは。投票開始から一週間が経過したため、このあたりで中間発表といきたいと思います」

現在までの投票数（数字は投票数）

なぎさ3
ほのか1
ひかり1
咲1
舞1
のぞみ7
りん3
うらら1
こまち1
かれん3
くるみ7
ラブ1
美希4
せつな1
つぼみ1
えりか2
いつき1
ゆり1
ダークドリーム6
ダークルージュ2
ダークレモネード2
ダークミント2
ダークアクア1

睦月 1

瞳 1

作者「以上だ」

なぎさ「のぞみとくるみが同票か……」

美希「やった！！四票！！」

ラブ「美希たん、何でそんなにうれしいの？」

美希「だって、もうひとりの私は二票だったんだのよ！！」

満「あれ……？」

薫「私は……？」

ダークプリキュア「何故、私には票が来ない？」

刹那「出たのが遅かったからとはいえ……」

祈里「きつと誰かが票を入れてくれるって、私、信じてる」

作者「あと一週間、みなさん、たくさんの投票、お待ちしております
す！！」

満・薫・祈里・刹那・ダークプリキュア「……私達に清き一票
を！！」

#19 断罪の熾天使（前書き）

キュアセラフ、登場

19 断罪の熾天使

くるみ達と再会を果たしたのぞみは、かれんの計らいによって水無月邸へと招かれていた。ちなみに、なぜかダークアクアがいたのだが、そこは気にしないことにする。

「久しぶり、くるみ。元気そうね……」

「ええ、のぞみこそ……」

せっかく感動の再会を果たしたというのに、そこに快活な笑みはなく、お互いにややぎこちない表情を浮かべて腹を探り合うような会話の応酬が続けている。

そんな状況を見るに見かねたのか、ダークアクアがその場を立ち去ろうとするのだが、かれんに引き止められ、仕方なくといった感じで元の位置に戻る。

「くるみ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

「何？のぞみ」

「何でダークアクアがいるの？」

「えっ、ああ、それは……」

くるみが返答に戸惑っていると、うわさの当の本人が口を開く。

「以前、気まぐれにここへ来て、それからはずっとここへ来ているな」

そして、やや苦笑気味に「もっとも、うちのリーダーの尽力あってこそだが」とつぶやくのを見て、のぞみもまた苦笑する。おそらくは鏡のゲートを使ってダークドリームが送り迎えしているのだろう。ふと気がつくのと、いつの間にか雨がやんでいたため、くるみが帰宅を提案する。

「のぞみ、もうそろそろ帰ってもいいんじゃない？雨もやんだし……」

……」
その言葉を聞き、のぞみは打ち震える。

嫌……帰りたくない……ようやく安心できるぬくもりを手に入れた

というのに、こんなところで手放したくない。

きつと、くるみは親切心から帰宅を提案してくれたのだろう、だが、帰りたくない自分にとって、それは余計なおせっかいでしかない。ふと気づくと、自分でも知らぬうちに、くるみに抱きついていていた。

くるみがのぞみに帰宅を提案したところ、のぞみが突然自分に抱きついてきたのだ。よく見ると、今にも泣きそうな表情を浮かべてこちらを見上げている。

「お願い……そばにいて……ひとりに……しないで……」

『ひとりに』と聞き、くるみは首をかしげる。確か、のぞみにはコ様がついていたはずだ。それなのになぜ……

ひとまずくるみは、のぞみを安心させようとして、のぞみの肩を抱きしめ、違和感を感じる。のぞみって、こんなに小さかったかしら

……

そして、そのまま背中まで抱きしめて、くるみは驚愕の表情を浮かべるとともに、ココに対する怒りがこみ上げてくる。

まったく、あの人は何をやっているのだ。のぞみがこんなにもやせ細っているのにも気づかず、傍観を決め込んで……

この瞬間、くるみはあることを決断した。これからは、のぞみのために戦おうと。

のぞみに降りかかる火の粉あらば、私はのぞみのため、喜んで盾となろう。

のぞみに襲い掛かる脅威あらば、私はのぞみのため、喜んで剣となろう。

そして、のぞみを守るためならば、私は喜んで捨て石となろう。自分はそのために戦うと決意した。のぞみに仇なす者は、何者であろうが排除する。それがたとえ、かつての仲間だったとしても……

くるみがのぞみのために戦うことを決意したころ、りんはハートキヤッチ組のアジトである植物園でなぜか花壇に水をまいていた。

つぼみは何やら怪しい計画を立てているし、えりかはここへ来た時から頭痛で倒れ伏しているし、いつきは不機嫌そうな態度で両足をテーブルの上に投げ出しているし、ゆりさんはそんな現状を見ながらため息をついているし、思わず、こんなチームワークで大丈夫かと言いたくなってしまう。

りんは今までになんとか手に入れた情報を小さな紙片にまとめ、どうやってのぞみに渡そうかと思案する。普通に渡したのではすぐにバレてしまう、なんとか感づかれないように渡さねばならない。

りんはしばらく考え込んで、あることを思いつく。自分の家は花屋なのだから、感づかれそうになつたら『花を届けに行く』とでも言つて、その中に手紙なりデータスティックなりを仕込んで渡せばいいのだ。

どの花で本来の目的をカムフラージュしようかと考え、ある花が思い浮かんだ。確か、最近青いバラが入荷したはずだ。まずはそれに包んで渡すことにしよう。

そう決断したりんは、近くにいたゆりに『家の仕事を手伝つてくるとだけ告げ、植物園をあとにする。青いバラ、まだあっただろうか……』と心中で考えつつ。

りんが手に入れた情報の手紙を青いバラの花束に仕込んでいるころ、一人の少女はあてもなく市内を散策していた。

彼女の名は天宮唯、水無月財閥と並ぶこの世界の天宮グループの令嬢である。

唯は最近頻繁に起こるプリキュアによって起こされた襲撃から人々を救助するため、自身で結成した救助部隊『ソレスタルビーイング』を率いて、各地で救助活動を行っていた。

そして、今日もプリキュアの襲撃があつたと聞き、襲撃現場へと向かう。するとそこには、青い髪のプリキュアと、緑の髪のプリキュアが何かを言い争っていた。

場所が遠いため、詳しい内容は不明だが、あのふたりは元は仲間同

士だったのだろう。しかし、緑のプリキュアには見覚えがなくとも、青いプリキュアには覚えがある。

水無月かれん、水無月財閥の一人娘。自分の生まれる前から両家は親交が深く、度々パーティーで顔をあわせることが多かった。そのため、交友関係を深めるのもそう時間はかからなかった。

唯はすぐさま自作の自衛用武器　スタントンフアー　を構え、緑のプリキュアに向かって突撃する。たとえプリキュアがどれほどの防御力を有してしようと、高圧の電流には耐えきれないであろう。そして、振りおろされたトンフアーは、しかしいつの間にか握っていた細身の剣によって切り裂かれ、さらにその勢いそのまま胸の中心部に突き立てられる。

何が起きたのか理解できないといった表情を浮かべていたのだろう、目の前の緑のプリキュアが冷やかな笑みを浮かべて剣を引き抜く。元はエメラルドグリーンだった刃は、唯の鮮血によって真っ赤に染め上げられていた。

「あなたが邪魔をするからこうなるの」

そう言つて、緑のプリキュアはついでと言わんばかりに唯の胸をX字に切り裂き、思いつ切り蹴飛ばした。

コンクリートの壁に叩きつけられた唯は、その衝撃で鮮血を吐き出す。ほかの隊員たちは、と頭を巡らせたが、どこにも発見できない。多量に出血したせいで、意識が朦朧もろうとしてくる。薄れゆく意識の中で彼女が聞いていたのは、全身を叩く雨音と、コンクリートの道路を弾く水音と不規則なステップを刻む靴音、そして、薄れゆく意識の中でも鮮明に聞こえる銃声だった。

アルガティアが二挺拳銃を乱射しながら、キュアミントに向かって突撃する。あの女、とうとう民間人にまで手を揚げた。その暴拳、万死に値する！！

しばらくして両手の拳銃の銃弾を撃ち尽くすと、アルガティアは両腰のホルスターに拳銃を納め、腰背部のマウントラッチから二挺の

サブマシンガンを取り出し、やはりキュアミントに向かって乱射する。

キュアミント
邪悪なる大地を叩くことも重要だが、今優先すべきは民間人の救助だ。そう判断したアルガティアは、両手のサブマシンガンを上空に投げ捨て、スタングレネード閃光音響手榴弾を投げ捨てた。

キュアミントの身動きが取れない隙について、アルガティアは救助活動を開始する。後方で投げ捨てたサブマシンガンが地面に叩きつけられるが、今はそんなことにかまっていないヒマはない。

自身の力を救済のために使ったのはこれが初めてで、うまくいかなかったかもしれない。しかし、泣き言を言っている余裕など、彼女には刹那の時も与えられていない。

今は無理でも無茶でもやらねばならない。たとえ、世界の道理を自らの無理でこじ開けることになろうとも……

そして、彼女の思いが通じたのか、はたまた本当に道理を無理でこじ開けたのかは不明だが、アルガティアは民間人の救助に成功した。そして、ここへ来る時からずっと肌身離さず持ち歩いていたセラフエンブレムを目の前の少女の手に握らせる。あとは彼女次第だ。

ふと気がつくと、いつの間にかサブマシンガンが青いプリキュアに拾われていたため、アルガティアは背中固定していたシヨットガンを構え、戦いに戻った。

ふと気がつくと、朦朧としていたはずの意識がハッキリとしている。そして、全身を見回すも、切り裂かれた服に付いた出血の跡以外、何も残っていない。

そして、おもむろに手元を見ると、エンブレム状のアイテムをいつの間にか握っていた。

自分はこれを知っている気がする、そして、これをどう使えばいいのかも……

そして、唯は右手に握ったエンブレムを構え、変身コードを唱える。「プリキュア・セラフィック・アドベントー!!」

唯の全身が光に包まれ、その光が消えた先にいたのは、ガンダムタイプの集大成とでも言うべき姿のプリキュアがいた。

「悪しき者を断罪する破邪の極光、キュアセラフ!!!」

セラフは変身してさっそく取った行動はセラフの両腰の剣を引き抜き、緑のプリキュアに向かって斬りかかることだった。

緑のプリキュアが、セラフに気付いたのか、ややあわてて右手の剣で斬り結ぶ。剣を剣で防ぐという発想は正しい、そして間違ってもいる。

セラフは、もう片方の手に握った剣を降り下ろして目の前のプリキュアを袈裟懸けに斬り捨てる。

ダメージが予想以上に大きかったのか、苛立ちのこもった目でこちらを睨み付けながら後方へと飛びすさむ。

その様子を、三人は再び雨脚を強めたどしゃ降りの中、呆然と見つめていた。

次回予告

情報提供のために、花束を作るりん

そしてその花束を、自身の影に渡す

次回、『花屋の仕事』

りんの戦いが、始まる

19 断罪の熾天使（後書き）

次回はりんちゃんさんのメイン回です。

人気投票 結果発表

作者「皆さん、お待たせいたしました。第一回人気投票、ついに結果発表です。栄光の一位は誰の手に!？」
全員「さあ、お前達の票数を数えろ!!」

投票総数

なぎさ：5
ほのか：3
ひかり：3
咲：1
舞：1
満：2
薫：2
のぞみ：8
りん：3
うらら：1
こまち：1
かれん：4
くるみ：8
ラブ：2
美希：6
祈里：2
せつな：2
つぼみ：1
えりか：2
いつき：2
ゆり：1
ダークドリーム：7

ダークルージュ：2
ダークレモネード：2
ダークミント：2
ダークアクア：2
ダークプリキュア：1
睦月：2
瞳：2
唯：2
刹那：0
ズヴェズダ：0

順位発表

第九位

刹那：0
ズヴェズダ：0

刹那「結局票が来なかった……orz」
ズヴェズダ「私もよ」

第八位

咲：1
舞：1
うらら：1
こまち：1
つぼみ：1
ゆり：1
ダークプリキュア：1

咲「一票しか来なかったナリ……orz」

舞「咲……」

うすら「……」

こまち「次こそは……」

つぼみ「何でだれも票を入れてくれなかったんですか!？」

ゆり「日頃の行いが悪いからよ」

ダークプリキュア「月影ゆり、お前も一票組か」

第七位

満：2

薫：2

ラブ：2

祈里：2

せつな：2

えりか：2

いつき：2

ダークルージュ：2

ダークレモネード：2

ダークミント：2

ダークアクア：2

睦月：2

瞳：2

唯：2

満「一票ね……」

薫「また次にかんばればいいのよ」

ラブ「もうちよつと票ほしかつたな……」

祈里「ラブちゃん……」

せつな「精一杯がんばったのに……」

えりか「……」

いつき「なんだかんだいって、僕って人気あるんだ」

ダークルージュ「なんか、オリジナルに負けたってのがなんかくやし
しい……」

ダークレモネード「私は勝った」

ダークミント「私もよ」

ダークアクア「ダークルージュ、お前もくやしいか」

睦月「次はがんばろう」

瞳「……」

唯「パツと出ただけなのに二表、ありがとう!!」

第六位

ほのか：3

ひかり：3

りん：3

ほのか「応援、ありがとう」

ひかり「次こそは……」

りん「はりきりすぎて、倒れるんじゃないわよ」

第五位

かれん：4

かれん「なんか、ひとりっでの、さみしいわね……」

第四位

なぎさ：5

なぎさ「ベスト4か、なかなかの好成績ね」

第三位

美希：6

美希「やった！六票！さっそく自慢に行かないとー！」

第二位

ダークドリーム：7

ダークドリーム「みんな、応援ありがとう」

作者「さて、残すは一位のみ、栄光の一位は……コイツらだああ
！！」

第一位

のぞみ：8

くるみ：8

のぞみ「えっ……」

くるみ「私……たち……？」

作者「第一回人気投票、栄光の栄えある第一位は、のぞみとくるみの2トップだああー！」

のぞみ・くるみ「ええええええっ！？」

ダークドリーム「のぞみ、おめでとう」

かれん「くるみ、おめでとう」

のぞみ「えっ、うん……」

くるみ「あ、ありがとう……」

作者「ではこの辺で……」

作者「って、そういえば美希は？」

ラブ「なんか『自慢しに行く』って言い残して走ってどこかへ……」
せつな「たぶん、夢原信者さん仮面ライダーの人のところね」
作者「トラブル起こしてなきやいいけど……」

#20 花屋の仕事(前書き)

りんちゃんさんのメイン回

#20 花屋の仕事

雷鳴の鳴る豪雨の中、新たなる光の戦士がその力に目覚めたころ、夏木りんは入荷したはいいが、和代から『商品価値がない』と言われてややしょげている風にも見える青いバラを花束にするため、ひとり悪戦苦闘していた。

まず長さを切りそろえて、束になるよう切りそろえた青いバラを輪ゴムでまとめ、手近にあった新聞紙でそれらしく花束にする。

花束を作るというのも、なかなか難しいものだ。うっかりすると花束の形が崩れてしまっし、それを直そうと躍起になると、今度は花の形が崩れてしまう。

リークするための情報を書き込んだ手紙は、二重にした新聞紙の間に挟みこんである。あとは渡すだけ……なのだが、ここでりんは肝心の花束を渡す相手をまったく考えていなかったことに気づく。

「ずいぶんと暇そうにしてるじゃん、キュアルージュ」

振り返った先にいたのは、鏡の国で戦い、打ち破ったはずの自身のコピー体、ダークルージュが真っ赤な傘を差して立っていた。ちょうどいいところに来た、とりんは思い、ダークルージュに向かって口を開く。

「ダークルージュ、悪いけど、頼まれてほしいことがあるの」

ダークルージュが夏木りんと接触したころ、ダークレモネードは自身キのオリジナルの元へ向かっていた。なぜ、彼女のことを気になるのかは、自分でもわからない。だが、ふと気がつくと、彼女の元へと向かっていた。

特に何も考えずに歩いていると、とある家にたどり着いた。なぜかはわからないが、ここにキュアレモネードがいると確信する自分に気づく。なぜだろう……

ダークレモネードはそんな疑念を軽く頭を振って振り払うと、迷わ

ずインターホンを押す。インターホンを押してしばらくすると、短い茶髪の青年が現れた。

「うららに客か？まあ、いいや。上がってくれ」

目の前の、どこことなくシャドウ様に似た声を持つ少年に導かれ、家の中へと案内される。案内された先にいたのは、山盛りのカレーを一心不乱にかきこんでいるキュアレモネードの姿だった。

「アンタも食うか？カレー余りまくってるんだ」

「シロップ、おかわり!!」

「おい、うらら。お前何杯食う気だ？」

目の前の少年　シロップと呼ばれた　が、キュアレモネード……もとい『うらら』に作らされたと思われるカレーを勧めると、突然うららが少年におかわりを要求する。少年は思わず心配になったのだろう、ややあきれ気味のトーンでうららを気遣う。

だが、うららはその気づかいを怒号ではねのける。

「いいから、おかわり早く!!」

ダークレモネードは信じられなかった。いや、信じたくなかった。

今日の前にいるのが、『歌で人を喜ばせることの素晴らしさ』を説いたキュアレモネードと同一人物だ、などと。

そして、ダークレモネードは知らず知らずのうちにキュアレモネード、うららに対して詰問していた。

「うらら、貴^{あなた}女人を喜ばせたいんじゃない？ただカレーを食べているだけじゃそんなこと到底できないわよ？」

「関係ないでしょ、あなたには……」

冷ややかに『関係ない』と言われ、ダークレモネードはやや苛立ちを覚えつつも、それでも彼女に対して説得を続けた。

「関係ないって……貴女、私に人を喜ばせることを教えてくれたんじゃない？あんなの？あのとときに戻ってよ……」

「……もう無理よ……」

すると、その光景を見ていた少年が、やや苦笑した表情を浮かべてつぶやく。

「お前……うららを心配してくれているのか……」

「な、なに言ってるの！？別に心配してなんか！！でも……確かに気になるけど……」

少年のつぶやきに対して、ダークレモネードはややまごついて応答し、そして、軽く頭を振って思考を切り替え、『あること』を実行する。

「うらら、アンタについてきてもらいたいところがあるの」

「この花を、キュアドリームに？」

「ええ。アンタなら、連中に感づかれることなくコレをのぞみに渡せるだろうから」

『連中』と聞き、ややいぶかしむような表情を浮かべたダークルージユが、おそらくは一番聞きたいであろうことを口にする。

「私に仲介役を頼まずに、自分で渡しに行けばいいものを……」

「残念ながら、私がそれをやったら、私は間違いなく連中に殺される」

だが、単純に殺されるだけならまだいい。連中のことだ、生かさず、殺さず、私を徹底的に利用し尽くすのだろう。実験動物として。

たしか、いつきがプリキュアとして戦う際に必ず首筋に打ち込んでいた強化薬があったはず……おそらくはその改良版……いや、改悪版の被験者にでもされるのであるろう。

だが、それでも私は戦わねばならない。のぞみのためにも、私のためにも……

やや間をおいて、ダークルージユがひとつ息をつくと、一言だけ「わかった」とつぶやく。

「わかった、この花をキュアドリームに渡せばいいのね？」

「ええ、おねがい」

りんがそう言うと、ダークルージユは短くうなずき、耳元で軽く指を鳴らして鏡のゲートを開き、その中に飛び込んでいく。

その様子を見ていたりんは、こう思った。のぞみの現在の居場所、

知っているのだろうか。

次回予告

ダークレモネードに促され、ついていくつづら
そこで彼女の見たものは……

次回、『虚像と真実』

真実は、時として残忍に牙をむく

#20 花屋の仕事（後書き）

次回は、アルガティアのスピンオフの更新の予定

#21 虚像と真実(前書き)

ようやく更新

21 虚像と真実

鏡のゲートを潜り抜け、ダークドリームのもとへたどり着いたダークルージュは、『のぞみ』の居場所を知らないかとダークドリームに聞こうとする。

「ねえ、ダークドリーム。『のぞみ』って子の居場所知らない？」

「ダークルージュ、ついでだから連れてってあげる。私も、のぞみに用があるからね」

ダークドリームはそう言つて、耳元で軽く指を鳴らして鏡のゲートを開く。そして、ダークルージュは促されるがままに、ダークドリームのあとをついていった。

鏡のゲートをくぐつて、まず最初に目に飛び込んできたのは、退屈そうにベッドに寝転がるダークアクアと、ひとり膝を抱えて落ち込んでいるダークドリームに似た少女だった。

「えっ……のぞみ……？」

ダークドリームが信じられないというような表情で『のぞみ』を見る。そして、『のぞみ』が顔を上げた瞬間、ダークドリームが『のぞみ』に飛びついた。

「のぞみいいいっつっつー！！」

「ダークドリーム……それにダークルージュまで……いつから来ていた？」

ふと気がつくのと、いつの間にかベッドから起き上がっていたダークアクアがこちらを向いてつぶやく。

「ついさっき。にしても、何でダークアクアがここに？」

「って、何人の家に勝手にあがりこんでんのよ！！不法侵入罪よ！！」

「落ち着きなさい、くるみ。ダークアクアの仲間よ」

ダークアクアと他愛もない会話の応酬が続けていると、突然紫のウエーブがかった髪の少女が食ってかかるが、いつの間にかいたキユ

アアクアによって制止させられた。

「っ……こまち……」

「かれん！？こまちが、こまちがいったいどうしたっていうの！？くるみと呼ばれた少女がキュアアクアに詰め寄ると、キュアアクアはややうつむいて小さくつぶやいた。

「こまちが……こまちが……裏切ったの……」

ダークドリームに抱きすくめられていたのぞみには、かれんが何を言っているのかが理解できなかった。今、彼女はなんと言った？自分の耳に狂いが無ければ、彼女は確かに『こまちが裏切った』と言ったはずだ。だがなぜ……

そんなことをのぞみが考えていると、ダークドリームについてきたと思われるダークルージュが、ずっと両手に抱えていた花束を差し出してきた。

「キュアルージュが、アンタにとって」

「りんちゃん……なんで直接渡しに来ないの……」

「キュアルージュ、どうも渡せない理由があるみたいよ」

「渡せない……理由？」

のぞみのつぶやきに、ダークルージュが短くうなずく。なぜ、彼女は自分で渡しに来ないのだろう……

考えても答えは出ず、のぞみはひとり頭を悩ませていた。

「ねえ、ダークレモネード、どこまでいくの？」

しかし、ダークレモネードはその問いに答えず、何故か先程から「AM project」の楽曲を口ずさみながら楽しげに歩いている。いったい何がそんなに楽しいのだろう……

そんなことを考えていると、急にダークレモネードが立ち止まり、耳元で軽く指を鳴らして鏡のゲートを開く。

「ついてきて」

うらはは、ダークレモネードに促されるがままに鏡のゲートをくぐ

る。そこでうららが見たものは、自身の想像を遙かに越えるものだった。

「何……コレ……」

やはり彼女は私の予想通りの反応を示してくれた。以前のハートキヤッチ組との戦闘記録映像を映したモニターに釘付けになっているのである。先程から一言も口を開こうとしない。

「こんな……こんなことが……」

「そう、コレが『現実』、コレが『真実』」

その言葉を聞いて、うららがその場に崩れ落ちる。自分の信じていたモノが『虚像』と知らされ、よほどショックなのだろう。

「これで理解してくれたかしら？」

ダークレモネードのその問いに、うららが力なくうなずく。これからどう動くかは彼女次第だ、ゆっくりと見物させてもらおう。

ダークレモネードはしばらくその光景を眺めたあと、うららの腕を引っ掴んでもと来た鏡のゲートをくぐる。そこでダークレモネードはふと思う、私って、けっこう意地悪い性格だな、と。

次回予告

情熱の戦士との協定を破り、奇襲をかける太陽の戦士

その卑劣なる行為を目の当たりにし、安らぎの大地が反旗を翻す

次回、『墮ちる太陽と枯れゆく花』

すべてを破壊する者を、破壊せよ

#21 虚像と真実（後書き）

こまちの嫌いなモノ

自ら引き金を引こうとしない者

『どんな手を使おうが、勝てばいい』という思想

#22 堕ちる太陽と枯れゆく花（前書き）

文才が欲しい……

#22 墮ちる太陽と枯れゆく花

くるみに散々説得され、ようやく折れたのぞみは、しびしびといった感じで水無月邸をあとに、重い足取りで家路についていた。

「くるみのバカ……」

もう少しくらい、居させてくれてもいいじゃない……

やんだと思ったら再び降りだした雨の中、のぞみはココと共に人気がない道をのんびり歩いていた。先程から傘に当たる雨音がやけに鬱陶しい、このまま傘を投げ捨てて、雨に打たれてしまいたい。

くるみに対する不評不満を胸の内に抱えて歩いていると、突然自分の脇で何かが爆発した。何事かと辺りを見回すも、それらしいものは見当たらず、首をかしげていると、再び自分の脇で何かが爆発した。

しかし、今度はそれが何かを視認している。手榴弾だ。しかしなぜ手榴弾が……と空を仰ぐと、キュアブロッサムとキュアサンシャインが、悠然とこちらを見下ろしていた。

ふと気がつく、ココがいつの間にかいなくなっている。おそらく、いや間違はなくトンスラこいたな……とのぞみは思う。帰ったら絶対に殴ってやる……

「あなたたち、卑怯よ!!こんな戦いかたしかできないなんて!!」

「卑怯でもなんでもありません、勝てばいいんです勝てば!!」

「そういう寝言は墓の中で言ってくれないかな、弱虫で泣き虫の夢原のぞみ」

彼女達に何を言おうが、彼女達はその言葉に耳を貸そうとせず、あくまで自分こそが正しいと主張し続ける。なら、ふたりの頬を引く叩いて目を覚まさせるだけだ。

そうと決まればあとは簡単、戦うだけだ。のぞみはひとつ息をつくと、傘を投げ捨て、かわりにキュアモを握って変身コードを唱える。

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

嫌な予感がする。とてつもなく嫌な予感が……

少しずつ兩足を強めていく天候の中、九条ひかりは妙な胸騒ぎを抱えて傘もささずにアスファルトを蹴つてその場所へと向かっていく。なぜこんなにも急いでいるのかは、自分でもわからない。だが、それでも行かねばならないと感じていた。

こんなところで、希望を失わせるわけにはいかない。かなり大げさだが、彼女を失えば、世界の希望の半分が消滅してしまうだろう。それだけは絶対に回避せねばならない、それだけは……
そして、ひかりは走りながら変身コードを唱える。

「ルミナス・シャイニングストリーム!!」

そう、もつとそつちへ行きなさい、そう、もつと……

盟友たるサンシャインの巧みな誘導によって、あるポイントへと追いつ込まれていくキュアドリームを見ながら、ブロッサムはひとりほくそ笑んでいた。

そのポイントには、キュアドリームの抹殺のためだけに数週間前から念入りに準備してきたアレがある。この計画実行のために、いつきの奪取したアカルンをフル活用して、多種多様な武装を手に入れたのだ。いつきには感謝せねばならない。

「もつそろそろ例のポイントに到着するよ」

サンシャインの報告を聞き、ブロッサムは手元のリモコンのボタンを押し込んだ。ボタンを押してから数秒後、火薬の炸裂する音がブロッサムの鼓膜を叩いた。

確認するまでもない、設置した機関砲の一門が火を吹いたのだ。M53A1徹甲焼夷弾の雨から逃れることはいくらプリキュアと云えど不可能。

キュアドリームが逃げ回っているうちに、別の機関砲がキュアドリームの反応をキャッチしたのか、砲身をキュアドリームに向けて20?の砲弾の雨を降らせる。

しばらくして、キュアドリームが何かを思いついたのか、突然奇妙な行動を取り出した。なんと、お互いの機関砲を射線軸に捉えるようにして移動したのだ。発想としては正しい、だが、それは無駄な行為でしかない。

お互いを撃ち合い、爆散するはずの機関砲は、何事もなかったかのようにしてキュアドリームを狙い続けている。機関砲に設置した特殊なバリアによって、外側からの攻撃をシャットアウトする効果があるのだ。

そして、キュアドリームがある場所へと着地した瞬間、突然地面が爆発してキュアドリームを吹っ飛ばす。足の一本でも奪えるかと思いきや、現実はそう甘くなく、キュアドリームのブーツに焼け焦げた跡を残すのみにとどまった。

その結果に、ブロッサムは不満げに顔をしかめる。対戦車地雷を用いてもこの程度か……

だが、効果はあったのか、キュアドリームが若干ふらついている。ならば、付け入る隙を与えず、キュアドリームを排除する。

ブロッサムが手元のリモコンのボタンを再び押し込むと、全長2mの箱形の物体がキュアドリームに襲いかかる。対人用無人機動兵器、オートマトン。かつて独立治安維持部隊アロウズが使用していた兵器だ。

機関砲の雨と、オートマトンの放つ銃弾によって、少しずつ追い詰められるキュアドリームを見て、ブロッサムは歓喜に打ち震える。

ああ……なんと気持ちいいことか……

キュアドリームが苦痛に歪み、恐怖に満たされるそんな顔を眺める、これが何ともいいようもない心地よさを生み出すとは……

もっと……もっと見たい……あの女が苦痛に歪み、恐怖に満たされる表情を……そして聞かせて……あなたの絶望に満ちた悲鳴を……

その光景を見て、ブロッサムは自分でも気づかないうちに低く笑っていた。ああ……もっと……もっと私を楽しませて……そして、早く……早く聞かせて……あなたの絶望に満ちた悲鳴を……

キュアドリムの苦痛に歪み恐怖に満たされた表情をもつと見たい
があまりに、そして、絶望に満ちた悲鳴を早く聞きたいがあまりに、
ブロッサムは次なる手を打つ。

無数の機関砲から放たれる砲弾の雨と、箱型の機動兵器に翻弄され
ていたドリムは、若干の焦りを覚えていた。このままでは……
砲弾の雨をかわし続けていたドリムは、機関砲の掃射音と箱型の
機動兵器の駆動音に混じって、まったく別の音が聞こえてくること
に気づく。

その音が近づくにつれて、ドリムの鼓膜を乱暴に叩く爆音が少し
ずつ大きくなっていくことにドリムは気づく。それはローター音、
回転翼機ヘリコプターの発する空気を叩き切る独特の音。

砲弾の雨をかわしながら接近するヘリのコクピットの中を伺い見た
が、どういいうわけか無人だった。いったいなぜ……

しかし、考えている暇はないし、それに、力を出し惜しみしてい
れる状況でもない。

ドリムはひとつ息をつくとき、キュアモを構えてキータッチの音を
奏でる。

「プリキュア・トランス・メタモルフォーゼ！」

キュアドリムの戦いを遠くから眺めていたキュアミントは、激し
い怒りに打ち震えていた。

無人兵器を使用してキュアドリムを排除しようなど、とても正気
の沙汰とは思えない。ブロッサムもサンシャインも、頭が狂ったに
違いない。

プロテクトフルーレを握りながら、ミントはやや言い訳がましくひ
とりつぶやく。これは、無人兵器を破壊するための力、ドリムを
守るための力じゃない……

ミントは頭を大きく振って雑念を振り払うと、プロテクトフルーレ
を構え、決然と無人兵器へと突っ込んでいった。

次回予告

追い詰められるキュアドリーム、猛攻する無人兵器
その戦いに、ふたりのプリキュアが介入する
次回、『破壊と再生の天上人』
破壊による再生がはじまる

#22 堕ちる太陽と枯れゆく花（後書き）

ひかりは次回活躍の予定

#23 破壊と再生の天上人(前書き)

自分としては初の3,000字越え

#23 破壊と再生の天上人

豪雨降りしきる雷鳴の中、ふたりのプリキュアが両足にロングブーツのようなブースターを装備してある場所へと飛翔していた。ふたりの間に会話はない、いや、会話をする余裕がないのだ。時速720?で飛翔しているというのも理由のひとつだが、お互いに今にも爆発しそうな怒りを胸の内に抱えているからであろう。

サンシャインとプロツサムが奇襲をかけた、これだけなら、ふたりとも見逃していたであろう。しかし、プロツサムとサンシャインは無人兵器を使用してキュアドリームを排除しようとしているのだ。これを聞いてキレイない人間はいないだろう。

両足の追加ブースターから爆発的なまでのGN粒子を噴射しながら、ふたりは目標地点へと飛翔していく。キュアドリームを救うために

……

「この程度の砲撃!!」

プリキュア・トランス・メタモルフォーゼによって、シャイニングドリームへと変身したキュアドリームは、その圧倒的な能力をもって次々に無人兵器を爆煙へと変えていった。

無人兵器を破壊することに集中していたシャイニングドリームは、上空のへりから放たれた数発のミサイルに気づくことができず、ミサイルの直撃を食らって大きく吹っ飛ばされる。

「っ!!」

シャイニングドリームは上空に滞空しているへりの一機をキツと睨みつけると、スターライトフルーレを構え、猛然と無人へりへと突っ込んでいく。やはりというかなんというか、細身の剣一振りでは装甲に傷ひとつつけることすらできない。しかし、今のシャイニングドリームにはへりを破壊するだけの兵器を持ち合わせておらず、必然的に苦戦を強いられることとなった。

だが、それでもやらねばならない。あのふたりの目を覚まさせるためにも……

シャイニングドリームと無人ヘリの戦闘を若干遠くから眺めていたシャイニールミナスは、新たな力の構築に手間取っていた。

あと一分……あと一分あれば……

そして、一分が過ぎた頃には、ルミナスの両腰と腰背部に各四機ずつ光る牙が装備されていた。そして、ルミナスはその牙を全機射出する。

「行きなさい、ファンゲー！」

放たれたすべての光る牙は、シャイニングドリームを狙う無人ヘリへと突っ込んでいき、メインローターへと食らいつく。食らいついた牙が一斉に爆発を起こし、滞空していたヘリを単なる鉄屑へと変えていく。

撃墜したヘリが互いにぶつかり合い、爆発の光芒をあげるのを見て、ルミナスはひとりほくそ笑む。それでいい、それで……

血の通わない兵器での戦闘は、ただのゲームでしかない。それならば、いつそゲームでこの戦いを終わらせてほしい。

新たに光る牙を形成したルミナスは、こちらに向かつて急迫する無人ヘリへと光る牙を差し向ける。放たれた牙は無人ヘリの装甲を切り刻み、雷鳴の空に炎の花を咲かせる。

地上の無人機部隊はシャイニングドリームが殲滅したのか、単に攻撃してこないだけなのかは不明だが、何のアクシオンもない以上、この戦闘の元凶であるブロッサムを叩くチャンスではある。そのチャンスのみすみす逃す手はない。

ルミナスは無人ヘリ破壊のために滞空させていた光る牙　ハーテ
イエルファンゲ　を呼び戻し、キュアブロッサムに向けて突撃していった。

無数の木が鬱蒼と生い茂る暗い森林の中、無人機関砲の一門が爆散

する。キュアミントがプロテクトフルーレを振るって叩き斬ったのだ。

シャイニングドリームに砲火を放つ機関砲は、こちらがいくら近づいてもその存在を無視するようにしてシャイニングドリームを狙い続ける。

ミントはそれを好機と捉え、次々に機関砲を斬り捨て、爆煙へと変える。サンシャインとはあくまで協力関係を築いているため、見つかったら最後、『裏切り者』として処刑されかねない。

そう、ミントの敵はひとつだけではないのだ。
斬り捨てた機関砲が五門を数え、六門目に斬りかかるうとしたとき、上空から四つ　しかし、形状から見て二足と数えたほうがいいのブースターが降ってくる。

ミントがあわてて上空を見上げると、そこには右手に折りたたみ式の実体剣と両腰に長短二振りの実体剣、両肩と腰背部に白い突起物を装備した青と白のプリキュアと、背中にアサルトライフルとショットガン、両腰に大型の拳銃を装備し腰背部にサブマシンガンをマウントして、両手にスナイパーライフルを握った青と紫のプリキュアがいた。

キュアブロッサムとキュアサンシャインを視認したアルガティアは、戦闘空域に到着するなり両手に握っていたヤシママーク？を思いっ切り投げ捨て、加速した勢いのまま前方宙返りの要領でブロッサムを思いっ切り蹴っ飛ばす。

「キュアブロッサム、安全圏からしか戦うことのできないこの卑怯者が……！」

「卑怯？何を言っているんですか、あなたは。あなただって同じでしょう、銃を使い、安全な場所からしか戦うことができないのですから……！」

そのブロッサムの一言に、アルガティアの怒りが爆発する。

「お前と一緒に…………」

アルガティアは低くつぶやくと、大きく息を吸い込み、あらん限りの声量で叫ぶ。

「するなああああああつっつっ!!」

そして、アルガティアはその怒りのままに、エクスから与えられたトランスモードを起動させ、腰背部のサブマシンガンを握ってブロッサムに銃弾の雨を降らす。少しして弾が切れると、アルガティアはサブマシンガンを投げ捨て、アサルトライフルを構えて再び銃弾の雨を降らす。

そんな応酬を続け、手持ちの銃器が拳銃とショットガンのふたつだけになると、アルガティアは背中にマウントしていたショットガンを握ってブロッサムに急迫する。

「ひ、卑怯です……銃火器そんなものを使って戦うなんて……」

「無人機を使って戦うことに何のためらいもないお前に、そんな卑怯なことの二文字を言う資格はない!!」

アルガティアはそう言い捨てると同時に、ショットガンのトリガーを引いて無数の銃弾を浴びせかける。そうして何度も何度もトリガーを引き絞り、最後の一発になったところで、ブロッサムの胸みぞおちに銃口を押し当てる。

ブロッサムが逃げようとするがもう遅い、アルガティアがにやりと口元を歪ませ、トリガーを引く。ゼロ距離から放たれたショットガンの弾は、確実にブロッサムの胸を打ち抜きブロッサムを地に叩き落とす。

確か、今の一発で全弾打ち尽くしたんだ……と気づいたアルガティアは、右手に握っていたショットガンを放り投げ、代わりに両腰の拳銃を両手に握ってサンシャインのほうへと飛翔していった。

雨の降る中、のんきに観光などをしていた一人の少女、あまきまや雨牙真夜は、上空が騒がしいのに気づき、見上げてみると、剣を持ったプリキュアと、銃を持ったプリキュアが金色のプリキュアを追い詰めていた。考えずともわかる、戦っているのだ。

へえ、楽しそうじゃん……そう思った真夜は、漆塗りの口紅を上空へと掲げ、変身コードを唱える。

「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション」

ルミナスとともにサンシャインを追い詰めていたシャイニングドリームは、ふと身体に違和感を感じた。だが、今はその違和感を気にしている余裕はないと、その違和感を無視してサンシャインに斬りかかる。

ルミナスが先程から光る牙を飛ばして援護してくれてるのはいいが、当の本人が遠隔操作に集中するためか、常に棒立ちの状態になる。これではいい的ではない。

シャイニングドリームはその光る牙の援護を受け、サンシャインに大きく一太刀浴びせかけようとするが、しかしそれは突然襲いきた発作によって強制中断させられる。

驚いている間にも、シャイニングドリームを襲う発作は止まらず、ついには失速して地上に墜落してしまう。落ちた衝撃のせい、トランスフォーゼが解除され、キュアドリームに戻る。そして、強引にシャイニングドリームに変身したツケが回ってきたのか、ドリームは 総量にしてコップ二杯ほどの 血を吐く。ドリームは全身を襲う激痛をことさら無視して、再びトランスフォーゼする。後のことなど考えていない、今はサンシャインを叩き斬る。

このときに身体の異変に気がつけていれば、全身を襲う苦痛は少量ですんだらう。しかし、シャイニングドリームはそれを無視して突き進む。その先に何かがあるかも知らず……

次回予告

肉体が限界を超え、力を失うシャイニングドリーム

その戦闘に、新たなプリキュアが介入する

次回、『リベリオン』

漆黒の戦士、その瞳は何を見るのか

#23 破壊と再生の天上人（後書き）

リベリオン、登場

#24 リペリオン(前書き)

笑う描写って難しい……

#24 リベリオン

暗い空の下に、剣と盾のぶつかり合う音が響く。

シャイニングドリームのスターライトフルーレと、キュアサンシャインのシャイニータンバリンがぶつかりあい、キーンという金属のこすれあうような耳障りな音が響く。

サンシャインはふとブロッサムのが気になり、ブロッサムはどついたのかと視線を巡らせる。するとブロッサムは銃を持った青と紫のプリキュアによって倒されたことを知り、サンシャインは短く舌打ちする。

あの役立たずが……

そんなことを考えていると、シャイニングドリームが右手に握ったスターライトフルーレを振りかぶってシャイニータンバリンを叩き斬る。タンバリンを失ったことによって自身が有利になったとも思っているのだろうが、それは大間違いだ。

敵はタンバリンがひとつしかないと勘違いしている。それこそがサンシャインにとって大きなチャンスでもある。

シャイニングドリームがスターライトフルーレを振りかぶってサンシャインを叩き斬ろうとするのを見て、サンシャイン・イージスを前面に展開して斬撃を防ごうとするが、盾は展開されず、斬撃をその身に食らう。

この瞬間、サンシャインはシャイニングドリームに主導権を握られた。シャイニングドリームがスターライトフルーレを縦横無尽に振るい、サンシャインを切り刻む。

「もらったあああっ!!」

まずい、殺される!! そう思ったサンシャインは反射的に目を閉じる。しかし、いくら待ってもフルーレの剣先が振り下ろされることなく、サンシャインが恐る恐る目を開けると、そこには苦痛に目を見開き、苦悶のうめき声をあげるスターライトフルーレを振りか

ぶつたままのシャイニングドリームがいた。

この瞬間、形勢逆転したサンシャインは、シャイニングドリームに向けてサンシャイン・フラッシュを連射する。サンシャイン・フラッシュがシャイニングドリーの胸に、腕に、胴に、足に、そして顔に直撃するのを見て、サンシャインが高らかに笑う。

どう？今まで蹂躪していた相手に蹂躪される気分は。どう？見下していた相手に見下される気分は。

蹂躪され続けていくにつれて、キュアドリームに、さらには変身を強制解除されて夢原のぞみに戻ってもなお、サンシャインは蹂躪することをやめなかった。

そして、のぞみが暗い森林の中に落ちていくのを見て、サンシャインは優越感に満たされ、あふれ出す感情のままに笑った。

「ふふふふ……あつはつはつは！とある世界で『究極の光』と呼ばれたシャイニングドリームも、プリキュアを超越した私にとつては雑魚も同然！！」

「それはどうかしら？上には上がいるものよ」
サンシャインの背後から声がかかり、サンシャインがあわてて振り向くと、そこにはやたら大きな鎌を肩に担いだ黒いプリキュアがいた。

ウィッシュ・ハント

希望を刈り取る大鎌を肩に担いだリベリオンは、目の前の金色のプリキュアを眺めながら、ふとこう思った。

こいつ、本当に強いのか……と。

だが、本当に強いかどうかは戦ってみなければわからない。そう思ったリベリオンは、肩に担いだ大鎌を両手で構え、金色のプリキュアに斬りかかる。

攻撃を始めた最初こそは、かわしながら反撃するなどいい反応を見せたが、攻撃を重ねていくにつれ、次第に反撃の頻度が減っていくのを見て、リベリオンは幻滅した。

何だ……たいして強くないじゃん……

リベリオンが金色のプリキュアの弱さにあきれていると、別方向から金色のプリキュアを狙う三人のプリキュアが現れる。しかし、そのうちのふたり、銃を持ったプリキュアと見た目からして強そうにないプリキュアのふたりは、森の中に落ちた純白のプリキュアを助けるためか、眼下の森の中へと突っ込んでいった。

そして、純白のプリキュアを助け出すことに成功したのか、そのまま戦闘空域からふたりが立ち去ろうとする。ふと気づくと、ピンクのプリキュアの両手には、純白のプリキュアを両手に抱いたプリキュアが持っていた拳銃が握られている。

そのピンクのプリキュアが剣を持ったプリキュアと何か言い争っていたようだが、ついに折れたのか、ピンクのプリキュアが青と紫のプリキュアとともに去っていく。両腰と腰背部に装備した光る牙を全機残して。

後はあの青と白のプリキュアに任せるか、そう思ったりリベリオンは、そのままどこかへと立ち去っていった。

次回予告

力を失ったのぞみを救うため、水無月邸へと急ぐアルガティア
その途中、謎の闇の戦士とすれ違う

次回、『闇の魔の手』

彼女はいつたい、誰なのか……

#24 リベリオン(後書き)

次回は介入シリーズ更新の予定

#25 闇の魔の手(前書き)

第三クールからの敵幹部、先行登場

#25 闇の魔の手

もつと……もつと早く……

両腕にのぞみを抱えたアルガティアは、水無月邸へと急ぎながら、自身も説明しようのない焦りが全身を満たしていた。腕の中ののぞみは、雨に打たれているせいか、少しずつ呼吸が弱まってきている。早くしないと、早くしないと彼女が本当に死んでしまう……だが、目指す水無月邸は影さえも見えないでいる。その現実が、アルガティアをさらに焦らせた。

ふとアルガティアはちらりと視線を左側に投げ、並んで飛翔するルミナスを見やる。二挺拳銃は彼女に託した。いざとなれば彼女に防衛ラインを頼み、のぞみを助けることを優先させよう。

彼女がここへ来た理由は私と同じなのだ、自分が一言「防衛ラインを張って」と言えば、きっと彼女は快く引き受けてくれるだろう。だが、彼女の能力は未知数のため、些か不安ではあるが……

だが、のぞみを救えなければここへ来た意味がないし、なにより、自分の存在理由がなくなってしまう。

アルガティアは胸の内に苛立ちを抱えつつ、水無月邸へと飛翔していく。のぞみを救うために……

両手に大型の拳銃を握り締めたルミナスは、自身のふがいなさに激しい怒りを感じていた。思わず握った拳銃で頬を思いつ切り殴りたくなる。

しかし、殴ったからといって、のぞみが目を覚ますわけではないし、雨がやむわけでもない。ただいたずらに体力を消耗させるだけだ。それに、そんな無駄なことをするくらいなら、先ほどから追撃してくる二機の無人ヘリを撃墜するほうが先決だろう。だが、ハーティエルファングは全機あの青と白のプリキュアの援護のため、使い切ってしまったっている。

新たに形成しようにも、今の自分ではいまあるファンングを消さなければ新たなファンングを形成できない。まだ十二機以上のファンングを操れるほど、ルミナスは有能ではない。

なんとかこれ以上の接近を許さぬよう、両手の拳銃で弾幕を張ってはいるものの、所詮は拳銃。火花を散らす程度の効果しか挙げられない。

無人ヘリの機首についた機関砲の砲口がルミナスを捕らえる。しかし次の瞬間、横合いから放たれた一発の粒子ビームが二機の無人ヘリの腹を貫いた。

「撃墜完了」

腰元に携行式の大型粒子ビーム砲を抱えた真つ赤なフルフェイスメツトをかぶった少女が、誰に言うでもなくつぶやく。ヘルメットのバイザーのせいで顔は見えないが、その視線はふたりのプリキュアに注がれていることだろう。

さて、あのふたりに挨拶でもしにいけますか。サバーニヤは二機のヘリを撃墜したあとは好きにしていっていいと言っていたし……

そう思い、ヘルメットのバイザーを跳ね上げた少女、ダークグライファアは二人のプリキュアに向かって飛翔していった。

「ねえ、アンタたち。あたしが護衛してあげようか？」

「あなた、闇の気配を感じるけどいったい何者！？」

見ると、青と紫のプリキュアが警戒心をあらわにしてこちらを睨みつける。突然現れたものを警戒するのは当然の理屈だろう。

「惣流明日香、アンタたちと敵対する気はないわ。それに、その子をこれ以上冷たい雨に打たせたくないしね」

その言葉を聞いて警戒のレベルを下げた青と紫のプリキュアは、ひとこと「おねがい」とつぶやく。それを聞いたグライファアは、腰元のビーム砲からオレンジ色の膜を形成し、頭上に展開する。

「ホラ、これで傘はできた。あとはアンタたちについていくだけよ」
「ありがとう」

グライファーはGN粒子の傘を差しながら、ふたりのプリキュアについていく。そしてしばらくついていったところで、大きな屋敷にたどり着いた。

「ここでいいわ」

「そう……気をつけてね」

大きな屋敷に降り立つふたりを見送ったあと、グライファーは量子ゲートを開いて邸宅へと帰る。

「おかえり、グライファー」

左目に眼帯をつけていること以外は、自分と瓜二つの少女、キュアサバーニヤがねぎらいの言葉を発する。

「ただいま、サバーニヤ。それと、面白いものを見つけたわよ」

「面白いもの？」

サバーニヤの返答に、グライファーは短くうなずく。

「サバーニヤの気にしていた夢原のぞみて子、予想以上の素材ね。誰かさんが喜びそうよ」

「まあ、誰とは言わないけど……グライファー、風邪ひくからさつさとシャワー浴びてきなさい」

サバーニヤのつぶやきに、グライファーは「わかった」とだけつぶやき、ひとり浴室へと向かう。サバーニヤの言う『誰かさん』の喜ぶ顔を思い浮かべつつ。

「いつもどおり、お薬処方しておきますね」

青色の髪の少女に錠剤のピルケースを渡した薄紫色の髪の女性、アニュー・リターナーは、柔らかな笑みを浮かべたまま少女を見送る。

確か来海えりかとか言ったか、あの歳で頭痛持ちとは、さぞかし苦労しているのだろう。

「リヴァイヴ、あとよろしく」

「了解」

アニューは受付をリヴァイヴに任せ、この診療所の院長のリボンス・アルマークのもとへと向かう。

「リボنز、あの子にいつもどおりいつもの薬渡したわよ」

「ご苦労だったね、アニユー。しばらく休んでいいよ」

リボنزのその言葉に「ありがとう」と答え、リビングへと向かう。リビングで紅茶を入れていると、自分と同じ容姿をした少女、天上刹那が帰ってくる。

「刹那、おかえり」

「ただいま、アニユー」

見ると、雨にぬれたのか、全身濡れ鼠ねずみになっている。アニユーはひとつ息をつくくと、刹那に「風邪ひくからシャワー浴びてきなさい」と促す。

それを聞いた刹那は、「わかった」とだけつぶやき、浴室へと向かう。それを見送ったアニユーは、入れたばかりの紅茶をゆっくりと飲み始めた。

次回予告

睦月と刹那に導かれ、とある世界に向かうなぎさたち

降り立った世界は、自分たちの世界よりひどい有様だった

次回、『トリズナー』

過ちに歯向かう反逆の力、彼女は何を望むのか

#25 闇の魔の手（後書き）

次回、とある世界へ

用語解説（前書き）

物語が架橋を迎えるにあたり、おさらい兼予習の用語解説。

用語解説

プリキュア

世界が危機に瀕した時にその姿を現すとされる伝説の戦士の総称。普段はごく普通の少女だが、いざ戦闘となると恐ろしいまでの能力を発揮する。

プリキュアの世界

本小説の舞台である、プリキュアたちの活躍する世界。ドックゾーン、ダークフォール、ナイトメア、エターナル、管理国家ラビリンズ、砂漠の使徒といった闇の勢力はすべてプリキュアたちによって駆逐され、現在では残党を残してすべての勢力が壊滅している。

なお、本作の舞台は機動戦士ガンダムSEEDDestinyの世界と機動戦士ガンダム00の世界がベースとなっているため、ラグランジュ2を除くすべてのラグランジュ・ポイントに数百基のスペースコロニーが浮かび、軌道エレベーターと太陽光発電システムによって地球の経済は安定し、高度に発達した医療技術によって人体の失った箇所を再生させることも可能となっている。

スペースコロニー

この世界に存在する、宇宙空間に存在する人工の都市。カプセル型や砂時計型の形状をしており、それぞれが行政や農業、観光といった役割を割り振られて稼働している。

軌道エレベーター

この世界に存在する、地上と衛星軌道上を結ぶ巨大な塔。赤道直下に合計三基建造され、各軌道エレベーター最上部に存在する太陽光発電システムとともに、すべて地球連邦政府の管轄下にあ

る。

太陽光発電システム

軌道エレベーター最上部に存在する大型の発電システム。全世界で危険と判断され封印された原子力や、枯渇した化石燃料に代わる新しいエネルギー源として活躍している。

ガイアセイバーズ

とある世界に存在するとされる防衛チームの名称。ガンダム00支部もまた、この防衛チームと同盟を結んでいたのだが、プリキュアたちの同士討ちによって壊滅した。なお、プリキュアワールド支部のプリキュアたちは、別世界のプリキュアの世界に転向しているキュアコズミック以外、00支部の存在そのものを知らないため、『すべての世界は、プリキュアたちによって守られている』と思っ込んでいる。ここからは、作中に出る四つの世界の解説をする。

ガイアセイバーズと同盟関係にある（もしくはあった）世界

ガンダム00支部

作中で登場する、キュアアルガティアこと水澤睦月のいた機動戦士ガンダム00の世界に存在した防衛チームの名称。

その防衛力は最強を誇り、プリキュアワールド支部をしのぐ程の力とチームワークを有する。

余談だが、たった六人で世界の敵と戦ってきたため、全員がムーンライト並の実力を持ち、そして、マックスハート組以上のチームワークを有している。

ちなみに、コズミックは00支部が壊滅したことをプリキュアワールド支部のプリキュアたちに知らせていない。

プリキュアワールド支部

作中で登場する、夢原信者氏の管理するプリキュアワールド支部最強の防衛チームの名称。

現在25人のプリキュアとふたりの仮面ライダーと呼ばれる変身ヒーローによって守られている。

現在はデスリード率いるダークエンジェルスと戦闘中。

余談だが、何故か異世界の客がよく来る世界でもある。

ちなみに、キュアコスミックもプリキュアワールドの関係者だが、現在は別世界に転向している。

ガイアセイバースと同盟関係にない世界

プリキュアvsプリキュアの世界

本小説のメインの世界。

現在敵味方総計して30人以上のプリキュアが熾烈な争いを繰り広げている。

30人『以上』と表記した理由は、作者自身がプリキュアの数把握しきれないため。

反逆者の世界

作中で登場する、キュアトリズナーことアスナのいる機動戦士ガンダムSEEDの世界。

地球連合政権を掌握したブルーコスモスに対して、キュアトリズナーがたつたひとりで戦いを挑んでいる。

トリズナー以外にもプリキュアの力を持つ戦士はいるのだが、家族を殺したブルーコスモスにおびえているため、トリズナー曰く『戦う気力をなくした臆病者』。

機動六課

『プリキュアvsプリキュア』及び『プリキュアvsプリキュア外伝』アルガティア』作中で登場する時空管理局お抱えの特務部隊。時空管理局お抱えであるがゆえに、管理局の意向に従っている。

そのため、睦月曰く『管理局に尻尾を振る忠実な狗』として、当人は激しく嫌悪しているが、部隊としての技量の高さは認めている。なお、機動戦士ガンダム00の世界及びプリキュアvsプリキュアの世界の機動六課は、八神はやてを隊長としているものの、実質傀儡に近く、その実権はスターズ分隊長の高町なのはが全権を掌握している。

時空管理局

『プリキュアvsプリキュア』及び『プリキュアvsプリキュア外伝』『アルガティア』』作中で登場する、ミッドチルダが中心となつて設立した数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関。通称「管理局」。

化学兵器をはじめとする質量兵器の撤廃を唱える一方で、自身らが強力な軍備増強路線を推し進めている上、さらに自身らに不利益を被ることに關しては徹底的に隠し通すため、睦月曰く『自己保身と武力独占のためにしか動かない腐敗した連中』として忌み嫌っている。

ちなみに、本作『プリキュアvsプリキュア』に登場する時空管理局は、最高評議會を中心としているように見えるがそれは表向きで、実際は機動六課スターズ分隊長の高町なのはが管理局の全権を掌握している。

イノベーター

機動戦士ガンダム00における、簡単に言うところ進化した人類のこと。脳量子波と呼ばれる特殊な脳波を使用することができ、脳量子波を発しているときはその当人の虹彩が金色に輝くという性質を持つ。

イノベーター同士、もしくは相手がイノベイドの場合、脳量子波を使用するの意思疎通が可能。

なお、イノベーターには人為的に覚醒したイノベーターと、自然覚醒したイノベーターの二種類に分かれており、自然覚醒したイノベ

イターのほうがイノベイターとしてのランクは上になる。

本作では、美墨なぎさ、夢原のぞみ、水澤睦月、来海えりかに覚醒の傾向がある。ちなみに、なぎさ、のぞみ、睦月は自然覚醒のイノベイターだが、えりかはナノマシンを介しての人為的なイノベイター。

イノベイド

機動戦士ガンダム00における、人為的に生み出されたイノベイター。

イノベイター同様、脳量子波と呼ばれる特殊な脳波を使用することができ、脳量子波を通じての意思疎通が可能。

なお、素体によってはそのままイノベイターに覚醒する可能性もある。

ちなみに、本作に登場する天上刹那はアニュー・リターナーと同タイプのイノベイド。

脳量子波

イノベイター、およびイノベイドのみが使用できると言われる特殊な脳波。

この脳量子波を発しているときは、なぜか両目の虹彩が金色に輝くという性質を持つ。

用語解説（後書き）

次回、『反逆者の世界』へ

#26 トリズナー(前書き)

今回はかなり短め

#26 トリスナー

「のぞみ……」

ダークドリームの目の前には、意識を失い眠っているのぞみが、青と紫のプリキュアに抱き抱えられている。おそらくは目の前のプリキュアが助けてくれたのだろう。

「ありがとう、のぞみのこと助けてくれて……」

「ほら、早く拭いてあげないと風邪ひくわよ」

目の前のプリキュアにせかさされ、ダークドリームはやや慌ててタオルを取りに行った。そして、タオルを取ってきたのぞみの身体を拭こうとすると、のぞみが低い唸り声を上げて目を覚ます。

「ここは……」

「のぞみ、ハイ、タオル」

のぞみはダークドリームが手渡したタオルを受け取り、身体を拭く。そして、勝手知ったるといった感じでどこかへ向かっていった。

「のぞみ!？」

「安心しなさい、シャワーを浴びにいっただけよ」

かれんに諭され、安心したダークドリームは目の前のプリキュアに二三質問をぶつけることにした。

「あなた、誰？」

「水澤睦月、キュアアルガティア。あなたは？」

「ダークドリーム」

お互いに簡潔な自己紹介を終えて次なる質問をぶつけようとする、ふたりの少女が飛び込んできた。

突然誰かが飛び込んできたため、くるみは身構えたのだが、飛び込んできたのがなぎさとほのかのふたりだったため、くるみは警戒を解いた。

「ひかり!?!」

「どこ行つてたの!？」

「すみません……」

ひかりがある種の気まずさと憤りをない交ぜにした表情を浮かべてふたりに謝る。そして、ひかりが何かを言おうとした瞬間、なぎさが突然よろめく。よく見ると、いつの間にかのぞみがなぎさに抱きついていた。

こんなカラスの行水並みの短い時間じゃ、ろくに身体も暖まっていだろうに……そう思ったくるみは、のぞみを浴室へ追い返そうとすると、いつの間になぎさによって追い返されていた。

「すみません……お手数かけて……」

「構わないわよ、けど、なんで睦月がここにいるの？」

「ブロッサムとサンシャインが無人兵器を使ってキュアドリームに奇襲を掛けたんです。結果的に間に合いませんでしたが、ふたりの撃退には成功しました」

「そう……」

すると、突然睦月がなぎさを呼び、あることを伝える。

「実は、おふたりに来てもらいたい世界がふたつあるんです」

来てもらいたい世界……来てもらいたい世界というのは、いったいどこのことなのだろうか……

それを目の前の少女に問い詰めたくなかったが、問い詰めるよりも実際に行って確認した方が早いだろうと判断したなぎさは、短く首肯することで返答とした。

「アルガティア、私に何の用？」

「悪いわね、あなたの力を借りたくて呼んだの」

「って、どちら様ですか？」

「天上刹那、あなた達の味方」

突然現れた少女が自分達の味方とわかり、なぎさはほっと胸を撫で下ろした。そして、その少女がペンライトのような小さなスティックを睦月に投げ渡す。

「コレは？」

「ミラクルライト、コレで別の世界へと行き来できるって、キツネ目で七三分けの人が言ってた」

ずいぶんと親切な人がいるもんだ……となぎさは思い、ミラクルライトを振ってできたゲートをくぐり抜けた。

次回予告

なぎさ達の前に突如現れた少女、アスナ

彼女は自身を『過ちに刃向かう反逆の戦士』と呼称する

次回、『アスナ』

反逆の戦士、彼女は何故に戦うのか

#26 トリスナー（後書き）

コレじゃ予告詐欺じゃんか……orz

#27 アスナ（前書き）

反逆者の世界、到着

#27 アスナ

そこは、地獄だった。『愛』も『希望』も『祈り』も『幸せ』もない、まさに『地獄』だった。行き交う人々に活気はなく、皆が皆一様に暗い陰を落として決して広くはない通りを歩いている姿が、かつての管理国家ラビリンスを彷彿とさせた。

「これは……」

「地獄……ね、まさに」

ほのかが驚愕し、なぎさが小さくつぶやく。そして四人は、誰に案内されるでもなく、あてもなく散策をはじめた。

散策をはじめてしばらくすると、やや大きな といっても見た目かなりボロボロの 建物を発見し、四人は中に入ってみることにした。中はやや薄暗く、真っ暗で何も見えなかったのだが、目が暗順応するにつれて、次第に中の様子が見えてきた。中には約20人ほどの14〜5歳ほどの少女たちが一堂に会し、身を縮めて震えていた。

その中のひとり、茶髪をしたやや長髪でツーサイドアップの少女

北条響という名はあとで知った が、こちらを見るなり恐怖に引きつった表情を浮かべる。どうしたものかといぶかしんでいると、突然その少女が傍らにあった鉄パイプを握り、絶叫してこちらに特攻を仕掛けてきた。

あまり乱暴な真似はしたくないが……致しかたあるまい。そう瞬間的に決断したなぎさは、振り下ろされた鉄パイプを片手でつかみ、前蹴りの要領で思いつ切り蹴っ飛ばす。蹴っ飛ばされた少女は、反撃してくるのかと思いきや、尻餅をついたまま後退りしたため、なぎさはやや幻滅する。面白くない……もう少しくらい反撃してくるかと思っていたのだが……

なぎさは握っていた鉄パイプを無造作に投げ捨て、未だ恐怖に震える少女に近づいていく。

「こ、来ないで……殺さないで……」

「安心して、別に殺しやしないわよ」

「じゃあ……どうして……」

すると、目の前の少女に寄り添っていた少女　後に南野奏とわかる　が、やや怯え気味に質問する。

「私も詳しいことは知らない、わからないけど、ここへ連れて来られた」

「そうですか……」

「おい、お前!!」

突然後ろから声が飛んできたため、そちらに目を向けると、髪の短い少女が、肩を怒らせてこちらを睨みつけてきていた。

「ブルーコスモス風情がこんなところに何の用だ!!」

「ブルーコスモス?」

なぎさのきよとんとした表情を見て、目の前の少女があっけからんとした表情を浮かべる。そして、自分の勘違いだったとわかり、やや頬を紅潮させて謝った。

「すまない……俺たちはブルーコスモスの被害者なんだ。だから、よそ者が信用できなくてな……」

「構わないわよ、よそ者の私たちを警戒するのは至極当然の判断だから」

なぎさのその言葉を聞いた少女は「そうか……」とつぶやき、ひとり考え込む。そして、顔を上げた少女がなぎさに向かってつぶやく。「お前たちを信用できるかどうか、戦って見極めてみたい」

あいつらが本当に、俺の信用に足る人物かどうか、この拳で確かめさせてもらう。そう思ったアスナは、目の前の少女に向かって拳を振るう。

しかし、目の前の少女はその拳を片手で受け止め、右回し蹴りを放つ。しかし、アスナはそれを左腕で防ぎ、振り払って距離をとる。

「先制攻撃とは、やってくれるじゃない」

「まさか、かわされるとは思ってもみなかったがな」
そういつてお互いに見つめあい、どちらからともなく拳を振るった。

次回予告

アスナとの戦闘後、和解して協力関係を取り付ける睦月たち
そして、睦月が行きたがっていたもうひとつの世界へ……

次回、『平和な世界』

平和すぎる、ここはあまりにも平和すぎる……

#27 アスナ（後書き）

次回からしばらくは、夢原信者さんのクロスオーバー作

#28 平和な世界(前書き)

クロスオーバー、スタート

「これが……プリキュアの力を有する者の力……」
アスナと茶髪のショートカットの少女の戦いの一部始終を見ていた奏は、知らず知らずのうちにひとりつぶやいていた。

プリキュアの力を求めた理由……なんだっただろう……と考えていて、そもそも考え込む必要などなかったことに気づく。みんなの笑顔を、幸せを守りたい、そのために力を欲したのではなかったのだろうか……ずっと戦う理由から目をそむけ、怯え、逃げ続けてきた。そんな自分に、戦う資格などあるのだろうか……

いや、必要なのは『理由』ではない、『覚悟』だ。そう、『覚悟』。『覚悟』なくして、戦うことはできない。

もう一度、戦ってみよう。そう決心した奏は、隣にいる幼馴染みで親友の響に声をかける。

「響」

「奏？」

「私、もう一度、戦ってみようと思うの」

響はやや逡巡しゆしゆしているのか、ひとり考え込んでいる。そして、顔を上げた響の瞳には、決然とした決意の炎が燃え上がっていた。

「奏、私戦う。戦って、みんなのことを守りたい」

「ありがとう、響」

「アスナ、私達、もう一度戦ってみようと思うの」

「奏……待ってたぜ、その覚悟をよお!!」

奏の覚悟を聞いたアスナは、とたんに笑みを浮かべる。彼女のこの笑みは、戦うときのもの、全力で戦えると感じたときに彼女が無意識に浮かべる表情。つまり、『覚悟』ははっきりと見えたということだろう。

「俺はしばらく留守にする、それまで、この世界を頼んだ」

「任されて」

軽快な奏の返答に対し、アスナは微笑んで答える。そして、異世界から来たプリキュアたちが小さなペンライトのようなものを振ってゲートを開く。

「行ってくる」

「いつてらっしやい」

光るゲートに向かうアスナを笑って見送った奏は、残った仲間たちの士気を高揚させるため、なぜか演説を始めた。

「みんな、聴いてほしいことがあるの」

ミラクルライトのゲートをくぐり抜け、元の世界に戻ってきたなぎさたちだったが、帰ってきて最初に目に飛び込んできたのは、大きく声を張り上げて泣き叫ぶのぞみと、それをなだめすかすダークプリキュア5の面々であった。よく見ると、ダークプリキュア5にまざって、かれんとくるみ、ラブとせつながのぞみを泣き止まそうと奔走していた。

「なぎささんのバカああああっつっ!!」

「誰がバカよ、誰が……ってか、ひかりは？」

「勝手にいなくなったことにしないでください……っつと、のぞみさん、なぎささんが帰ってきましたよ」

『なぎさが帰ってきた』と聞いたとたん、のぞみは全速力でなぎさの胸にダイブする。その反動でなぎさが後方に倒れるが、のぞみはそんなことはお構いなしといった感じでなぎさをきつく抱きしめる。

「のぞみ……離れて……」

「やあだあああ」

なぎさが離れるよう催促するも、のぞみは甘え口調でそれを拒絶する。

「のぞみ……悪かったわね」

「どっ……行ってたの……」

なぎさはその質問に答えず、のぞみの頭を優しくなでる。

「次に行くところには、一緒に連れて行ってあげるから」と言った

とたん、のぞみの表情がやにわに明るくなる。どうやら、置いていかれたことに不満を感じていたらしい。

「……………ホント？」

のぞみの問いに、なぎさは短くうなずく。そして、なぎさは睦月に向かって声をかける。

「睦月、アンタの行きたいもうひとつの世界って？」

質問を振られた睦月は、やや黙考しつつ、短く答える。

「ガイアセイバーズ、プリキュアワールド支部」

『異世界から誰かが来た』という連絡を受け、そのポイントへ向かうプリキュアたちだったが、ある疑念が生じる。いま異世界から来た異邦者たちは、友好的な者たちなのだろうか…………と。

しばらく走っていると、その目的地であるポイントにたどり着いた。そこには、キュアブラック、キュアホワイト、シャイニールミナス、キュアドリーム、キュアピーチ、キュアパッションの六人と、自分たちの知らない少女がふたりの合計八人が寄り添うようにして固まっていた。

「はじめまして、異世界の皆さん。キュアエルス、光明寺御子です」
こうみょうじおんこ
迎えに来たプリキュアを代表して、キュアエルスこと光明寺御子が挨拶する。そして、御子の案内により、ガイアセイバーズプリキュアワールド支部基地、通称プリキュアハウスにたどり着いた。

「ただいま戻りました」

「エルス、お帰り」

そういつて出迎えたのは、ガイアセイバーズプリキュアワールド支部支部長こと、夢原信者氏であった。みんなからはなぜか『作者さん』と呼ばれて慕われている。

「けど……………何でこの世界に？」

作者さんが、この場にいる全員が聞きたいであろう質問をツインテールの少女にぶつける。

「実は……………皆さんにもある勢力を叩くため、協力を仰ぎに来たんで

す」

「で、その勢力って？」

続いて、作者さん同様に仮面ライダーとして活躍している園咲霧彦がツインテールの少女に質問をぶつける。その少女はややうつむき、数秒間考え込む素振りをした後、顔を上げてその勢力の名をつぶやく。

「……………時空管理局」

次回予告

プリキュアワールド支部の計らいにより、なぜか催される歓迎会
そこで睦月は、その内容に啞然とする

次回、『歓迎会の値段』

ありえない、こんなの絶対、ありえない……………

#28 平和な世界（後書き）

次回は歓迎会の模様

#29 歓迎会の値段（前書き）

かなりの予告詐欺

#29 歓迎会の値段

「じ、時空管理局……なんで……」

御子は自身の耳を疑った。なぜ……時空管理局が……確かに、時空管理局は一枚岩ではないし、鳴滝率いるネガシヨツカーやウルトラマンベリアルと上層部が繋がっていたこともあった。だがなぜ……御子は時空管理局に、いや、機動六課に救われたため、御子は信じられないのだが、睦月は機動六課、いや、高町なのはにすべてを奪われたため、時空管理局自体を敵視しているのだが、それは御子の知るところではなかった。

「あいつらは……時空管理局は……私からすべてを奪い取った……友も、帰る場所も……」

「そんな……そんなことって……」
哀しすぎる……あまりにも哀しすぎる……自分は時空管理局に救われた、しかし、彼女は時空管理局に、時空管理局の身勝手な制裁に大切な『何か』を奪われた。自分にとっては『善』であっても、彼女にとっては『悪』でしかないだろう。だが、時空管理局にだって、いい人はいる。それは彼女もわかっているはずだ。しかし……だが、その思考は横合いから飛んできた怒号によって強制的に中断させられた。

「そうです、間違ってます!!」
えっ……私はそういう意味合いで言ったんじゃないんだけど……ブロッサム、何がどう間違っているというの？あなたの正義って、なんなの……

「なんで時空管理局が正しいってわからないんですか！？なんで自分の思想が間違っているって気づかないんですか！？なんで……」

「なら、何をもって間違っているというの？何をもって正しいというの？そもそも、あなたの正義ただしいことってなんなの？」

確かに、彼女の言うとおりだ。何をもって正しいとするか、何をも

って間違いとするか、それは当人の主観に委ねられる。それに、正義なんて人それぞれ、ひとつである必要などない。

歯を食い縛り、返答に窮するブロッサムを見て失望したのか、少女は冷ややかな視線と冷たい声をブロッサムに投げつけた。

「この程度の詰問で答えに窮するようでは、あなたの正義もその程度ってことね」

拳を握り締め、うつむいたまま低く呻くブロッサムを見て失望したのか、冷ややかな視線でブロッサムを見て冷たく笑う。

「ふっ」

その冷たい笑みに激怒したのか、ブロッサムが突然ブロッサムタクトを目の前の少女に向ける。ブロッサムタクトを向けられた少女のほうは、腰元のホルスターに装備していた大型の拳銃の銃口をブロッサムに向ける。

どちらも相手の攻撃を警戒してか、動く気配を見せない。耳が痛くなるほどの静寂を打ち破ったのは、以外にもダークブルームであった。普段の彼女なら、介入などせずただ黙って傍観しているだけだろうに……

「ふ、ふたりとも……ケンカ……しないで……」

「ダークブルーム、黙っててください！！フエイトさんたち時空管理局が間違っているなんて言う人はみんな悪に決まっ……」

ダークブルームの気遣いを怒号ではねのけ、ひとりよがりなおも独善的な安い正義を振りかざすブロッサムに内心苛立っていたのか、別世界から来たキュアドリームがブロッサムの頬を思いつ切り張り、胸倉を引っ掴む。

「その安っぽい正義、聞いててムカつくのよ！！自分の正義が全部全部正しいか思ってたんじゃないわよ！！」

「同感ね、あいつら時空管理局の実態も知ろうとしないで……」

「あなたたちに何が……」

次に発されるはずのブロッサムの怒号は、しかし突然響いた銃声によって文字通り『撃ち』砕かれる。

「はい、ケンカはそこまで」

ふと見ると、別世界から来たキュアブラックが、いつの間にか握っていた拳銃を天井に向けて撃っていた。見ると、銃口から硝煙しょうえんがたなびいている。

「睦月、のぞみ、私達はケンカ売りに来たわけじゃないんだから、もつと友好的になりなさい」

その言葉に対して、ふたりは素直に「すみません」とだけ謝る。

「すみません……私たちの場合、現状が現状だけに、つい殺気立って……」

「いや、構わないよ。そつちも事情があるんだしね」

キュアブラックの謝罪に対して、作者さんがフォローを入れる。そして、何を思いついたのか、突然こんなことを言い出した。

「それと、さっきの仲直りもかねて、君たちの歓迎会をしたいんだ」

これはいつたい、どういうことなの……

睦月は目の前の光景に唖然としていた。確かに、歓迎会といえど馳走だが、これはいくらなんでもやりすぎではないか？

その量もさることながら、やたら質が高いのだ。自分の支部でもないのに、財政を本気で心配してしまう自分がいることに気づき、睦月はやや自嘲じやうぢ気味に笑う。

しかし、この豪華な料理を見ていると、どうしても人数分の料理を並べつつ非常に申し訳なさそうな表情を浮かべていたリーベを思い出してしまふ。

まあ、いいか。せつかく歓迎してくれているんだし……そう思った睦月は、目の前の料理に取り掛かった。

そして翌日、睦月が某炎のモバイルスーツ乗りの口調でとんでもないことを言い出す。

「模擬戦やるよ……」

次回予告

プリキュアワールド支部の実力を測るため、なぜか突然模擬戦をすることになったプリキュアワールド支部の一同
模擬戦後、彼女たちは驚愕の事実を目にする

次回、『血塗られた天使』

それは、あまりにも残酷な……現実

#29 歓迎会の値段（後書き）

次回は模擬戦

#30 血塗られた天使（前書き）

作者が暴走したようです。

#30 血塗られた天使

「デュアル・オーロラ・ウェーブ!!」

「ルミナス・シャイニングストリーム!!」

「プリキュア・メタモルフォーゼ!!」

「スイッチ・オーバー!!」

「プリキュア・リジエネイト・ユニゾン!!」

「プリキュア・リボーンズ・イノベーション!!」

なぜこんなことになったか、それは前日までさかのぼることになる。

「模擬戦？」

「はい、プリキュアワールド支部のプリキュア達の実力を、見極めておきたくて……」

模擬戦をプリキュアワールド支部のプリキュア達に提案したのは、睦月であった。おそらく、自身が元ガイアセイバーズ所属であるため、彼女達の実力が気になるのだろうとなぎさは踏んでいた。

「元ガイアセイバーズの身としては、実力が気になるってところね」

「はい、彼女達が本当にプリキュアを名乗るに値するかどうか、この目で見極めたいんです」

やはりそうか……ある程度予想はしていたが、ここまでドンピシャとは……つくづく自分のカンの鋭さが恐ろしい。

ふと気がつくと、睦月が携行していた拳銃のうちの一本を分解して整備していた。確かオーバーホールと言ったか、だがこんなところでやらなくてもいいだろうに……

そんなことを考えていると、いつの間にか二挺ともオーバーホールを終えたのか、先ほどの拳銃は既に両腰のホルスターに収められていて、隣で軽く伸びをしていた。

「これで整備終了？」

「いえ、まだあと五挺ほど……」

そう睦月は言ってキュアアルガティアへと変身して残る五挺の銃火器を並べだした。すると、キュアマリンが銃に興味を抱いたのか、並べてある一挺に手を伸ばす。

「マリン、勝手に触ったらダメよ」

「はあ〜い……」

ムーンライトに注意され、マリンは渋々といった感じで手を引いた。これでひと安心……かと思いきやそうでもなく、マリンはなぜか肩を怒らせたブロッサムに睨みつけられていた。

「マリン……」

「な、何？ブロッサム……」

「マリン、私は正直失望しました。あなたが銃そんなものに興味を抱くなんて

……」

「いいじゃん、別に……」

『失望した』と言われ、やや不機嫌なマリンを無視してブロッサムはアルガティアに詰め寄る。

「仮にもプリキュアともあるう者が、そんな飛び道具に頼って恥ずかしくないんですか!?!」

だが、睦月はその糾弾をことさら無視して整備が終わったと思われるスナイパーライフルを組み立てていた。

「聞いてるんですか!?!」

しかし、当のアルガティアはブロッサムの糾弾などどこ吹く風といった感じで、組み立て終わったスナイパーライフルのボルトを軽くがしゃこんと引き、前方に向けて構える。

「よし、整備完了」

「ふざけるのも大概にしてください!!」

「ブロッサム、うるさい」

なおもアルガティアに詰め寄ろうとするブロッサムだったのだが、苛立っているのであるうマリンによって一蹴される。

「うるさいってなんですか!?!マリンは何も感じないんですか!?!」

「聞こえなかった?ブロッサムは黙っててって言ったの。その金切

り声、耳障りで苛々する」

『耳障り』と言われ、怒りが頂点に達したブロッサムは、その怒りのままにマリンを殴ろうとするが、突如ブロッサムの背後からキュアエルスが「少し……頭冷やそうか……」などと言ってブロッサムをどこかへ連れ去り、その後なぜか謎の断末魔が聞こえたような気がした気もしなくもないが、そこはあえて無視することにした。

そういえば、そこから一悶着あつて大変だったんだっけ……とルミナスは思い返そうとしたが、目の前の自分はそれを許そうとしないかのようにして猛然と攻撃を仕掛けてくる。

どうも、彼女は自分のスタンスを忘れている節がある。なら、自分のポジションを身を以て解らせるまでだ。そう思ったルミナスは、両腰と腰背部に装備した光る牙を目の前の自分に向けて全機射出する。

「行きなさい、フアングー！」

放たれたすべてのフアングは、ルミナスめがけて無軌道銃座のごとく緋色の粒子ビームを放つ。全方位から放たれる緋色の粒子ビームに戸惑いつつも、猛然とこちらに特攻を仕掛けるルミナスに向けて、突貫兵器のごとくルミナスに向かって飛翔する。

「分不相応なことをするから、こういう目にあうの」
今まさに跳び蹴りを放とうとしたルミナスの右下腿部に突き刺さり、その反動でルミナスが前向きによるめく。ひかりはその隙を逃さず、さらに胸に突き立ててよろめかせ、さらに全方位から次々とフアングを突き立て、ルミナスがひとりリズムを刻む。

さあ、もっと踊りなさい。そして、もっと私を楽しませなさい。そうひとりほくそ笑むひかりは、さらにハーティエルフアングを増産してルミナスに突き立てる。そして、突き立てたすべてのフアングを軽快に両手の指を鳴らして爆散させ、戦闘不能に追い込む。

これで片付いた。さて、誰の援護に行こうか……そう思い頭をめぐらすルミナスは、四対一で苦戦しているキュアエクスを発見する。

さて、彼女の援護に向かうか……そう思ったルミナスは、ハーティエルフアングを再び形成してエクスの元へと向かった。

「っ……こいつ……」

ひかりがルミナスを倒したほぼ同じころ、エクスは自分と同じ属性を持つ赤と青のツイトンのプリキュア　確かキュアブレイズと言った　と黄色と緑のやはりツイトンのプリキュア　キュアテンペスト　、橙色と紫色をしたこれまたツイトンのプリキュア　キュアガイア　とキュアエルの四人の猛攻に、やや押され気味になっていた。

この戦闘において、自分は何度舌打ちしたのだろうと考え、すぐにやめる。そんなことは考えても無駄でしかないし、そんなことを考えているヒマがあるなら、目の前の障害をどうやって排除するかを考えた方が賢明だろう。

この現状を打破するにはトランザムしかない、そう考えたエクスはすぐさまトランザムを起動させて一気に四人から離れる。しかし、離れたのはいいが、これからどうしようか……

エクスは四人と距離を取りつつ、右手に装備したエクスソードを折り畳んだライフルモードの銃口から数発の粒子ビームを撃って牽制する。そして、そのまましばらく粒子ビームを撃っていると、自分の撃ったビームに混ざって緋色の粒子ビームが四人のプリキュア達に向けて飛んでいくのが見えた。一体誰が……

確か、あのピンクのプリキュアが使っていた光る牙がこんな粒子ビームを放ったはずだ。ということは……と軽く首を振って彼女の姿を探す。

やはりそうか、どうやら彼女は、誰かのサポートに縁があるらしい。ならば、とエクスは無尽蔵に放たれる緋色の粒子ビームの援護を受けつつ、四人のプリキュアに向かって急迫する。

四人のプリキュアに急迫しながら、エクスは両手にキュアダガーの柄を握らせ、軽い挨拶代わりに投げ捨てる。すると、キュアブレイ

ズは、やはりというかなんというか、こちらの予測どおりにキュア
ダガーを右手の実体剣で切り払う。だが、それによって大きく隙が
生まれたのをエクスは見逃さなかった。

エクスはトランザムの加速の勢いをまったく殺さず、両手にキュア
サーベルの柄を握らせ、すれ違いざまにふたりのツートンのプリキ
ュアの胸に突き立てる。しかしエクスは、その結果を見届けるとい
う愚を犯さず、その勢いのまま半回転しながら右腰のマウントラッ
チに固定していたエクスショートブレイドをブレイズに向けて投げ
放つも、距離がありすぎたのか、あっさりとはよけられてしまう。

しかし、エクスはここで左腰のエクスロングブレイドを空いた左手
に握らせ、さらに右手のエクスソードを展開して二刀流の体制でブ
レイズに集中したため、先ほどよけられたショートブレイドが偶然
ブレイズの延長線上にいたミルキイローズの右胸を背中から貫いた
のだが、そこはエクスの知るところではなかった。

そして、ブレイズに急迫したエクスは、右手のエクスソードと左手
のエクスロングブレイドをアルファベットのXを描くようにして振
り下ろすが、その両方の実体剣を右手の実体剣で切り結ぶ。しかし、
トランザム化してパワーとスピードが三倍になったエクスの実体剣
を防ぎきれはらずがなく、強引に力押しで右手の実体剣を押し斬ら
れ、X字の斬劇をその身に食らう。

あとはエルスだけか……そう考えたエクスは、トランザムの勢いに
任せてエルスへと向かっていった。

こいつ……強い……おそらくは私達以上に。

盟友のキュアホワイトとともに目の前のもうひとりのキュアブラック
を追い詰めていたブラックは、相手の格闘センスを見て直感的にそ
う感じた。だが、それと同時に、彼女の意識がまったく別の方向に
向かっていることにも気づき、ブラックは癪かんに障さわった。

それってつまり、私達ふたりなんか余所見をしても余裕で相手
できるほど自分は強いってこと!?

「戦闘中にいい……」

「余所見なんてええつつ!!」

渾身の力を込めて振りかぶった鉄拳は、しかし突然回避されたことよって前につんのめる。しかし、ついさっきまでは間違いなく私の目の前にいた。腕に残る感覚が、その証拠だ。

なのに、いない。

あいつ、どこに消えたの!?

《どけっ!!》

すると突然頭の中に声が響いたため、ブラックは思わず頭に手をやり、辺りを見回す。なんで、声が頭の中に……それに、あいつはどこに……

そんなことを考えていると、突然背中に焼け付くような痛みを感じたため、首を回そうとして、しかしその必要がないことに気づく。

ちょうどブラックの胸の中心部から、桜色をした細身の剣の切っ先が顔をのぞかせていたからだ。

ふと見ると、ホワイトの背中にも自分の突き立てられたものと同じものと思われる桜色の剣が背中から突き刺さっていた。茫然自失となったふたりの間を、キュアブラックが悠然と通り過ぎていく。

あの柄の形状、この桜色の刀身、もしかしてこれって……ビー……ム

……サー……べ……

しかし、ブラックがその答えにたどり着く前に、ブラックの意識は暗闇へと運び去られた。

キュアブラックとキュアホワイトのふたりをあっさりと倒したなぎさは、七対一で苦戦しているであろうイスの元へと向かった。ふと気がつくのと、いつの間にかスプラッシュスター組を倒したのであるうほのかが、仲良く併走している。

「ホワイト、いつの間に……」

「さっきサクッと」

なぜか楽しげに報告するほのかに、なぎさはやや苦笑する。ふと、

首を振ってスプラッシュユスター組を探すと、ビームサーベルの柄が胸の中心部に突き立てられていた。

次はフレッシュ組の三人と、ハートキャッチ組の四人の合計七人か…… そうなればあとは話が早い、全力を以て叩き潰すだけだ。

そう考えたなぎさは、全力でブロッサム達に向かつて特攻する。しかし、ビームサーベルは先程ブラックとホワイトの背に突き立ててきたため、手持ちの武器がない。

苛立ちを転嫁するようにして奥歯をきつく噛み締めていると、突然緋色の粒子ビームが七人のプリキュア達に向けて飛んでいくのが見えた。敵の増援かと思っただが、ルミナスとわかったため、なぎさはこれ幸いとばかりに七人に猛攻する。

緋色の粒子ビームの雨の援護を受けつつ、なぎさは悠然と突っ込み加速の勢いを借りて両腕を振るう。するとどうだろう、ブロッサムとサンシャインはその拳をマトモに食らったのだ。

やはりというかなんというか、ふたりの弱さについて安心してしまっただがしかし、不安にもなってしまう。こうまで弱いとつい突っ込みたくなる。こんな実力で大丈夫か……と。

こうなったら、アルガティアと協力して現状を打破しようかと思っただが、すぐに却下せざるをえなくなる。その協力しようとしていたアルガティアが、総勢12人のプリキュア達に足止めされていたのだ。

「っ！こいつら……！！」

ツヴァイ

アルガティアは両手のバラーナーナIIを全方位に乱射しつつ、この現状を打開する方法を模索していた。トランザムを使えば、と考えたが、すぐに却下する。だが、セイクリッドなら……

だが、どちらにせよ、こちらの切り札を使わねばならないという点においては意味合いは同じだった。しかし、このまま手をこまねいていては、じりじりとなぶり殺しにされるといいうのも、また事実だった。

どうせ何もせずに一方的に蹂躪されるなら……そう直感的に感じたアルガティアはバラエーナイエを腰背部にマウントし、迷うことなく変身する。そして、全身を包んだ光が消えた先にいたのは、右肩に大型の箱状の装備を、左肩にガトリングガンを、そして両手に抱えたアサルトライフルユージェイクウム改にグレネードランチャーを装備したアルガティアがいた。

変身の完了したアルガティアは、右肩の箱状の装備から棒状の装備と思われる何かを展開し、二段階目に伸びた棒状の何かが上下に展開して、その展開した隙間にプラズマの光が絡み付いているの見える。

そう、これはレールガンなのだ。アルガティアは蓄電の完了したレールガンを、密集したプリキュアたちに向けてあまり狙いを定めず乱射する。おそらく五発ほど連射したであろうレールガンの砲弾は、一発はキュアミントに、一発はキュアレモネードに、一発はミルキイローズに直撃したのだが、残る二発のうち一発は長髪のキュアブラックを掠めたかすだけにとどまり、そしてもう一発は純白のキュアドリームたすまの右手に携えた剣によって切り払われた。

続いてアルガティアは左肩のガトリングガンを前方に向けて構え、これまた狙いを定めず乱れ撃つ。するとどうだろう、乱射したガトリングガンの弾は、黒いブルームや黒いブロッサム、黒いメロディや黒いピーチに直撃し、次々に戦闘能力を奪っていく。かろうじて弾幕をかまし続けたのは長髪のブラックとダークドリーム、そしてキュアアクアとキュアルージュ、さらに純白のキュアドリームの計五人だった。

アルガティアは短く舌打ちすると、左肩のガトリングガンで弾幕を張りつつ、右肩のリニアレールガンで精密狙撃する。いくら精鋭揃いのプリキュアワールド支部のプリキュアたちとはいえ、砲弾の雨をかいくぐりながらリニアレールガンの精密狙撃をかわしきるのは不可能だったようで、長髪のブラックとダークドリーム、キュアルージュに直撃して戦闘不能にさせる。

しかし、自身もプリキュアであるが、敵もプリキュア。プリキュアとしての意地があるのだろう、キュアアクアが青く輝く一本の矢をレールガンに向けて放つ。放たれた矢はレールガンの砲身に飛び込んで本体を貫き、右肩に固定したままのレールガンが盛大に炎の花を咲かせる。

そして、その隙を狙われたのか、青い矢がアルガティアの胸を貫く。だが、これしきのことでは引き下がれないと、左肩に固定していたガトリングガンを両手で保持し、キュアアクアに向けて構える。ふと気がつくとき、純白のキュアドリームの姿が見えなくなっていた。

一方そのころ、のぞみは変身させてもらった方がいいが、なぜか残党狩りめいた地味でややつまらない役割を割り振られて、ややふてくされながら与えられた役目をこなしていた。

なんで私が残党狩りなんか……私だってもっと派手に戦いたいのに

……

胸の内になぎさに対する不満を抱えつつ、クリスタルフルーレを振るって戦闘能力をほぼ失ったプリキュアたちに次々と追い討ちをかけていく。その中にはキュアエクスショットブレイドに右胸を貫かれ、さらにレールガンの砲弾の直撃を食らってろくに活躍もできずにいたミルキイローズもいたのだが、そこはのぞみの知るところではなかった。

そうしてのぞみはしばらくの間残党狩りを続けていると、上空からもう一人のドリーム、シャイニングドリームがスターライトフルーレを突き出してこちらに特攻を仕掛けてきた。そうよ、私はこれとやりたかったのよ!!!

そしてのぞみは、高揚した気分のままに、キュアモを右手に握らせる。あの人にはあとでいくらでも怒鳴られよう、しかし、今は力を出し惜しみしている状況ではない。そう即断したのぞみは、キータツチを奏でて変身コードを唱える。

「プリキュア・トランス・メタモルフォーゼ!!!」

のぞみの全身が光に包まれ、トランスフォーゼを済ませたのぞみは、目の前のシャイニングドリームに向けてスターライトフルーレを振るう。しかし、敵も悠然と斬られるのを待っているほど馬鹿でもなければ愚かでもない。敵のシャイニングドリームはスターライトフルーレを自身のスターライトフルーレで切り結び、力だけで強引に押し返す。

だが、のぞみはその反動を逆に利用してシャイニングドリームの手首を蹴り上げてスターライトフルーレを奪い取る。そして、強奪したスターライトフルーレを左手に握らせ二刀流となったのぞみは、そのまま一気に加速してシャイニングドリームの胸にふた振りのスターライトフルーレを突き立てる。プリキュアワールド支部の要であるシャイニングドリームが倒されたことにより、模擬戦は自然と終了となった。

プリキュアハウスの広間に乾いた音が響く。確認するまでもない、なぎさがのぞみの頬を張った音だ。

「アンタねえ……模擬戦前に念を押しって言ったでしょうが!? シャイニングドリームになるなって!!」

のぞみはなぎさの剣幕に気圧けおされてか、ついと目をそらし、視線を外す。

「ったく……今回はあの程度の吐血で済んだからいいようなもの……」

変身できないため、模擬戦の様子を眺めていたラブは、プリキュアワールド支部のプリキュアたちが変身を解除した途端に血を吐いたのぞみを見て驚愕に満ちた表情を浮かべていたのが不思議でならなかった。いったい何が不思議だというのだ?

「睦月、ここの支部のプリキュアたちの実力はどう?」

「まったくダメです、話になりません」

プリキュアワールド支部のプリキュアたちの実力を問われ、睦月はばっさりと切り捨てる。その答えにブロッサムはひどく怒りをあら

わにして睦月を糾弾する。

「当然です！銃火器とくひとうかくを使ったら勝てるのは当たり前です！！」

「あら、それはあなたが弱いからでしょ？アクアは弓でレールガンの砲口を狙撃するだけの技量は見せたわよ」

睦月に『弱い』と言われ、悔しさからかブロッサムが齒噛みする。

そして、あまりのふがいなさに、ブロッサムはとうとう泣き出してしまった。

「強くなりたい？」

睦月のその問いに、ブロッサムは間髪入れず「はい！！」と答える。

睦月はその返答を予測していたかのようにスムーズに変身し、ブロッサムの特訓を開始した。

次回予告

『史上最弱』の不名誉な称号を返上すべく、アルガティアに鍛えられるブロッサム

果たして、彼女は汚名を返上することができるのだろうか……

次回、『史上最弱脱却作戦』

もう弱虫なんて……言わせない……

#30 血塗られた天使（後書き）

ブロッサム「私、頑張ります!!」

#31 史上最弱脱却作戦（前書き）

文才のないダメ作者が張り切ってクロスオーバー依頼した結果がコシだよ！！

3 1 史上最弱脱却作戦

「まずは、戦闘の基本から指導するわよ」

「はい!!」

ブロッサムとテンペストはアルガティアと共に、つい先刻まで模擬戦を行っていた中庭に赴き、訓練という講義を受けていた。つい先刻まで模擬戦を行っていたせいも、中庭の各所にはレールガンの砲弾にえぐられた地面、超高温の粒子ビームに焼き尽くされた草花、ガトリングガンの弾によつて中途から引き裂かれた大樹など、これだけでも先の模擬戦の過激さがうかがい知れる。

「戦いにおいて最も重要な事項、それは『間合いを制する』こと」
「間合いを……制する……」

ブロッサムのつぶやきに、アルガティアは短く首肯する。

「たとえば、高町なのは。彼女が得意とする間合いは長距離、つまり……」

「接近戦にめっぽう弱い」

「そう、その苦手な接近戦をカバーするために、彼女はフェイト・テストロッサ・ハラオウンとコンビを組んでいる」

「なのはさんがフェイトさんとコンビを組むのにはそんな理由が……」

「そう、彼女が得意とするのは砲撃戦。ゆえに接近戦をカバーするためにフェイト・テストロッサ・ハラオウンと常にコンビを組んでいる。」

しかし、何事にも例外というものはある。才能と技量によつて欠点をカバーすることができると器用さがあれば、オールラウンドに戦うことも不可能ではない。これも、高町なのはが『不屈のエース・オブ・エース』と称される理由のひとつだ。

だが、それを教えるのはもう少しあとでもいいだろう。基本ができずに、応用のできるものはいない。

「今言ったことを、実戦形式でおさらいするから。今の教導を理解できたかどうか、その拳で私に証明してみせなさい!!」

「はい!!」

決然とした返答と共に、ブロッサムとテンペストはアルガティアに向かつて飛びすさんだ。

その教導の様子を、なぎさとのもみのふたりがやや離れた位置から観戦していた。口元に火のついた煙草をくわえて。

「のぞみ、灰皿」

「あつ、どうも……」

のぞみの口元にくわえた煙草の灰が落ちかけるのを見て、なぎさは携帯灰皿をそつと差し出した。そして、のぞみはその携帯灰皿に煙草の灰を落とす。

「あなたたち、なに煙草なんか吸ってるの!? そもそも未成年の喫煙は……」

教導の様子を紫煙をくゆらせながら眺めていると、彼女たちの後方からムーソライトのやかましい説教が聞こえてきたのだが、ふたりはそれをことさら無視して会話を続ける。

「そういえば、のぞみ。連邦法つて覚えてる?」

「ええ、覚えてますよ。『15歳以上のコーディネイター、及びイノベイターは成人とみなす』でしたっけ?」

「ええ、それよ」

「人の話を聞きなさい!!」

なぎさたちの後ろで、なおもムーソライトがわめくが、不愉快さをあらわにしたマリソグがムーソライトの腕を掴み、「黙っててよ、ムーソライト」と低くつぶやく。

「煙草くらい、黙認してあげたらどうなんです? 特にあのふたり、煙草でも吸わなきゃやってられないほど……」

「マリソグ、黙ってなさい!!」

『黙れ』と言われ、さらに不愉快げに顔をしかめるマリソグだったが、

なぎさはマリンの喋り方に妙な違和感を感じる。まるでえりかがマリンの身体を使って言いたいことを言っているような、キュアマリンにえりかが同調しているような、そんな違和感を。

そんなことを考えていると、いつの間にかのぞみの隣にいたキュアドリームが、のぞみに対して声をかけていた。

「ねえ、そっちの私」

「ん？」

それに対して、のぞみは火のついた煙草をくわえたまま振り向いたため、ドリームが「あつ、その前に……火、消してくれませんか？」と言ったため、吸っていた煙草を携帯灰皿に放り込む。

「ところで、何の用？」

「さっきの模擬戦、なんで私をあも圧倒できたの？」

どうやらドリームは、先の模擬戦で秒殺されたことが気に食わないらしい。その問いに対してのぞみは、さも当然のことを答えるかのようにして返す。

「当然でしょ、あなたは『最強』の称号の上に胡坐をかいていたの。自分の能力を過信しすぎたのが敗因よ」

そつのぞみは言いつつ、二本目の煙草をくわえて火をつけようとするが、不良品のライターだったからなのか、なかなか思うように火がつかない。それを見てなぎさは、しょうがないな……と愛用のジッポーに火をつけてのぞみに差し出す。

「あつ、すみません……」

「いいわよ、私ももう一本吸いたかったし」

そう言いつつ、なぎさは自分の煙草にも火をつけてから、ジッポーの蓋をカチンと閉じた。

「なぎささん、今日は何本目ですか？」

「まだこれで二本目よ。睦月、アンタもどう？」

ふと気がつくと、睦月がいつの間にか教導を終えて帰って来たため、なぎさは煙草の箱を軽く振って勧める。なぎさのその勧めに睦月は「では、お言葉に甘えて……」と、差し出された煙草の一本を摘ん

でくわえ、火をつける。

「それはそうと睦月、あんたの教導ずいぶん短いのね」

「ええ、彼女たちなかなか呑み込みがいいので。そういえば、向こうのほうでなんだか修羅場に発展してる箇所があるみたいですよ」
睦月が火のついた煙草で指し示した先には、腕を組んでせつなを睨んでいるキュアピーチと、せつなの隣で小さく縮まっているキュアパッションの肩をやさしく抱き寄せつつ、なぜかピーチに敵対心をあらわにしているラブの姿だった。

「今のせつなは、パッションであって、イースじゃないんだよ!? 何でそれがわからないの!？」

「わかってないのはどっちさ!? イースがいなきゃ、パッションもいなかったんだよ!？」

もうひとりの自分の隣で小さく縮まっているパッションをはさんで、ふたりのキュアピーチが舌戦を繰り広げている。何を題目にして口論しているかなど、すぐにわかるだろう。このふたりは『イースとパッションは同一人物か否か』を論議しているのだ。

激しい論議を話半分に聞きつつ、パッションは隣にいるもうひとりの自分を見やる。彼女は、私の目の前で当然のごとくスイッチ・オーバーしてみせた。なぜ？

「ねえ、あなた……」

「何?」

パッションがやや遠慮がちにせつなの名を呼ぶと、当のせつなは「何か用か」とでも言いたげな表情で振り向く。目の前の彼女に対して訊きたいことなど、文字どおり山ほどある。そして、パッションはその中から、一番訊きたい質問を舌に乗せた。

「今のあなたは、何のために戦うの?」
するとせつなは、さも当然のことを答えるかのような口調で返答^{こた}える。

「ラブのためよ」

「そう……」

何の迷いもなくはつきり答えるせつなを見て、パッションは彼女のことをやや羨ましく感じていた。彼女には、明確な戦う理由がある。それに引き換え、自分はどうか？『ラブに救われた』という理由だけで、彼女のことを盲信しているだけではないのだろうか？

「パッション、だめよ！こんなやつ言うことに惑わされちゃ！」

「だから、何度言えばわかるの！？イスだろうとキュアパッションだろうと、同じ『東せつな』じゃんか！！」

ラブの怒気に満ちたその言葉を聞いて、パッションは驚愕に打ちひしがれた。そうか……私が求めていたのは『自分をやさしく受け入れてくれる桃園ラブ』ではなく、『イスだった過去も含めて『東せつな』と認めてくれる桃園ラブ』だったのか……

ふと気がつくのと、頬を幾筋もの涙がたつたっていることに気づく。どうせなら、泣いて喚いて、今までの鬱屈した感情を思いつ切りぶちまけたい。

「えっ……私、なんか悪いこと言った？」

「ううん、ものすごくうれしいこと言ってくれた。『イスもパッションも同じ東せつなだ』って」

うるたえるラブに対し、パッションはやや泣きじゃくりながら今の思いを伝えようとするが、空気を読まないアナウンスによってお流れとなった。

『ダークエンジェルス出現、動けるプリキュアは至急現場に急行せよ。繰り返す、ダークエンジェルス出現、動けるプリキュアは至急現場に急行せよ』

ダークエンジェルスが現れたというポイントに向かったプリキュアは、なぎさ、ほのか、ひかり、のぞみ、ラブ、せつな、アルガティア、エクス、ブラック、ホワイト、ピーチ、エルの総勢12人であった。

「来たわね、プリキュアたち」

複数の怪人たちを従える少女　ジェニスと言う名はあとで知った
を見て、アルガティアはなぜか懐かしさを覚えた。そう、どこ
となくフェイトに似ているのだ。

アルガティアが目の前の怪人たちに向かって攻撃しようとした瞬間、
一体の怪人が突然爆発する。一体誰が……と辺りを見回すと、栗色
のツインテールをたなびかせたラブが、華麗に着地するところだっ
た。

「ラブ、腕を上げたわね」

「ありがとう、せつな。おかげで自信が出てきたよ」

そんなこんなで次々に怪人たちを倒していくと、人間の数十倍ほど
もある黒い仮面をつけた怪人が、仮面の張り付いた顔と思われる箇
所をこちらに向けてきた。

「ダメ！あいつ複数のリセッターが融合してるからいくら攻撃し
ても再生する！！」

つまり、ダメージを負った場所を別の場所が回復しているのか……
まったく、究極のダメージコントロールじゃない……

「せめて、敵がもう少しだけでも小さかったら……」

ふと見ると、ひかりが怪人を見上げて悔しげに小さくつぶやく。す
ると、エルスがひかりに近づき、ある提案をする。

「リセッターを小さくすることはできませんが、あなたを大きくす
ることはできますよ」

エルスに焦げ茶色のアンプルを渡されたひかりは、この薬を飲むか
どうかで悩んでいた。敵の弱点は12箇所、ちょうどハーティエル
ファングと同数だ。

これを飲んで強くなれるなら……と思ったひかりは、何のためらい
もなく手元の薬を一気に飲み干す。そして、エルスからの説明どお
り『ウルトラマン並みのサイズ』にまで巨大化していた。

これならいける……そう感じたひかりは、両腰と腰背部に各四機ず

つのハーティエルファングを形成し、目の前のリセッターと呼ばれた怪人に向けて全機射出する。

「行きなさい、ファング!!!」

放たれたファングは、的確に敵の弱点を貫き、全機が敵の弱点を貫いた瞬間、ハーティエルファングがいつせいに爆発する。そして、いままでどんな攻撃を受けても平然としていたリセッターが突然爆発した。

「ひかり、ちったあ警戒しなさいよ……」

「すみません」

やや呆れ顔のなぎさに対して、ひかりは申し訳なさそうな表情を浮かべて謝る。ふと気がつくのと、リセッターたちを従えていた少女が、いつの間にかいなくなっていた。

「今回は世話になったな。しかもダークエンジェルスの戦闘にまで加勢してもらって」

「いえ、かまいませんよ。一宿三飯のお礼もありますしね」

作者さんのねぎらいの言葉に対して、なぎさはやんわりと返す。

「そうだ、もうそろそろ直也とコズミックがくる予定なんだ……すっかり忘れてたよ」

直也とコズミック、初めて聞く名前だが、おそらくはこのプリキュアワールド支部の協力者か何かだろう。そう考えていると、作者さんの口から思いもよらない名前が飛び出す。

「まったく……壊滅したガイアセイバーズ支部の件も舞い込んでこっちはてんやわんやだよ……」

「壊滅した支部……ですか？」

「その支部の名前は……なんと言うんですか？」

ふと気がつくのと、睦月がやや震える声で壊滅した支部の名を聞くようとしている。おそらくは自分の支部のことではないのかと不安でいっぱいなのだろう。そして、作者さんの返した名前は、睦月にとっては最悪な支部の名前だった。

「ガイアセイバーズ、機動戦士ガンダム00支部ダブルオー」

「!?!?だ、00支部……」

「!?!?知っているのか!?!?」

作者さんの驚愕に満ちた返答が聞こえていないのか、睦月はややうつむいたまま全身をわなわなと震わせている。かつての忌わしい過去がフラッシュバックし、発狂しそうな自分を押さえ込むだけで精一杯なのだろう。

「睦月は今こんな状態なので、私が代わりに。睦月は、その00支部の唯一の生き残りなんです」

「!?!?どういふことなんだ!?!?」

「その質問にはお答えできかねます」

そう言つて、なぎさは立ち上がり、ミラクルライトを取り出してゲートを開こうとすると、作者さんが灰色のゲートを開く。

「せめて、帰りくらい送らせてくれ」

「ありがとうございます」

作者さんにお礼を述べたなぎさたちは、そのまま灰色のゲートをくぐつてもとの世界へと戻つていった。

次回予告

えりかとりんの裏切りが発覚し、実験動物モルモットにされるふたり

いつきは、そのふたりにある薬を投薬する

次回、『裏切りの代償』

仲間の裏切り、その代償はあまりに大きすぎて……

#31 史上最弱脱却作戦（後書き）

クロスオーバー終了、夢原信者さん、ありがとうございました！！

今回は、更新投げっぱなしだった外伝の更新予定

ですが、俺の気まぐれによってまたまた新作が投稿されるかも知れません

ここで読者の皆様に質問。

……………俺って、文才ありますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0490r/>

プリキュアvsプリキュア

2011年10月26日01時02分発行